

盛岡市内遺跡群

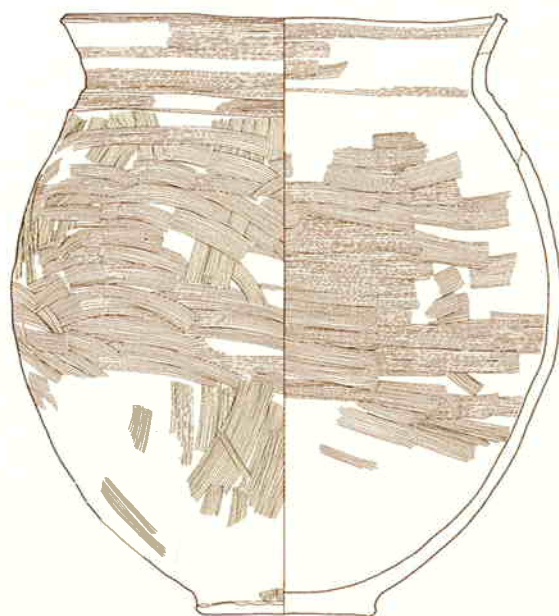
—— 平成15年度・16年度発掘調査報告 ——

宿田遺跡 第6次調査

二又遺跡 第5次調査

内村遺跡 第3次調査

台太郎遺跡 第55次調査



2005. 3

盛岡市教育委員会

序 言

盛岡市は、南へ流れる北上川と、支流の中津川、雫石川の合流点に位置します。この緑ゆたかな環境の中で、私達の祖先は自然と共生しながら、一万年以上にわたり、この地方独特の文化を育ててまいりました。現在の盛岡市には、縄文時代のはじめから江戸時代まで、517箇所の遺跡が存在します。その中には、国、県、市の指定史跡として、保存と活用が図られている遺跡もありますが、市街化等の開発等によって大きく姿を変え、消滅していく遺跡があることもまた事実であります。盛岡市では文化庁と岩手県教育委員会の指導のもと、個人住宅建設等の開発と埋蔵文化財保護との調整を図りながら、盛岡市内遺跡群の発掘調査を継続しております。また昨年6月には、待望の盛岡市遺跡の学び館を開館することができました。これも文化庁はじめ、皆様の篤いご助力の賜物と深謝いたしますとともに、私共はこの施設を拠点に、埋蔵文化財の保護と調査事業、普及事業等に一層邁進する所存であります。

本書は平成15年度、16年度の2ヵ年にわたって実施した発掘調査の報告書です。学術的な資料として、また郷土の歴史と文化を知る資料として、広くご活用いただけましたら幸いです。

最後になりましたが、事業の推進と発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご指導、ご助言を賜りました、文化庁記念物課、岩手県教育委員会生涯学習文化課をはじめ、関係各位に対し、厚く御礼を申し上げます。

平成17年3月

盛岡市教育委員会

教育長 石川 悌司

例 言

1. 本書は、平成15・16年度に国庫補助事業で実施した「盛岡市内遺跡群」の発掘調査報告書である。
2. 本書は遺構実測図及び遺物実測図など、多くの資料の提示を意図して作成した。編集執筆には、佐々木亮二、室野秀文があたり、佐藤和男、千田和文、似内啓邦、津嶋知弘、三浦陽一、神原雄一郎、藤村茂克、今野公顕、花井正香、佐々木紀子、岩城志麻、松川光海、鷹觜あゆみ、が協議して編集した。
3. 遺構平面位置は日本測地系（旧測地系）を用い、公共座標第X系を座標変換した調査座標で表示した。

宿田遺跡	調査座標原点	X - 32,000	・	Y + 25,300
二又遺跡	調査座標原点	X - 36,000	・	Y + 24,000
内村遺跡	調査座標原点	X - 36,000	・	Y + 24,000
台太郎遺跡	調査座標原点	X - 35,500	・	Y + 26,500
4. 高さは標高値をそのまま使用している。
5. 土層図は堆積のしかたを重視し、線の太さを使い分けた。土層注記は層理ごとに本文でふれ、個々の層位については割愛している。なお、層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（1994小山正忠・竹原秀雄）を参考にした。
6. 各遺跡における遺構記号は次のとおりである。

遺 構	記 号	遺 構	記 号	遺 構	記 号
竪穴住居跡	RA	土 坑	RD	溝 跡	RG
建 物 跡	RB	竪 穴	RE	配石・集石	RH
柱 列 跡	RC	焼 土	RF	古 墳	RX

7. 本書に使用した地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1「盛岡」[矢幅]である。
8. 発掘調査に伴う出土遺物及び調査記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管している。
9. 調査体制

〔1〕 平成15年度の職員体制

〔調査主体〕 盛岡市教育委員会

教育長 石川悌司、

〔調査総括〕 文化課長 大崎琢夫、

主 幹 高橋清明、 課長補佐 川村昇子、

副主幹兼文化財係長 千田和文、 文化財主査 似内啓邦、

〔調 査〕 文化財主査 室野秀文、

文化財主任 津嶋知弘、三浦陽一、

文化財主事 神原雄一郎、藤村茂克、今野公顕、花井正香、佐々木亮二、

文化財調査員 北田公子、岩城志麻、佐々木紀子、松川光海、野崎奈美、

〔2〕 平成16年度の職員体制

[調査主体] 盛岡市教育委員会

教育長	石川悌司、		
[事務局] 教育次長兼文化課長	阿部光雄、	課長補佐	川村昇子、
副主幹兼文化財係長	千田和文、		
文化財主任	津嶋知弘、神原雄一郎、	文化財主事	花井正香、
文化財調査員	北田公子、鎌田聖美、		

[遺跡の学び館]

館長	山本詔夫、(9月30日まで)	及川三治、(10月1日から)	
館長補佐	佐藤和男、	文化財主査	室野秀文、
文化財主任	三浦陽一、		
文化財主事	藤村茂克、今野公顕、	佐々木亮二、	
文化財調査員	岩城志麻、佐々木紀子、	松川光海、	
学芸調査員	鷹觜あゆみ		

〔3〕 発掘調査及び整理作業 (平成15・16年度)

浅沼はた、天沼芳子、泉山紀代子、井上勝子、遠藤恵理子、大宮安子、大森キヌ子、長内理恵、加藤高太郎、金沢達也、嘉糠和男、菊池武、工藤エキ、工藤繁子、工藤淳子、工藤則子、熊谷あさ子、熊谷静江、斎藤三郎、斉藤静子、斉藤幸恵、佐藤公一、澤野むつ子、白澤和子、杉田真樹子、鈴木賢治、駿河チヨ、高橋ツヤ、田貝恵子、竹花栄子、立花武良、谷藤貴子、玉井真由美、中島京子、野中蕃、樋口泰子、平野淑子、平賀真理子、藤田友子、藤原亮子、細田幸美、松田昭夫、三浦亮太、南幅洋子、武蔵照子、女鹿麗子、山下摩由美、山平昌治、吉田里和

〔4〕 地権者等 (平成15・16年度)

天沼安五郎、大下光義、猿館繁雄、猿館栄治、藤村光二、宮野庄一、宮野勝彦

〔5〕 調査指導・助言・協力 (平成15・16年度)

文化庁記念物課、岩手県教育委員会、岩手県埋蔵文化財センター、岩手県立博物館、工藤雅樹(東北歴史博物館)、小田野哲憲、中村英俊、鎌田勉、日下和寿、(岩手県教育委員会)、赤沼英男(岩手県立博物館)、樋口知志(岩手大学)、佐々木清文、金子佐知子、福島正和(岩手県埋蔵文化財センター)、

10. 遺物の表現について

- (1) 土器……土器の区分は、縄文土器・土師器・あかやき土器・須恵器に大別した。
 - a 縄文時代早期、前期初頭に属する土器の実測図・拓本の縮小率は1/2とし、その他は1/3とした。
 - b 挿図の土器の配列は器種・器形・文様モチーフ及び施文技法でまとめた。
 - c 縄文土器で稜線・沈線の実践・破線で表し、陰影は表現していない。
 - d 土師器の黒色処理や彩色されたものは、網目（スクリーントーン）で表現した。
- (2) 石器
 - a 剥片石器の縮小率は2/3、礫石器は1/3とした。
 - b 石器の展開順序は、基本的に左側に表面（背面）、中央に右側面、右側に裏面（腹面・主要剥離面）を配列し、必要に応じて側縁・縦断面・横断面を付け加えた。
 - c 挿図の配列は出土層位順に配列し、さらに器種ごとにまとめ、配列した。
 - d 剥片石器の摩擦痕は網目（スクリーントーン）で示し、礫石器の自然面はドットで示した。
- (3) 土製品・石製品
 - a いずれも縮小率を2/3とした。
 - b 挿図の配列は出土した層位順とし、さらに器種ごとにまとめて配列した。
- (4) 挿図中の記号番号は遺物の出土地点及び出土層位を表している。

(例) RA701 B層 → RA701 竪穴住居跡埋土B層より出土

(例) G6-A20 III層

↓ ↓ ↓

※1 ※2 ※3

 - ※1 大グリッド……遺跡の全体を50mメッシュで区切り設定した。北西隅を起点に西から東にA・B・C……のアルファベット、北から南には1・2・3……のアラビア数字を付し、A6、C12など、両方の組み合わせでグリッド名を表した。
 - ※2 小グリッド……大グリッドの中をさらに2mメッシュで区切り、北西隅を起点として西から東にA～Yのアルファベット、北から南に1～25のアラビア数字を付し、グリッド名は両方の組合せで表した。
 - ※3 遺物の出土層位を示す。

11. 遺構の表現について

各遺構の平面図で、複数の遺構を同一図面に表示する場合、説明する遺構は実線で表し、重複遺構は一点鎖線で表し、掘込面に層位差のある重複遺構は二点鎖線で表した。

12. 遺跡範囲については、過去の調査成果と遺跡の地形、遺物の散布状況をもとにして、推定の範囲を表している。

目 次

序 言	II 平成15・16年度発掘調査概要…………… 2
例 言	III 調査成果…………… 5
目 次	1 宿田遺跡第6次調査…………… 5
挿図目次・図版目次・表目次・写真図版目次	2 二又遺跡・内村遺跡……………22
I 環 境…………… 1	3 台太郎遺跡第55次調査……………37

表 目 次

第1表 平成15年度調査一覧…………… 4	第5表 内村遺跡調査成果……………24
第2表 平成16年度調査一覧…………… 4	第6表 玉類計測表……………53
第3表 宿田遺跡調査成果…………… 8	第7表 土坑一覧表……………54
第4表 二又遺跡調査成果……………24	

挿 図 目 次

第1図 地形分類と遺跡分布図…………… 3	第20図 内村遺跡第3次調査区全体図……………32
第2図 宿田遺跡位置図…………… 5	第21図 R A 001竪穴住居跡 ……33
第3図 宿田遺跡全体図…………… 7	第22図 R A 001竪穴住居跡出土遺物 ……33
第4図 宿田遺跡第6次調査区全体図…………… 9	第23図 R B 001掘立柱建物跡、R G 003、 004溝跡 ……35
第5図 R D 013・014・015・016・017・018・ 019・020土坑……………11	第24図 台太郎遺跡位置図……………37
第6図 R D 013・014・017・018・019土坑 出土遺物……………12	第25図 台太郎遺跡全体図……………39
第7図 R G 508・509円形周溝 510・511溝跡 ……14	第26図 台太郎遺跡第55次調査区全体図……………41
第8図 R G 508・509円形周溝 510・511溝跡 断面図……………15	第27図 R A 613竪穴住居跡 ……43・44
第9図 遺物包含層出土土器……………17	第28図 R A 613竪穴住居跡出土土器（1）……………46
第10図 遺物包含層出土石器（1）……………18	第29図 R A 613竪穴住居跡出土土器（2）……………47
第11図 遺物包含層出土石器（2）……………19	第30図 R A 613竪穴住居跡出土土器（3）……………48
第12図 二又遺跡・内村遺跡位置図……………22	第31図 R A 613竪穴住居跡出土土器（4）……………49
第13図 二又遺跡・内村遺跡全体図……………23	第32図 R A 613竪穴住居跡出土土器（5）……………50
第14図 二又遺跡第5次調査区全体図……………25	第33図 R A 613竪穴住居跡、 R G 198溝跡出土遺物 ……51
第15図 R A 006竪穴住居跡 ……27	第34図 中世以後の土坑……………55
第16図 R A 006竪穴住居跡土層断面図 ……28	第35図 中近世の溝跡・掘立柱列跡・柱穴群……………57
第18図 R A 006竪穴住居跡出土土器（2） ……30	第36図 R E 069竪穴 ……58
第19図 R G 002・003・004溝跡 ……31	第37図 近世遺物……………59

写真図版目次

- 第1 図版 宿田遺跡（調査区全景、出土土器・石器）
- 第2 図版 二又遺跡（調査区全景、出土土器）
- 第3 図版 内村遺跡（調査区全景、常滑大甕）
- 第4 図版 台太郎遺跡（調査区全景、R A 613 竪穴住居跡）
- 第5 図版 台太郎遺跡（土器出土状況、出土土器）

I 環境

1. 地理的環境

盛岡市は東に北上山地、西に奥羽山脈が連なり、北西には岩手山（2,038m）を望む。中央の北上盆地には東北一の大河である北上川が流れる。北上山地と奥羽山脈は、構成する地質やその形成年代が異なるため、東西の地形の様相は大きく異なる。また、岩手山を含む八幡平火山地域の火山活動も盛岡の地質・地形に大きく影響を及ぼしている。

北上山地 北上山地は日本列島の中でも形成年代の古い地層が分布する地帯であり、地質構造上、古生代や中生代の堆積岩および花崗岩からなる。北上山地はその主要な境界である早池峰構造帯により、北部北上山地と南部北上山地に区分される。盛岡市東部は早池峰構造帯の西縁にあたる。これらの山地縁辺には、中津川・築川などの北上川水系の河川やその支流により浸食された丘陵地や中位・低位の段丘が発達している。

盛岡市北東部を流れる中津川は、その支流である米内川と盛岡市浅岸付近で合流して水量を増し、市街地を西流して北上川と合流する。

築川は盛岡市東部北上山地の分水嶺となる岩神山（1,103m）の西斜面より流れ、支流である根田茂川と盛岡市水沢付近で合流し、閉伊街道（宮古街道）に沿って蛇行しながら、盛岡市東安庭付近で北上川と合流する。その流れは丘陵地や高位段丘面を開析して流域沿いに中・小規模な低位段丘を形成する。

奥羽山脈 奥羽山脈は北上山地に比べると比較的新しい新第三紀からなる非火山地域と、第四紀に形成された新規火山地域に区別される。岩手山はこの新規火山地域に含まれる。奥羽山脈より東流する雫石川は、雫石盆地を形成し盛岡市北の浦付近において急激に流路が狭められ、北上平野に流れ込む。雫石川北岸および南岸ではその地質が大きく異なる。

雫石川北岸には、岩手山起源の大石渡岩層なだれ堆積物を基盤とした火山性砂台地（滝沢台地）が広がっている。その範囲は盛岡市北部から滝沢村北部まで広範囲に及んでいる。

雫石川南岸は、雫石川の流路転換によって運ばれた土砂で形成された沖積層が広がっている。その規模は東西約8.0km、南北3.5kmで、自然堤防と後背湿地が発達する自然堤防地帯となっている。現在は宅地造成や圃場整備が進み、ほとんど旧地形を留めていないが、航空写真などを見ると旧河道の流路が残された水田や古い住宅街の区割り等で確認できる。

2. 歴史的環境

縄文時代 盛岡市内で旧石器時代の遺跡はほとんど確認されていない。明確に遺跡が確認されるのは縄文時代草創期からである。滝沢台地上に立地する大新町遺跡からは、草創期の爪形文土器が出土している。滝沢台地上には後続する縄文時代早期の遺跡が数多く存在し、大新町遺跡以外にも大館堤・館坂・前九年・宿田遺跡などで早期初頭～末葉の土器が出土している。

縄文時代前期の集落は少ないが、市街地東側丘陵地域において、上八木田Ⅰ遺跡、畑遺跡などで集落が確認されている。縄文時代中期になると遺跡数は爆発的に増加し、雫石川南岸の沖積平野を除く、広い地域に分布する。繫Ⅴ・大館町・柿木平・川目Ⅲ遺跡・湯沢遺跡など、主要河川の流域や山麓の扇状地などに大規模な拠点集落が営まれるようになる。

後期から晩期には、集落の規模は小さくなり、遺跡数も減少する。柿木平遺跡や大葛遺跡では後期初頭の集落。萩内遺跡や湯壺遺跡では後期から晩期の集落が確認されている。また、上平遺跡では晩期の遺物包含層、手代森遺跡では晩期の集落と遺物包含層が確認されている。

弥生～古代 弥生時代の遺跡数は少ないが、繫Ⅵ遺跡では前期の竪穴住居と中期の再埋葬が確認されており、浅岸地区の向田遺跡、堰根遺跡では前期と終末期の竪穴住居跡が確認されている。

古墳時代の集落遺跡は現在のところ確認されていないが、永福寺山遺跡や薬師社脇遺跡で北海道系の形態をもつ土坑墓群が検出されている。永福寺山遺跡では後北C2-d式土器と古式土師器が共伴して出土し、薬師社脇遺跡では古式土師器が埋納されていた。

古墳時代終末から奈良時代にかけて、雫石川南岸等沖積面の遺跡が飛躍的に増加する。7世紀中ごろには上田蝦夷森古墳群、8世紀代には太田蝦夷森古墳群などの終末期古墳が築造され、野古A遺跡、台太郎遺跡、百目木遺跡などで安定した集落が形成される。

平安時代になると、803年に陸奥国最北端の城柵志波城が造営された。志波城は陸奥国北端地域の経営拠点であると同時に、北方世界との接触点でもあったが、雫石川の被害を理由に、813～814年には徳丹城へ規模を縮小して移転している。その後9世紀後半より、陸奥国北部の経営体制は鎮守府胆沢城に集約されていく。志波城東側の林崎遺跡、大宮北遺跡、小幅遺跡では、集落の中に官衙的な建物群が存在している。同様の建物跡は堰根遺跡でも確認されており、在地の有力者が律令体制を背景に台頭する様子がうかがえる。この時期の集落は沖積面だけでなく、上猪去・猪去館・新道Ⅰ遺跡など、山麓台地や丘陵の斜面部にも拡がりを見せる。

11・12世紀の遺跡はひじょうに少ないが、浅岸堰根遺跡や稲荷町遺跡で12世紀の村落や屋敷、居館の遺構が確認されている。また、内村遺跡では常滑の大甕が出土している。

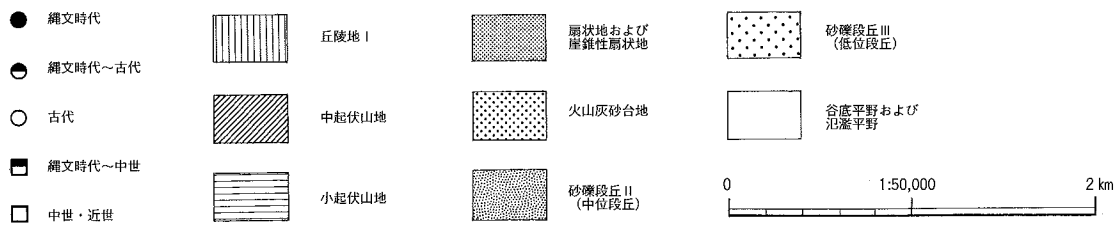
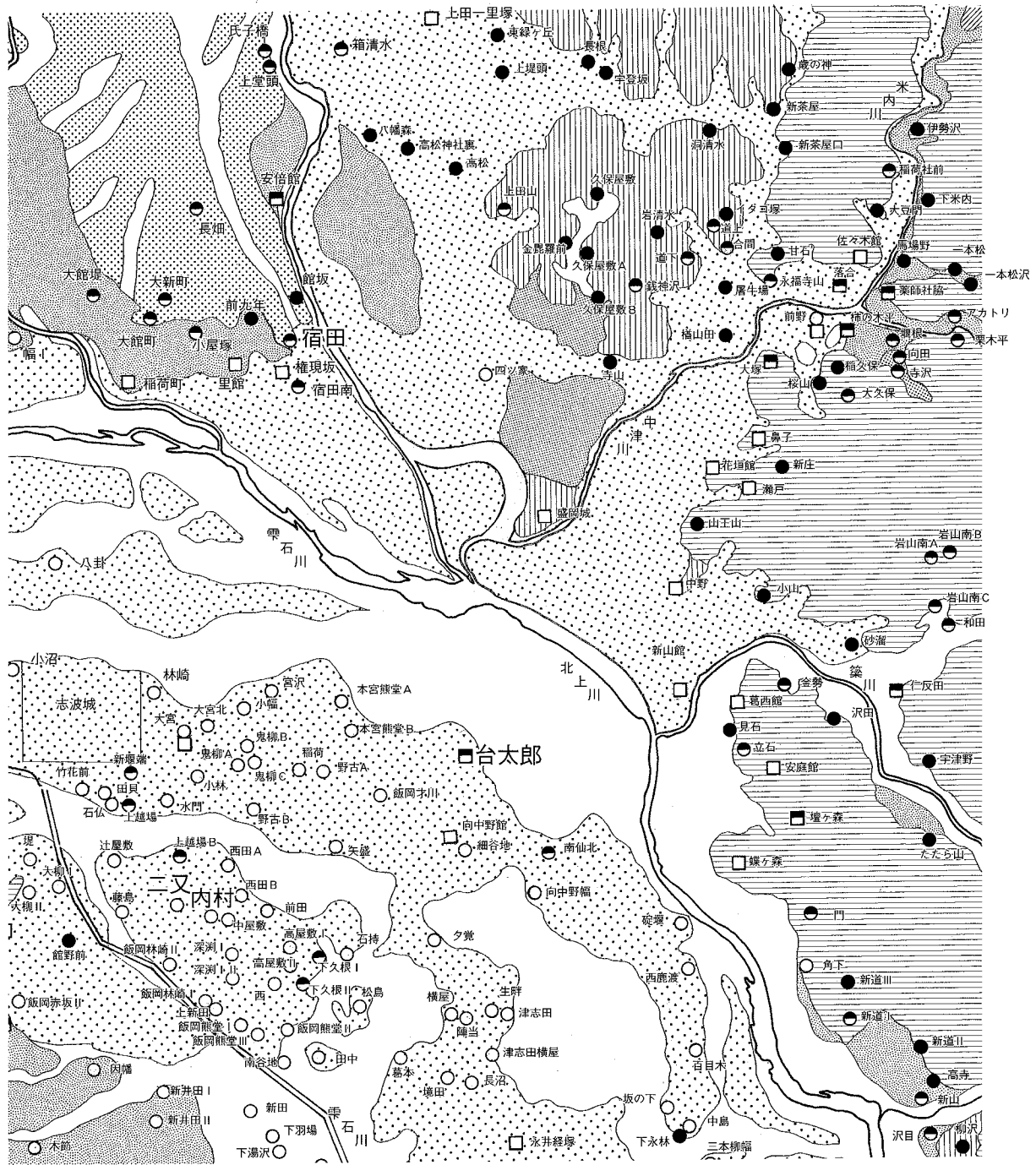
中世以後 鎌倉時代以後については、台太郎遺跡で居館と村落跡、墓域等が確認されている。戦国末期の盛岡周辺は、南部氏、斯波氏などの衝突が激しかった地域であるが、市内の城館跡の多くはこの時代のものであろう。

Ⅱ 平成15・16年度発掘調査の概要

1. 平成15年度事業の概要（第1表）

市内の遺跡 盛岡市内には、現在517箇所の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。近年では周知の遺跡内における大規模公共事業（区画整理、道路等）、各種民間開発、個人住宅建築等の土地開発にともなう事前の発掘調査や試掘調査を毎年80件前後実施している。平成15年度は発掘調査・試掘調査（公共事業・各種民間開発・個人住宅等）をあわせて56件実施した。

発掘調査 平成15年度の国庫補助事業（盛岡遺跡群発掘調査事業）で実施した発掘調査は、内村遺跡第3



第1図 地形分類と遺跡分布図

次調査、宿田遺跡第6次調査、二又遺跡第5次調査、志波城跡第94・95次調査の5件である。このうち、個人住宅建築にともなう事前調査は内村遺跡、宿田遺跡、二又遺跡の3件を実施した。国指定史跡志波城跡の第94・95次調査は、史跡現状変更(個人住宅建て替え)にともなう事前調査で、調査区はいずれも郭内北西部に位置する。なお、志波城跡第94・95次調査の報告については、平成17年度刊行予定の志波城跡平成15・16年度調査報告書にあわせて掲載するものであることから、第1表に所在地、調査期間、調査面積を示すのみとした。

遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因
内村遺跡(第3次)	盛岡市下飯岡2地割108番地	03.04.17 03.09.22	183m ²	個人住宅建築
宿田遺跡(第6次)	盛岡市前九年一丁目4番14号	03.07.10 03.08.05	70.8m ²	個人住宅建築
二又遺跡(第5次)	盛岡市下飯岡1地割35番地1	03.09.01 03.09.18	77.5m ²	個人住宅建築
志波城跡(第94次)	盛岡市中太田吉原27番1、2、3	03.07.17 03.08.04	163m ²	史跡現状変更 (個人住宅建築)
志波城跡(第95次)	盛岡市中太田方八丁86番2	03.09.25	76m ²	史跡現状変更 (個人住宅建築)

第1表 平成15年度調査一覧

2. 平成16年度事業の概要(第2表)

発掘調査 平成16年度は、発掘調査を24件実施した。このうち国庫補助事業(盛岡遺跡群発掘調査事業)で実施した発掘調査は、台太郎遺跡第55次調査、大館町遺跡77次調査、野古A遺跡第26次調査の3件で、野古A遺跡第26次調査は試掘調査を実施した結果、遺構・遺物が確認されなかったため第2表に所在地・調査期間・調査面積を示すのみとした。

岩手県指定史跡大館町遺跡は、盛岡周辺部における縄文時代中期の拠点集落遺跡として、平成12年11月に県指定史跡に指定され、現在、集落の規模や内容を確認する範囲確認調査を継続して実施している。今年度の第77次調査では、居住区域と中央広場と想定される住居空白域の状況を確認するため遺跡中央部を調査し、縄文時代中期の堅穴住居跡1棟を精査している。その他の遺構は検出だけにとどめ、遺構の精査は来年度に実施することにした。報告については、本書では割愛し、平成17年度刊行予定の大館町遺跡平成15・16年度調査報告書にあわせて掲載するものである。

遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因
台太郎遺跡(第55次)	盛岡市向中野字向中野35-26	04.06.07 04.07.09	202.6m ²	個人住宅建築
大館町遺跡(第77次)	盛岡市大新町209-3の一部	04.11.08 04.12.14	570m ²	範囲確認学術調査
野古A遺跡(第26次)	盛岡市本宮字野古52-1、52-2	04.06.23	36m ²	個人住宅建築

第2表 平成16年度調査一覧

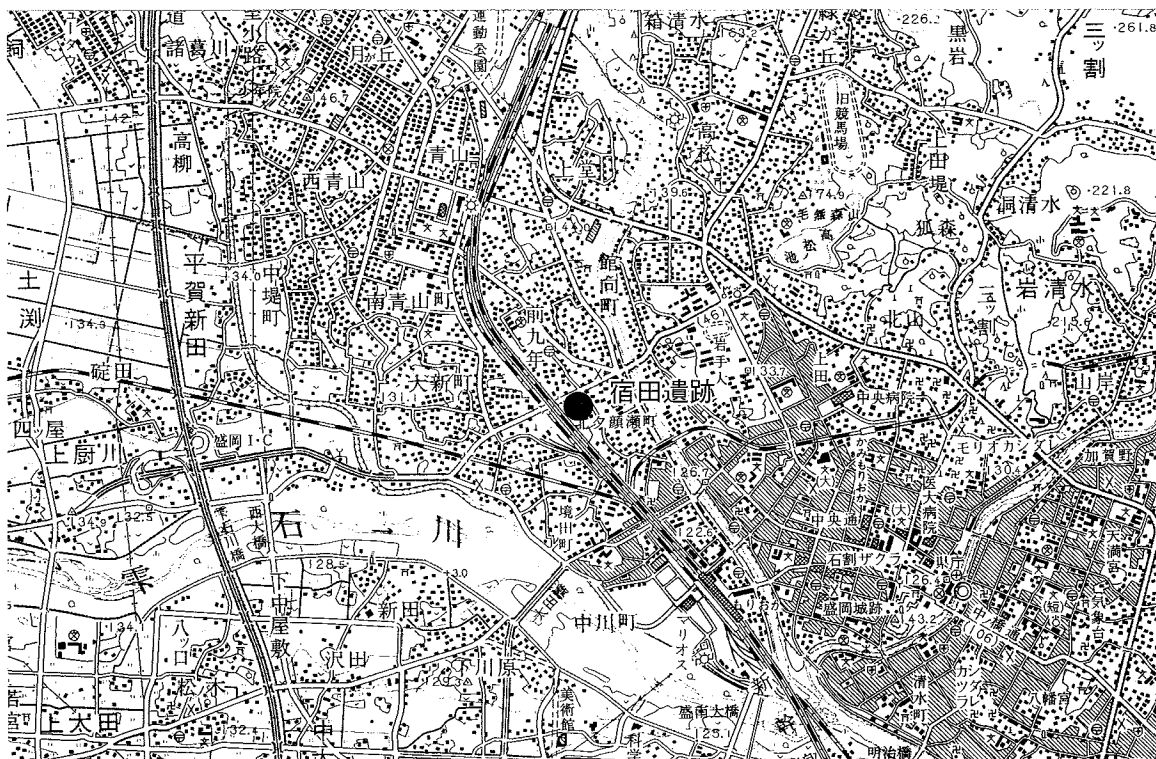
Ⅲ 調査成果

1. 宿田遺跡（第6次調査）

(1) 遺跡の位置と概要

位置・地形 宿田遺跡は、盛岡市街地中心部より北西約2.5kmの前九年一丁目に所在する。盛岡市立厨川小学校の北西約120mから230mの地点で、現況は主に宅地である。遺跡の範囲は南北約210m、東西約170mと推定される。遺跡中心部の標高は約138mである。この場所は滝沢台地（火山性砂台地）の南端部に位置し、南辺部は旧雫石川の河道に侵食され、比高4～6mの段丘崖となっている。西側はしだいに高さを減じ、滝沢台地よりも一段低い沖積段丘面に続く。東側は木賊川に開析された小さな谷に限られ、北側はゆるやかに高さを増しながら、前九年二・三丁目方面の台地に続いている。

地質 この滝沢台地を構成する主要火山灰層のうち、最上層が分火山灰層で、主に岩手山・秋田駒ヶ岳・十和田火山を噴出起源とする。その下部には秋田駒ヶ岳からの柳沢軽石層と小岩井軽石層、その直下には約13,000年前に降下した十和田火山起源の八戸火山灰（八戸火砕流）と呼ばれるクリーム色を帯びた薄い軽石層が堆積している。また、滝沢台地南側の一段低い段丘は、



第2図 宿田遺跡の位置図（1：50,000）

深部には黒色の腐食土層が堆積し、その上には水性堆積のシルト層や火山灰層が堆積し形成されている。下層の腐食土層には縄文時代中期の土器等が包含されている。

周辺の遺跡 滝沢台地南縁部には宿田遺跡のほかにも多数の遺跡が立地する。台地南縁部では西から大館堤遺跡（縄文時代早期～中期・弥生時代・古代）、大館町遺跡（縄文時代早期～中期・弥生時代・古代）、大新町遺跡（縄文時代草創期～後期・古代）、小屋塚遺跡（縄文時代早期～後期・古代）、前九年Ⅰ遺跡（縄文時代早期～中期・古代）、館坂遺跡（縄文時代早期）、安倍館遺跡（縄文時代草創期～中期・続縄文・中世）など、縄文時代から古代まで幅広い時代にわたって遺跡が存続している。このうち、大新町遺跡では縄文時代草創期の爪形文土器、早期の押型文土器、沈線文土器、貝殻文土器など、早期の土器を幅広く出土する遺物包含層及び集落跡が確認されている。

大新町遺跡に隣接する大館町遺跡は縄文時代中期の大木8 a式から8 b式を主体とする大規模集落遺跡であり、岩手県史跡に指定されている。ここでは縄文時代のほか、弥生時代前期の竪穴住居跡、古墳時代終末期から奈良・平安時代の集落も確認されている。

大新町遺跡東側の小屋塚遺跡では、縄文時代中期のやや小規模な集落のほか、大形の貯蔵穴群が確認されている。また遺跡南東部の緩斜面からは奈良時代集落が確認されている。

滝沢台地南側の一段低い沖積段丘面においては、稲荷町遺跡（古代末～中世・近世）、里館遺跡（中世）など、比較的新しい時代の遺跡が立地する。各遺跡は埋没谷や旧河道等により画されている。

（2）これまでの調査（第3表）

宿田遺跡は昭和25年頃に小岩末治氏によって縄文時代早期の遺跡であることが確認されていた。当時、岩手県内において縄文時代早期の遺物発見例は少なく、稀であったことから小岩氏は表面採集した資料を『岩手県史第1巻（上古編）』（1960年）に紹介している。

その後、盛岡市教育委員会は平成2年度～13年度までに、個人住宅や共同住宅建替えに伴い、4件の本調査を実施している（第3図）。

第1次調査区は遺跡中央部に位置し、縄文時代の土坑4基、古墳時代の土坑1基、奈良～平安時代の円形周溝5基が検出されたほか、遺物包含層より縄文時代早期後葉の槻木Ⅰ式土器、少量だが北海道系の土器である北大Ⅰ式土器、5世紀代の土師器片、黒曜石製の搔器・剥片が出土している。

第2次調査区は遺跡南部に位置し、縄文時代早期後葉の土坑1基が検出され、槻木Ⅰ式の土器片が出土している。

第3次調査は遺跡南端部に位置し、東西に延びる時期不明の溝跡を検出している。

第4次調査区は第1次調査区の東側に隣接し、縄文時代早期の土坑6基、古代の土坑2基、円形周溝3基が検出された。縄文時代の土坑からは早期後葉の条痕文土器である槻木Ⅰ式とムシリⅠ式が共伴して出土しており、早期の土器編年を考える上で貴重な資料となっている。



第3図 宿田遺跡全体図 (1:1,000)

次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構・遺物
1	盛岡市前九年一丁目119-9、10	個人住宅建築	144m ²	90.12.08 90.12.18	縄文時代早期土坑跡、古代の円形周溝、縄文時代早期の土器・石器 ほか
2	盛岡市前九年一丁目121-2	個人住宅建築	345m ²	93.12.27 93.12.28	縄文時代早期土坑跡
3	盛岡市前九年一丁目4-76	個人住宅建築	100m ²	96.11.08	時期不明溝跡
4	盛岡市前九年一丁目5-19	個人住宅建築	175m ²	01.10.01 01.10.31	縄文時代早期土坑跡、古代の円形周溝、縄文時代早期の土器・石器 ほか

第3表 宿田遺跡発掘調査一覧

(3) 平成15年度の調査（第5次・6次調査）

平成15年度は2件の本調査を実施している。第5次調査区は遺跡西側の、前九年一丁目4番14号に位置する。調査期間は平成15年4月14日～4月24日、調査面積は724m²である。

調査の結果、時期不明の溝跡、旧河道を検出し、古代の土師器片数点および古銭（寛永通寶）1点などが出土している。

第6次調査 第6次調査区は遺跡中央部に位置し、縄文時代早期の土坑や古代の円形周溝など多数の遺構が密集して検出された第1・4次調査区に隣接している。盛岡遺跡群発掘調査事業（国庫補助事業）として調査した。調査期間は平成15年7月10日～8月5日、調査面積は70.8m²である。

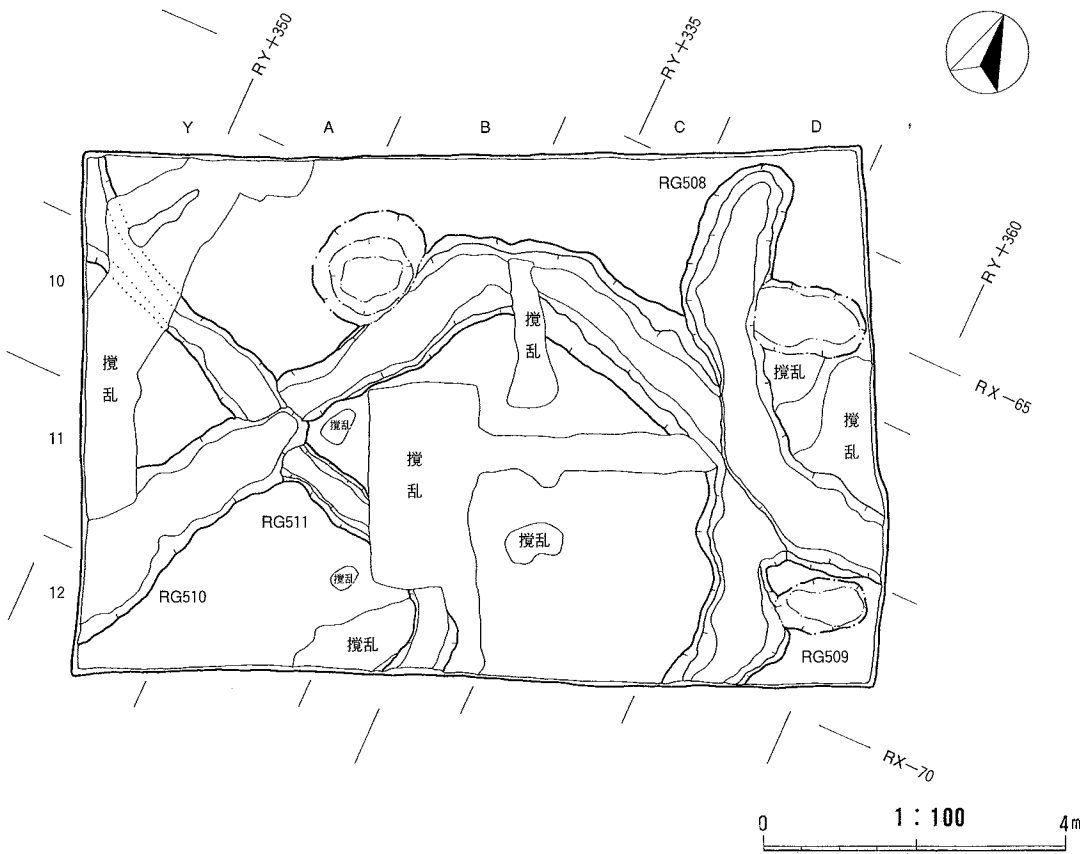
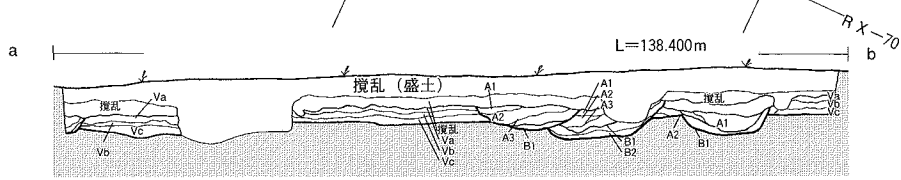
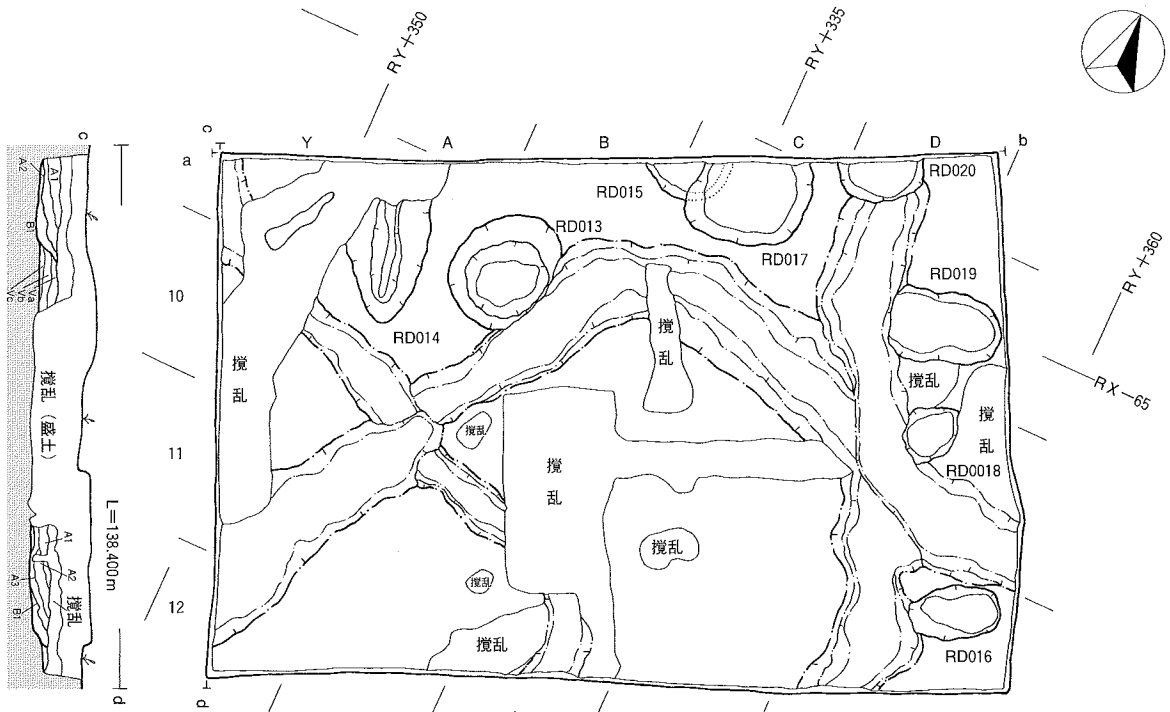
検出遺構（第4図） 調査の結果、縄文時代の土坑8基（RD013～020）、古代の円形周溝2基（RG508～509）、溝跡2条（RG510, 511）、また、縄文時代早期～前期末にかけての遺物包含層を検出した。

土坑からの出土遺物はわずかであるが、早期後葉の土器が出土している土坑の埋土と、そのほかの土坑の埋土を比較すると色調・混合土・しまりなどが近似していることから縄文時代早期に属するものと考えられる。RD014土坑は時期を示す遺物が出土していないが、形態などから縄文時代後期～晩期と考えられる。遺物包含層からは、縄文時代早期初頭～後葉・前期初頭の土器・石器が出土している。

① 縄文時代の遺構・遺物

RD013土坑（第5図）

時 期	縄文時代早期	平面形	楕円形	長軸の傾き	N11° E	重複関係	なし
規 模	長軸上端1.62m・下端0.64m、短軸上端1.26m・下端0.66m						
掘 込 面	削平	検 出 面 Va層上面					
埋 土	自然堆積によるものである。A・B層に大別され、A層は2層、B層は4層に細分される。 A層— A1層は暗褐色土を主体に、塊状の暗褐色土とスコリア粒を多量に含む層である。A2層は暗褐色土を主体に黒色土を粒状に少量含む層である。 B層— 褐色土を主体として黒褐色土を粒状に含み、スコリア粒を多量に含む層である。各層はスコリア粒の混入の割合で細別される。硬くしまる層である。						
壁の状態	外傾して立ち上がる。深さは0.64mをはかる。						



第4図 宿田遺跡第6次調査区全体図（上：縄文時代、下：古代）

遺物 土器（第6図1・2）1・2は外面に条痕を施し、石英粒を胎土に多く含む深鉢である。
石器（第6図5）5は刃部を両面調整する頁岩製の篋状石器である。

RD014土坑（第5図）

時期 縄文時代後期～晩期 平面形 溝状(北半部を攪乱) 重複関係 なし
規模 長軸上端1.56m以上・下端1.22m、短軸上端1.08m・下端0.12m
掘込面 削平 検出面 Va層上面
埋土 自然堆積によるものである。A・B層に大別され、A層は4層、B層は2層に細分される。
A層— A1・2層は暗褐色土を主体に粒状の黒褐色土を少量含む。A3・4層は黒褐色土を主体として、粒状の暗褐色土を多量に含む。各層ともスコリア粒を少量含み、硬くしまる。
B層— 暗褐色土を主体として、黒褐色土を粒状に少量含む層である。各層はスコリア粒を多量に含む。
壁の状態 底面から上部0.9mまでは直立ぎみに立ち上がり、さらに上部は大きく外傾する。深さは1.22mをはかる。
遺物 石器（第6図6）6は両面に調整剥離を施す頁岩製の削器である。

RD015土坑（第5図）

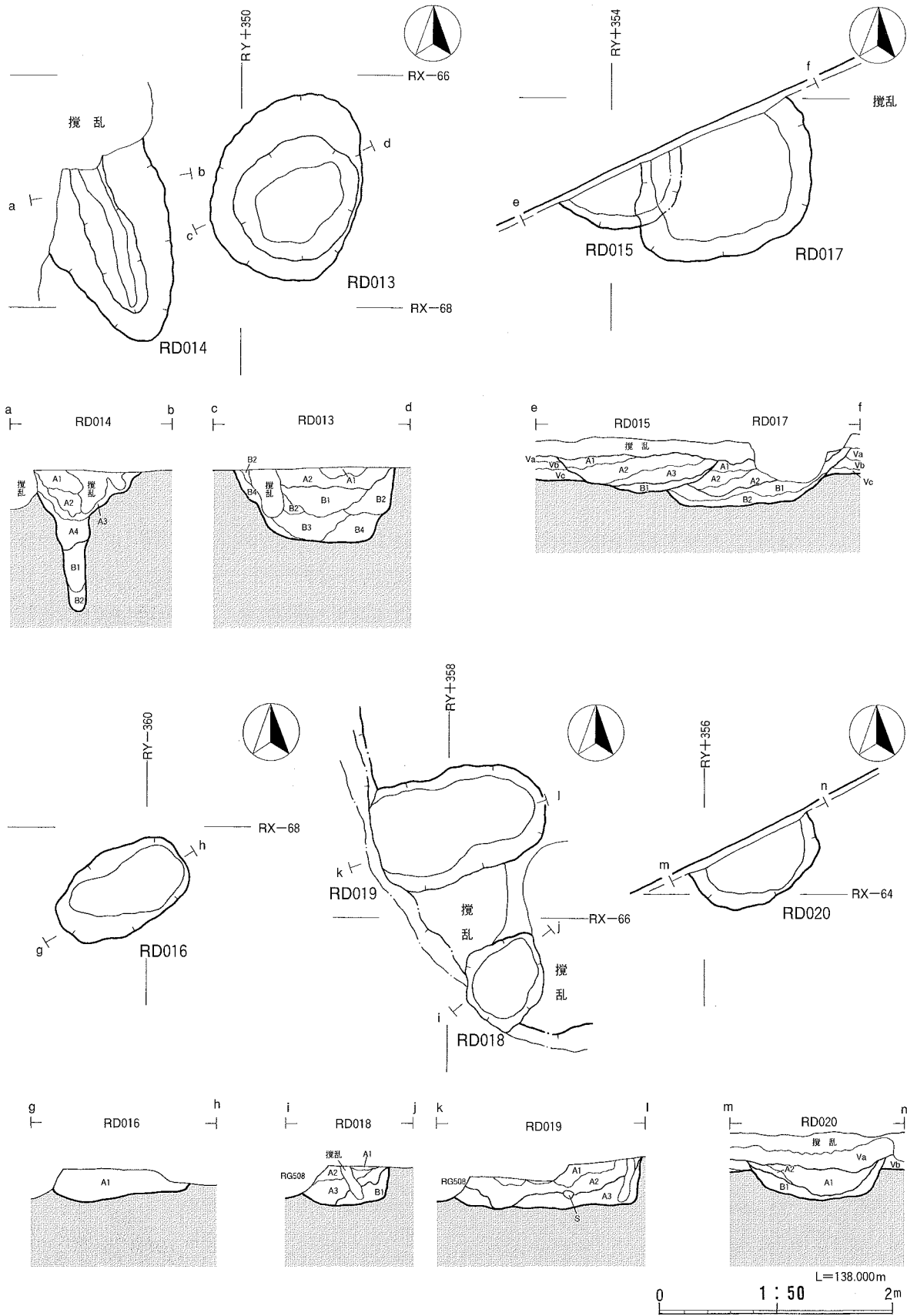
時期 縄文時代早期 平面形 不整円形 重複関係 RD017を切る
規模 上端1.15m・下端0.96mをはかる
掘込面 削平 検出面 Va層上面
埋土 自然堆積によるものである。A・B層に大別され、A層は3層に細分される。
A層— 暗褐色土を主体に、黒褐色土を粒状に少量含む層である。各層は黒褐色土の混入の割合で細別される。
B層— 褐色土を主体として、暗褐色土を粒状に少量含む層である。
壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは0.25mをはかる。 遺物 なし

RD016土坑（第5図）

時期 縄文時代早期 平面形 楕円形 長軸の傾き N55° E 重複関係 なし
規模 長軸上端1.18m・下端0.88m、短軸上端0.72m・下端0.42mをはかる
掘込面 削平 検出面 Va層上面
埋土 自然堆積によるものである。黒褐色土を主体に暗褐色土と黄褐色土を粒状に少量を含む。
壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは0.29mをはかる。 遺物 なし

RD017土坑（第5図）

時期 縄文時代早期 平面形 不整円形 重複関係 RD015に切られる
規模 上端1.48m・下端1.18mをはかる
掘込面 削平 検出面 Va層上面
埋土 自然堆積によるものである。A・B層に大別され、A層は3層、B層は2層に細分される。



第5图 RD013·014·015·016·017·018·019·020土坑

A層一 暗褐色土を主体に、混入する混合土の割合で各層は細別される。A 1層は粒状の褐色土を少量含む。A 2層は粒状の黄褐色土を、A 3層は粒状の黒褐色土をそれぞれ少量ふくむ。各層ともスコリア粒を少量含む。

B層一 暗褐色土を主体として、黄褐色土を塊状に含む層である。

壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは0.34mをはかる。

遺物 土器(第6図3)3は外面に微隆起線文を、内面に条痕文を施す深鉢体部である。

RD018土坑(第5図)

時期 縄文時代早期 平面形 不整楕円形 重複関係 なし

規模 長軸上端0.83m・下端0.68m、短軸上端0.68m・下端0.48mをはかる

掘込面 削平 検出面 Va層上面

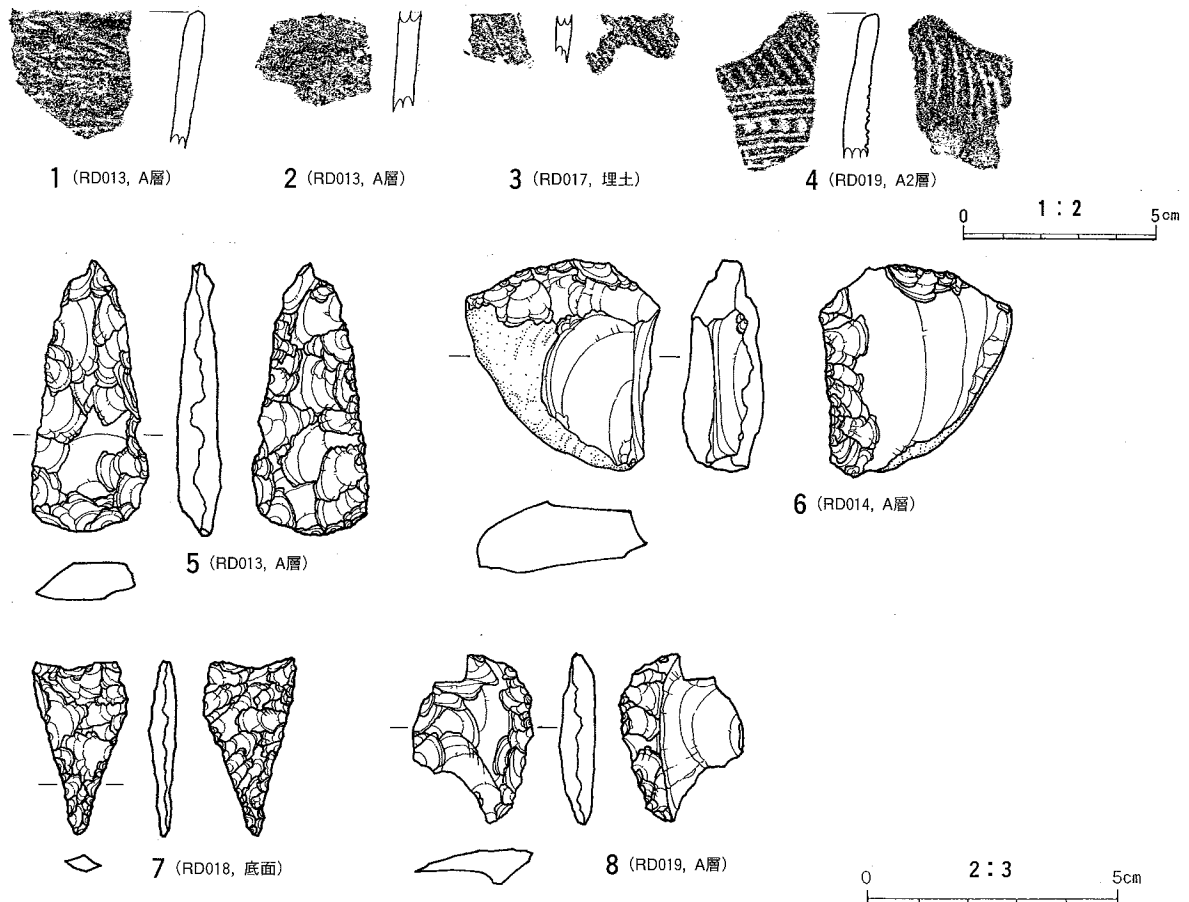
埋土 自然堆積によるものである。A・B層に大別され、A層は3層に細分される。

A層一 黒褐色土を主体に、暗褐色土を粒状に少量含む層である。各層は暗褐色土の混入の割合で細別される。

B層一 暗褐色土を主体として、黄褐色土を塊状に少量含む層である。

壁の状態 直立ぎみに立ち上がる。深さは0.34mをはかる。

遺物 (第6図7)7は両面両側縁に調整剥離を施す頁岩製の石錐である。先端はやや摩滅している。



第6図 RD013・014・017・018・019土坑出土遺物

R D 0 1 9 土坑 (第5図)

時 期	縄文時代早期	平面形 楕円形	長軸の傾き E15° N	重複関係 なし
規 模	長軸上端1.50m・下端1.42m、短軸上端0.88m・下端0.62mをはかる			
掘 込 面	削平	検 出 面	Va層上面	
埋 土	自然堆積によるものである。A・B層に大別され、A層は2層に細分される。 A層— A1層は黒褐色土を主体に、暗褐色土を粒状に少量含む層である。A2層は褐色土を主体とし、粒状の黒褐色土と黄褐色土を少量含む層である。 B層— 黄褐色土を主体として、黒褐色土を塊状に少量含む層である			
壁の状態	直立ぎみに立ち上がる。深さは0.40mをはかる。			
遺 物	土器 (第6図4) 4は波状口縁を呈する貝殻文土器である。波頂部に斜位貝殻腹縁文を施し、多条の横位平行沈線間に連続刺突を加え、内面波頂部にも横位貝殻腹縁文を施す。 石器 (第6図8) 8は頁岩製の削器の欠損部分である。背面→腹面の順番で調整剥離を施す。			

R D 0 2 0 土坑 (第5図)

時 期	縄文時代早期	平面形 円形?	重複関係	なし
規 模	上端1.15m・下端0.92mをはかる			
掘 込 面	削平	検 出 面	Vb層上面	
埋 土	自然堆積によるものである。A・B層に大別され、A層は2層に細分される。 A層— 暗褐色土を主体に、スコリア粒と黄褐色土を粒状に少量含む層である。 B層— 褐色土を主体として、スコリア粒と黄褐色土を粒状に少量含む層である			
壁の状態	外傾して立ち上がる。深さは0.25mをはかる。 遺 物 剥片が1点出土している。			

② 古代の遺構と遺物

R G 5 0 8 円形周溝 (第7図・8図)

平面形	北西部に開口部を持つ馬蹄形と推定される			重複関係 R G 509を切る。
規 模	周溝外径5.80m以上、内径4.42m以上・溝上端幅1.26~0.85m・下端幅0.84~0.40mをはかる。 深さは0.15~0.42m。			
掘 込 面	削平	検 出 面	Va層上面	
埋 土	自然堆積によるものである。A・B層に大別され、A層は4層、B層は2層に細分される。 A層— A1層は暗褐色土を主体に、炭化物と黄褐色土を粒状に少量含む層である。A2~A4層は黒褐色土を主体に暗褐色土を粒状に少量含む層で、暗褐色土の混入の割合で細別される。各層ともスコリア粒を微量に含む。 B層— 暗褐色土を主体として黒褐色土を粒状に含み、スコリア粒を多量に含む層である。各層は黒褐色土の混入の割合で細別される。A層に比べてしまりが無い。			
壁の状態	外傾して立ち上がる。			
遺 物	図示していないが土師器坏と甕の小片が出土している。			



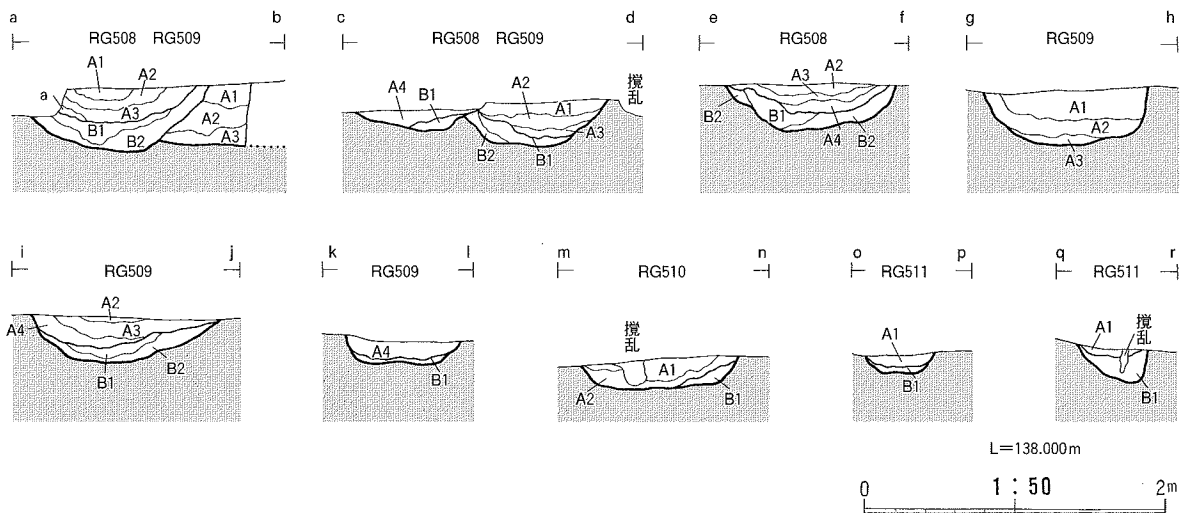
第7図 RG508・509円形周溝、510・511溝跡

RG509円形周溝（第7図・8図）

平面形 円形（馬蹄形？） 重複関係 RG508に切られる。RG510・511との重複関係不明。
 規模 周溝外径7.32m以上、内径5.84m以上・溝上端幅1.28～0.56m・下端幅0.70～0.30mをはかる。
 深さは0.17～0.37m。
 掘込面 削平 検出面 Va層上面
 埋土 自然堆積によるものである。A・B層に大別され、A層は4層、B層は2層に細分される。
 A層— 黒褐色土を主体に褐色土を粒状に少量含む層である。各層ともスコリア粒を少量含み、
 暗褐色土の混入の割合で細別されている。
 B層— 褐色土を主体として暗褐色土を粒状に含み、スコリア粒を多量に含む層である。各層
 は暗褐色土の混入の割合で細別される。A層に比べてしまりが無い。
 壁の状態 外傾して立ち上がる。 遺物 図示していないが土師器坏と甕の小片が出土している。

RG510溝跡（第7図・8図）

平面形 円形周溝の一部？ 重複関係 不明
 規模 検出された長さは3.60m・溝上端幅1.22～1.00m・下端幅0.72～0.81mをはかる。深さは0.12
 ～0.21m。
 掘込面 削平 検出面 Va層上面
 埋土 自然堆積によるものである。A・B層に大別され、A層は2層に細分される。
 A層— A1層は黒褐色土を主体に暗褐色土を粒状に含む層である。A2層は暗褐色土を主体
 に黒褐色土を粒状に少量含む。各層ともスコリア粒を少量含む。
 B層— 黄褐色土を主体として暗褐色土を粒状に含み、スコリア粒を多量に含む層である。
 壁の状態 外傾して立ち上がる。 遺物 なし



第8図 RG508・509円形周溝、510・511溝跡断面図

RG511 溝跡 (第7図)

平面形	方形? 重複関係 不明
規模	溝上端幅1.22~1.00m・下端幅0.72~0.81mをはかる。深さは0.12~0.21m。
掘込面	削平 検出面 Va層上面
埋土	自然堆積によるものである。A・B層に大別される。 A層— 黒色土を主体に粒状の黒褐色土を多量に含む層である。スコリア粒を少量含む。 B層— 褐色土を主体として暗褐色土を粒状に含み、スコリア粒を少量含む層である。A層にくらべやわらかく、しまりがない。
壁の状態	外傾して直立ぎみに立ち上がる。
遺物	図示していないが土師器の甕の小片が出土している。

(3) 遺物包含層・遺構外出土遺物

第6次調査区は過去の削平により旧地形および遺物包含層(Ⅱ~Ⅳ層)があまり残存していなかった。今回の調査では分火山灰下部の褐色・黄褐色土上部(Ⅵ層)までを精査した。層位については同じ地形・地質上に立地する大館町・大新町遺跡で確認された層位名を使用した。主な層位は下記の通りである。

層位	I層—表土・耕作土。 Ⅱ層—黒色・黒褐色土主体—縄文時代後期以降の遺物が主に出土。 Ⅲ層—黒褐色土(大館町Ⅲ層は暗褐色土)主体—上~中層は中期の遺物が出土。 Ⅳ層—黒褐色土主体—Ⅴ層との漸位層付近より前期初頭の遺物が出土。 Ⅴ層—暗褐色土主体—下層より早期初頭~前葉の、上層より早期前葉~中葉の遺物が出土。 Ⅵ層—褐色・黄褐色土火山灰土主体(分火山灰下部)—草創期~早期初頭の遺物が出土。 今回の調査での遺物包含層出土遺物は、I層もしくは遺構外からの出土が大半を占め、Ⅴ層からの出土遺物はわずかであった。
----	--

土器	(第9図1~40) 1~6は早期初頭の無文土器の深鉢口縁部および体部である。いずれも胎土に金雲母と石英粒を含み、外面の色調は明褐色を呈す。器壁は0.4~0.6cmである。1は口縁部で口唇部を外削状に調整し、外面にやや肥厚する。2~6は体部で、2・3と5.6はそれぞれ同一個体である。
----	---

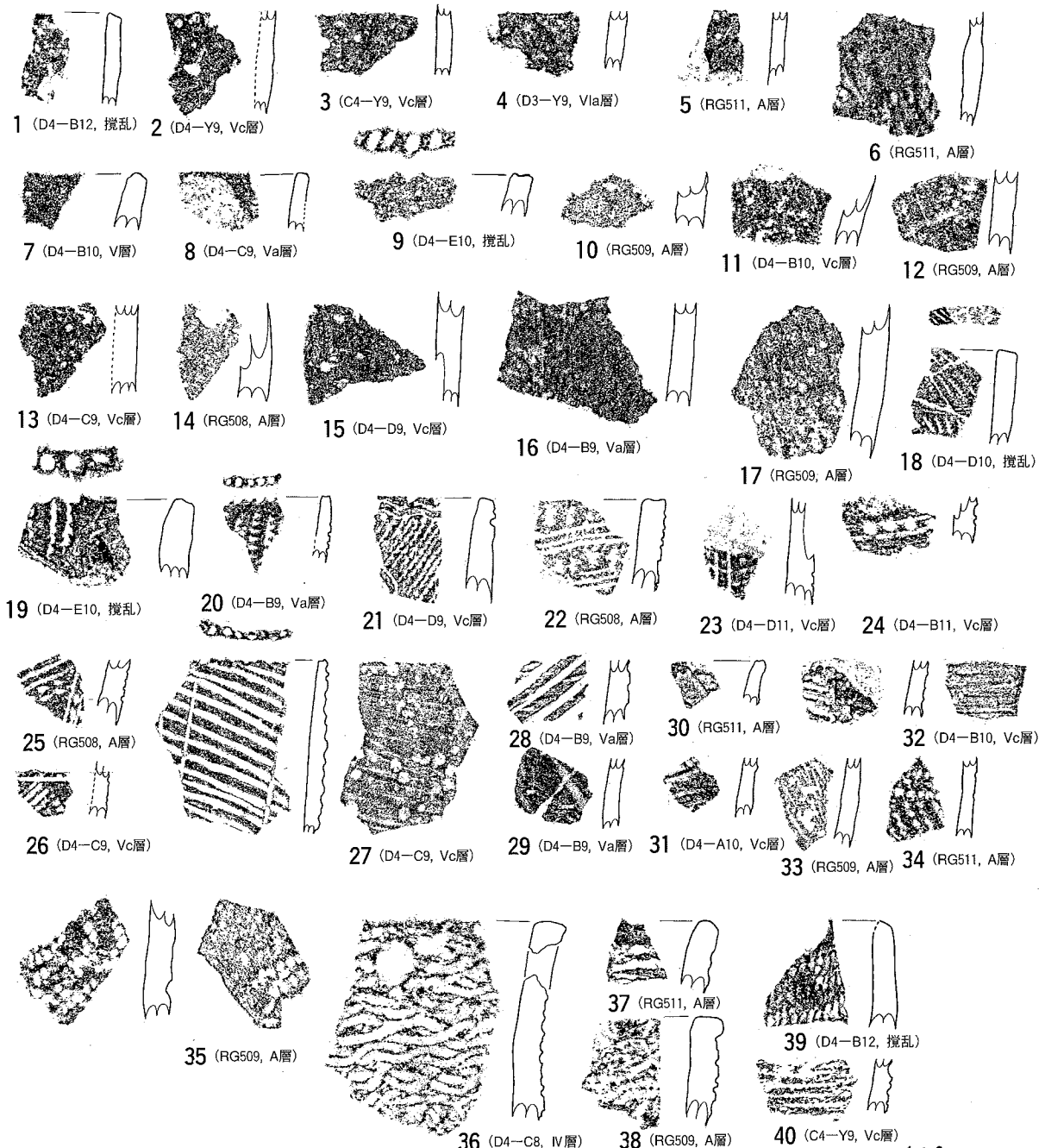
7~17は無文土器あるいは無文部であるが、前述の1~6とは胎土、色調、器厚、調整方法に差異が認められる。7~12は胎土に粗粒砂と金雲母を多量に含み、外面の色調はにぶい黄褐色を呈する。器厚は0.5~0.9cmである。7~9は口縁部で、9は口唇部に刻目を施す。13~17は尖底部付近の無文帯と考えられ、器面は縦位のミガキが入念に施され光沢を帯びる。

18~23は貝殻文、沈線文を施す深鉢である。18は平坦な口唇部に貝殻腹縁文を施し、口縁部に貝殻腹縁文を矢羽状に施す。19・20は口唇部に刻み目、口縁部に縦位貝殻腹縁文を施す。19は口唇部直下に縦位の隆帯を貼り付ける。21は口唇部を平坦に調整し、2条の波状沈線下に連続円形刺突と斜位貝殻腹縁文を密に施す。縦位あるいは斜位の波状沈線も施される。22は口唇部直下に斜位貝殻腹縁文と、3条の平行沈線間に連続刺突を施す。23は横位多段の貝殻腹縁文

を施した後に縦位並行沈線を施文するものである。

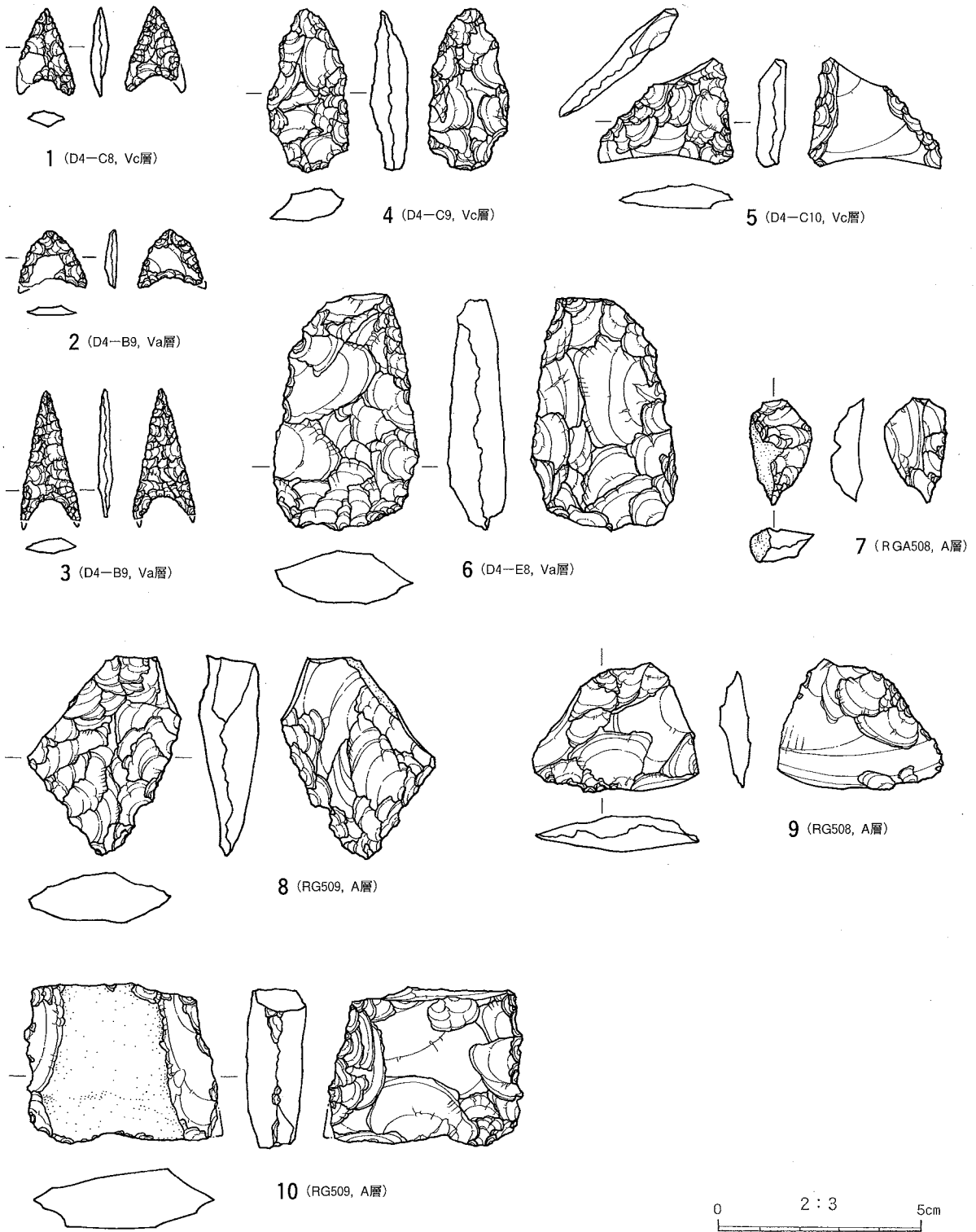
24～26は沈線文、刺突文を施す深鉢体部である。24は平行沈線上に刺突文を施し、胎土に多量の金雲母を含む。25は斜位平行沈線間に二個一対の刺突文を施すものである。26は横位沈線下に3条の斜位平行沈線を施すものである。

27～33は沈線文、微隆起線文を施す条痕文土器である。27は口唇部に刻目をもち、斜位平行沈線を充填させた後に垂下沈線を施した深鉢口縁部である。内面には条痕が施され、内外器面には炭化物の付着が認められる。28・29は深鉢体部で、外面に条痕を施した後に斜位平行沈線

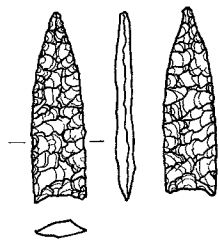


第9図 遺物包含層出土土器

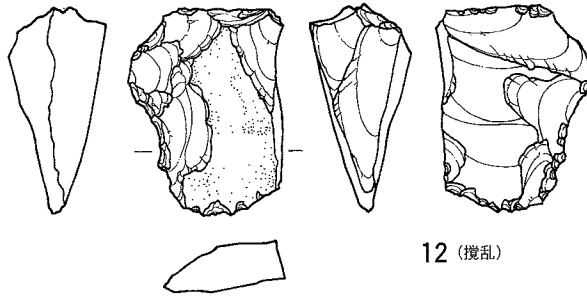
0 1:2 5cm



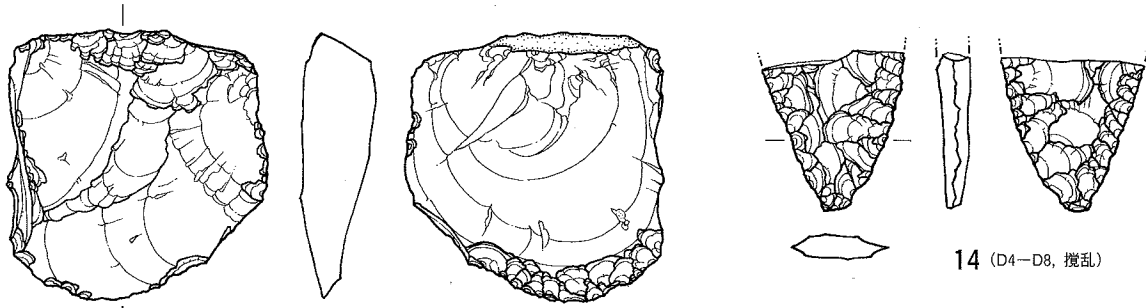
第10図 遺物包含層出土石器(1)



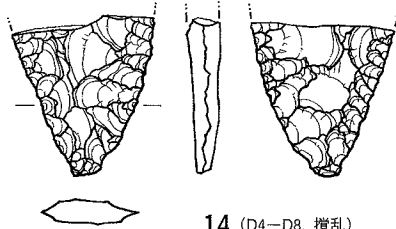
11 (D4-E10, 攪乱)



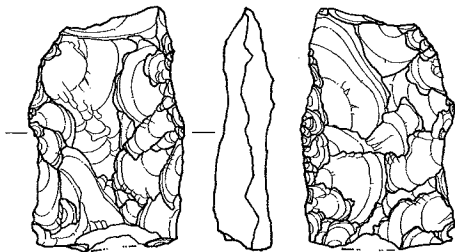
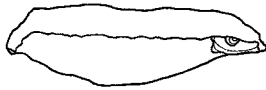
12 (攪乱)



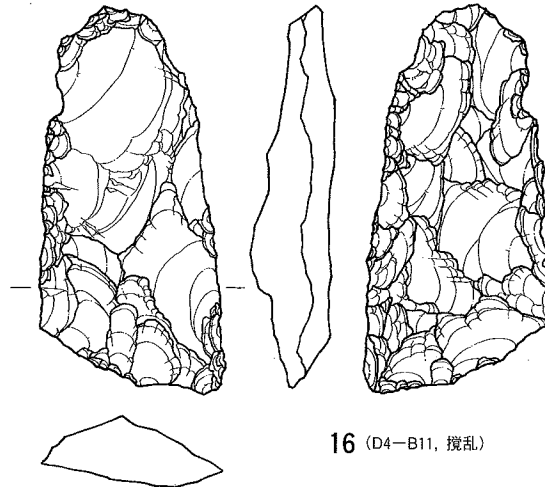
13 (D4-D8, 攪乱)



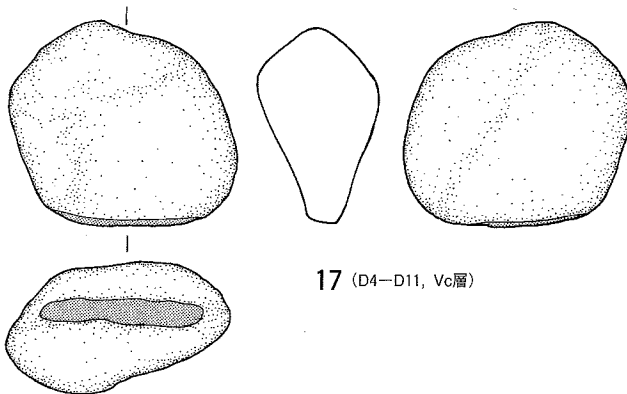
14 (D4-D8, 攪乱)



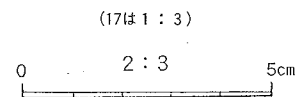
15 (検出面)



16 (D4-B11, 攪乱)



17 (D4-D11, Vc層)



第11図 遺物包含層出土石器(2)

下に3条の斜位平行沈線を施すものである。

27～33は沈線文、微隆起線文を施す条痕文土器である。27は口唇部に刻目をもち、斜位平行沈線を充填させた後に垂下沈線を施した深鉢口縁部である。内面には条痕が施され、内外器面には炭化物の付着が認められる。28・29は深鉢体部で、外面に条痕を施した後に斜位平行沈線を施文するものである。30～32は微隆起線文を施す深鉢口縁部と体部である。胎土に金雲母と微量の繊維を含み、器表面は赤褐色を呈する。いずれも外面の地文には条痕が施され、32は内面にも横位の条痕が施される。33は外面に縦位の条痕を施し、胎土に金雲母を含む。

34～40は縄文を施す深鉢である。34は原体圧痕を施すものである。35は内外面に縄文を施し、胎土に繊維を含む深鉢体部である。36～38は不整撚糸を施し、胎土に繊維を含むものである。36・38の口唇部は平坦に調整され、やや外面に張り出す。37は丸頭である。36は補修孔と考えられる孔が穿たれている。39は原体圧痕を施すもので、口唇部は外削状を呈する。胎土に繊維を含む。40は横位の撚糸文が施されるものである。

石 器

(第10・11図1～17) 1～3は頁岩製の凹基の石鏃である。1は背面左脚部に被熱によるハジケ痕が認められる。2は腹面に主要剥離面を残し、背面基部には被熱によるハジケ痕が認められる。3はやや基部の抉りが深く、腹面左側縁→腹面右側縁→背面左側縁→背面右側縁→腹面基部→背面基部の順番で調整剥離を施している。4は石鏃の未製品と考えられる。5は頁岩製の削器で、両面側縁に調整剥離を施す。6は頁岩製の筥状石器である。7は黒曜石製の剥片である。第1次調査で出土している拇指状搔器や剥片と石材の質が酷似しており、宮城県湯ノ倉産黒曜石である可能性が高い。8・9は頁岩製の削器である。8は腹面左側縁→腹面右側縁→背面右側縁→背面左側縁の順序で剥離調整を施し、先端を尖らせている。9は背面下端と上端に刃部を作りだしている。10は筥状石器で上半部が欠損し、背面に原礫面を多く残す。石材は頁岩である。11は両面に調整剥離を施す頁岩製の石鏃で、腹面左側縁→腹面右側縁→背面右側縁→背面左側縁→背面基部→腹面基部の順に押圧剥離を施している。12～14は頁岩製の削器である。12は背面に原礫面を残し、背面左側縁と腹面下端に調整剥離を施す。13は腹面下端に剥離調整を施す。14上半部が欠損しているが、両面に丁寧な剥離調整を施している。腹面右側縁→腹面左側縁→背面右側縁→背面左側縁の順で先端を尖らす。先端部はわずかながら原礫面が残っている。15・16は頁岩製の筥状石器である。15は背面左側縁下端と背面下端に風化の度合いが異なる剥離が認められる。一度、廃棄したものを再利用したものか。16は両面に調整剥離を施している。17は側縁に磨面を1面もつ敲打磨石である。石材は溶岩質安山岩である。

(4) まとめ

縄文時代

宿田遺跡第6次調査の結果、縄文時代早期・平安時代の遺構・遺物を主体とする遺跡であることが確認された。

土 坑

縄文時代の遺構では早期後葉・後期～晩期の土坑8基(RD013～020)が検出された。埋土は硬くしめる暗褐色土が主体で、スコリア粒も多く観察された。遺物が確認されたのはRD013・014・015・018・019土坑で、RD013土坑からは外面に条痕を施すムシリI式併行と考え

られる条痕文土器が、R D015土坑からは早期後葉の椀木 I 式に類似する微隆起線土器、R D019土坑からは早期中葉の吹切沢式に類似する貝殻文土器が出土している。

第6次調査で検出された土坑の平面形は、調査区外に範囲がおよんで全体像が確認できないものもあるが、おおよそ楕円形（R D015・016・018・019）、溝状（R D014）、円形（R D013）の3タイプに分類することができる。しかし、大半の土坑は削平により掘り込みが浅く、出土遺物も少ないため詳しい性格は明らかではない。R D014土坑は攪乱により北半部が削平されているものの、その平面・断面形は市内各地で確認されている溝状の所謂陥とし穴状土坑と極めて類似し、おなじ性格をもつ土坑であると考えられる。

土器 (第10図) 遺物包含層（Ⅱ～Ⅴ層）は大半が削平を受けており出土遺物は少なかったが、**無文** 縄文時代早期初頭～前期初頭にかけての土器が出土した。1～6は早期初頭の無文土器と考えられ、市内では館坂・前九年・大新町遺跡などで発見されている。

沈線・貝殻文 7～26は早期中葉の沈線・貝殻文土器群と考えられ、吹切沢式に類似するものである。13～17は無文ではあるが縦位のミガキが施され、貝殻文土器の尖底部付近の一部と考えられる。

条痕文 27～34は早期後葉の条痕文土器で27～29・33・34は沈線文を主体とするムシリ I 式並行、30～32は微隆起線文を主体とする椀木 I 式並行と考えられる。第4次調査では口縁部文様帯に微隆起線文、体部下半に沈線文を施した両方の特徴を併せ持つ土器が出土している。

表裏縄文 35は内外に縄文を施す表裏縄文土器で、早期末葉の赤御堂式並行と考えられる。

繊維土器 36～40は縄文を施し、胎土に繊維を含む前期初頭の土器である。

古 代

円形周溝 古代の遺構は、円形周溝2基（R G508・509）溝跡2条（R G510・511）が検出された。R G508は北西部に開口部を持つと考えられるが、その他の円形周溝に関しては今回の調査では確認できなかった。埋土中より平安時代（9世紀）の土師器の坏・甕が出土していることから、当該時期は9世紀代と考えられる。

黒曜石 第1・4次調査では北大 I 式や南小泉式並行の古式土師器など、続縄文・古墳時代の遺物が少量ながら出土している。今回の調査では当該時期の遺物は出土しなかったが、第10図7の黒曜石製の剥片だけは古墳時代に属する可能性がある。

上記のように今回の調査では、縄文時代早期から平安時代に至るまでの遺構・遺物が確認された。特に第1・4次調査に続いて遺跡中央部で縄文時代早期の遺構や古代の円形周溝が発見されたことは、遺跡内での遺構の分布を考えるうえで重要である。

宿田遺跡は調査事例が少なく、続縄文・古墳時代の集落、円形周溝の分布やそれらを築造した人々の集落を明らかにするには今後の調査事例の蓄積が必要である。

(佐々木 亮二)

引用・参考文献

土井宣夫 2000 『岩手山の地質—火山灰が語る噴火史—』滝沢村教育委員会

盛岡市教育委員会2002 『盛岡市内遺跡群—平成13年度発掘調査概報—』盛岡市教育委員会

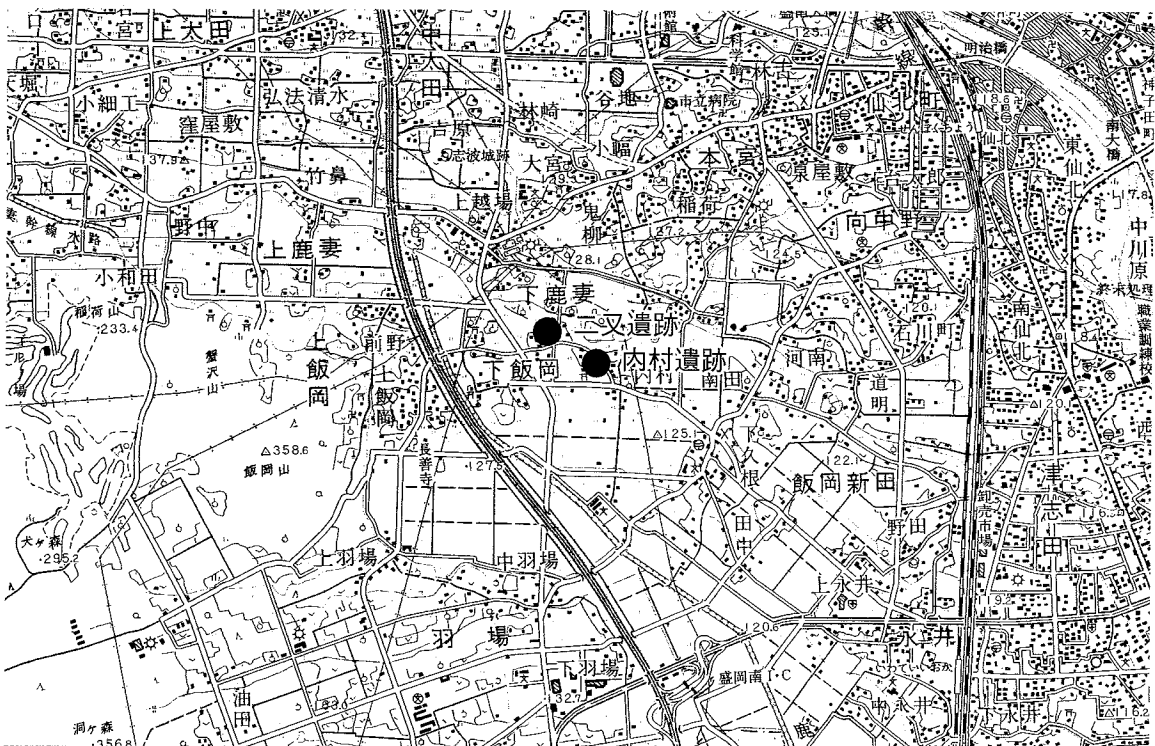
2 二又遺跡(第5次調査)・内村遺跡(第3次調査)

(1) 遺跡の概要

位置・地形 二又遺跡・内村遺跡は、盛岡市街地より南西約4.2kmの盛岡市下飯岡1地割・2地割地内に所在する。遺跡の現況は水田地帯の中の微高地であり、二又遺跡の南東約300mに内村遺跡が位置し、現況は宅地や水田、畑などの農地が主体となっている。遺跡範囲は二又遺跡が南北約250m、東西約300m、内村遺跡が東西約140m、南北約150mである。標高は二又遺跡が約127m、内村遺跡が約126mをはかる。周囲の水田との比高はおよそ0.8m内外である。

このあたりは雫石川南岸の沖積地であり、過去における雫石川の流路の転換は激しく、その流れが何度も大きく変わったことが確認されている。北西約1.5kmに位置する志波城跡においても、その北辺が雫石川の流路変換によって削られており、度重なる水害が徳丹城に移転した要因の一つと考えられている。遺跡周辺は近年の圃場整備等により、旧地形がしだいに判別しにくくなってきているが、こうした地質・地形的特性から、両遺跡の間は旧河道で画されているものと推定される。

周辺の遺跡 雫石川によって形成された沖積段丘上には数多くの遺跡が立地する。これまで、縄文時代の遺物は少量発見されるものの、遺構の検出は陥し穴状遺構がほとんどで、竪穴住居跡はごくまれであった。しかし、近年、石仏遺跡では縄文時代後期の遺物包含層が確認されているほか、盛南開発事業にともなう調査によって、本宮熊堂A・本宮熊堂B遺跡などで縄文時代晩期の竪



第12図 二又遺跡・内村遺跡の位置図 (1 : 50,000)



第13図 二又遺跡・内村遺跡全体図 (1:2,500) ○ 常滑大甕出土地点

穴住居跡の発見が相次ぎ、次第に集落の様相が明らかになりつつある。弥生～古墳時代については遺物が少量発見されるものの、明確な遺構の検出はされていない。

古代 奈良・平安時代になると、周辺の遺跡数は飛躍的に増加する。8世紀代には太田蝦夷森古墳群、高館古墳群などの終末期古墳群が築造され、野古A遺跡、台太郎遺跡、百目木遺跡などで堅穴住居跡が増加する。9世紀代になると志波城(803年)や徳丹城(812年)が造営され、この地方にも律令国家の支配が及ぶ。しかし、志波城と同時期の集落は、竹花前遺跡等をのぞき、あまり多くない。志波城・徳丹城の停廃後、9世紀の中ごろ以後、城柵の機能が胆沢城に集約されていくが、このあたりから周辺集落の数は再び増加する。志波城東側の林崎遺跡、小幅遺跡、大宮北遺跡などでは、集落の中に官衙的な掘立柱建物が出現する。9世紀後半から10世紀前半を中心とする時期で、土器ではあかやき土器が須恵器、土師器を凌駕する。この頃の集落は周辺沖積地の主な微高地に営まれ、山麓の台地上にも展開する。

(2) これまでの調査

二又遺跡の発掘調査は、平成8年度以降これまでに本調査2件、試掘調査1件を実施している。その結果、平安時代の堅穴住居跡5棟、土坑6基、溝跡1条を確認している。

次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構・遺物
1	盛岡市下飯岡1-54	個人住宅建築	100m ²	96.04.03 96.05.02	平安時代堅穴住居跡
2	盛岡市下飯岡1地割地内	排水管敷設	230m ²	97.11.17 97.12.11	平安時代堅穴住居跡、土坑、溝跡 土師器 須恵器
試3	盛岡市下飯岡1-49-2	個人住宅建築	98m ²	99.06.11	平安時代堅穴住居跡(保存)
試4	盛岡市下飯岡1-83	農作業小屋建築	49.6m ²	03.04.07	遺構・遺物なし
5	盛岡市下飯岡1-35-1	個人住宅建築	77.5m ²	03.09.01 03.09.18	平安時代堅穴住居跡、溝跡 時期不明溝跡 土師器 須恵器
試6	盛岡市下飯岡1-21-2、21-6	個人住宅建築	37.5m ²	04.03.04	平安時代堅穴住居跡(保存)

第4表 二又遺跡調査一覧

内村遺跡の発掘調査は、平成13年度以降これまでに2件の本調査を実施している。その結果、古代の溝跡2条を確認している。

次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構・遺物
1	盛岡市下飯岡2・3地割地内	排水管敷設	160m ²	01.07.09 01.09.06	平安時代溝跡
2	盛岡市下飯岡2・3地割地内	排水管敷設	112m ²	02.06.26 02.06.28	遺構・遺物なし
3	盛岡市下飯岡2地割108番地	個人住宅建築	183m ²	03.04.17 03.09.22	平安時代堅穴住居跡、溝跡 時期不明掘立柱建物跡

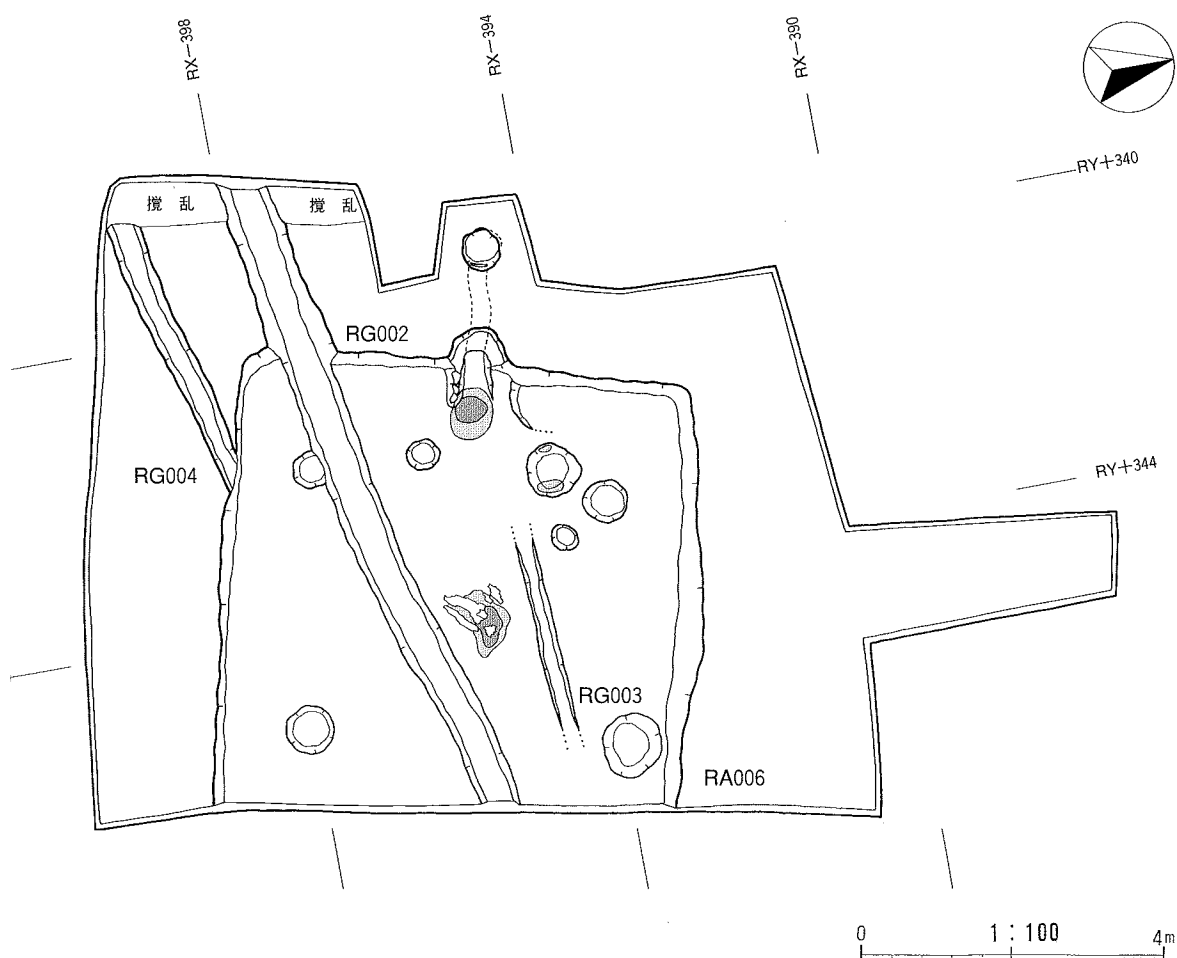
第5表 内村遺跡調査一覧

(3) 二又遺跡第5次調査

第5次調査区は遺跡西端に位置する。市内遺跡群発掘調査事業（国庫補助）として個人住宅新築の試掘調査を実施した結果、現地表面下約50cmで遺構が検出されたため、申請範囲の全面本調査に切り替えて精査を行った。調査期間は平成15年9月1日から9月18日まで行い、調査面積は77.5㎡である。

遺 構 検出された遺構は平安時代の竪穴住居跡1棟（R A 006）、溝跡3条（R G 002・003・004）である。遺構は重複して検出されたが、いずれの溝跡も竪穴住居跡が埋没した後に掘り込まれていた。R A 006竪穴住居跡の東壁は調査区外に延びているため精査は行っていない。

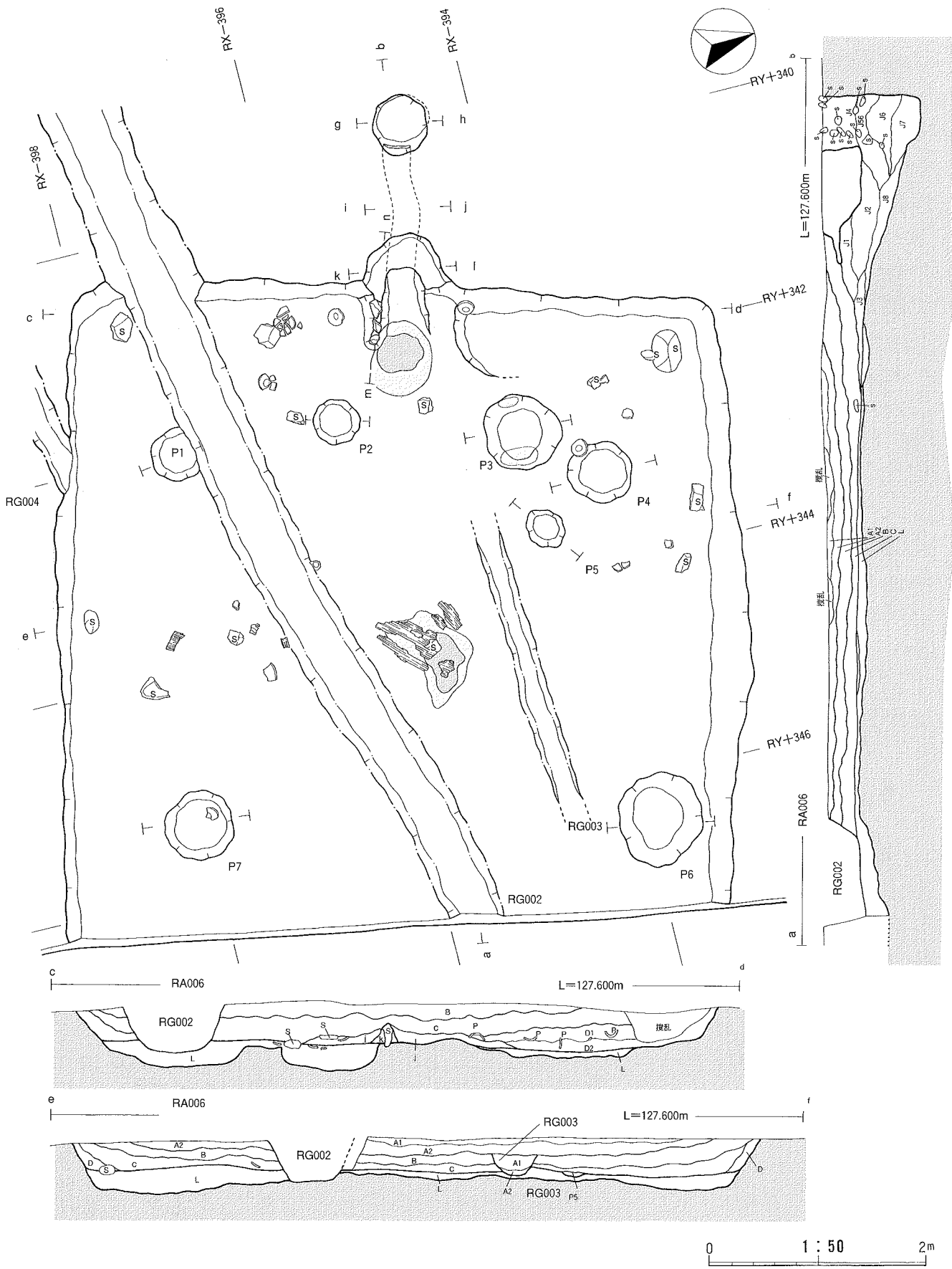
遺 物 R A 006竪穴住居跡からは須恵器・あかやき土器・土師器などの土器のほか、砥石などの石製品も出土している。R G 002・003溝跡からも遺物は出土しているが、R A 006竪穴住居跡の埋土に含まれていたものが流れ込んできたものと考えられる。



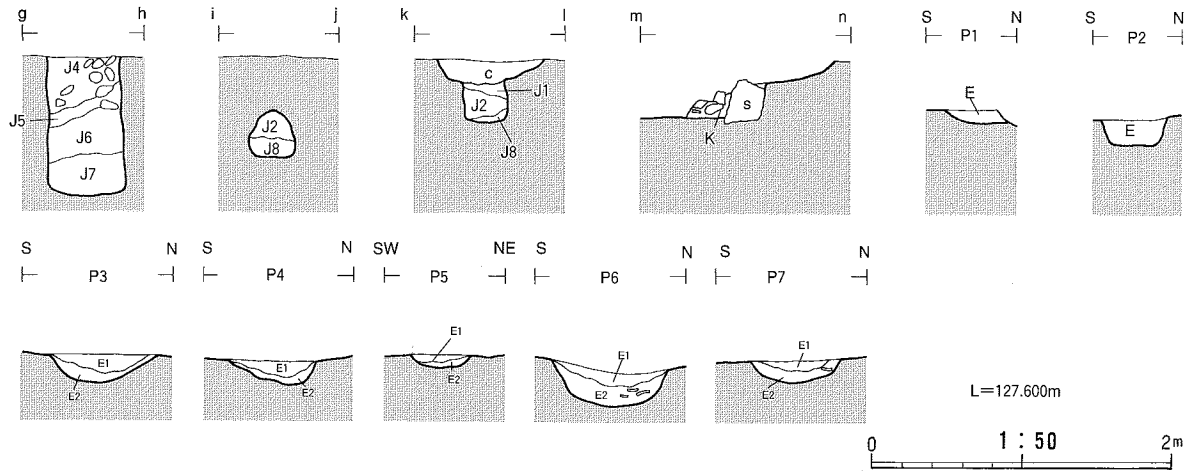
第14図 二又遺跡第5次調査区全体図

RA006 竪穴住居跡 (第15・16図)

位置	調査区中央	平面形	方形	主軸方向	W15° N
規模	東-西 上端5.95m以上、南-北 上端6.01~6.42m・下端5.74~5.92m				
重複関係	RG002~004に切られる				
埋土	掘込面	削平	検出面	黄褐色シルト層上面	
	自然堆積によるものである。A~D層に大別され、A・D層はさらに2層に細分される。 A層—黒褐色土を主体に褐色シルトを粒状に含む。A1・A2層ともに粒状の白色火山灰が少量含まれ、A1層は褐色シルトの割合が若干少ない。 B層—暗褐色土を主体に黄褐色シルトと黒褐色土を粒状に含む。 C層—暗褐色土を主体に黄褐色シルトを粒状に含む。 D層—暗褐色土を主体に黄褐色シルトを塊状に含む。D1層は塊状の黒褐色土を少量含み炭化物を多量に含む。D2層は炭化物を少量含む。				
壁の状態	検出面から床面までの深さは0.17~0.46m、直立ぎみに外傾して立ち上がる。				
床の状態	層厚0.06~0.24mの構築土(L層)で、黄褐色シルトに黒褐色土を粒状に含む混合土である。構築面はかまどにむかってコの字状に掘り込まれている。中央付近に地床炉があり、0.86×0.48mの範囲で硬く焼きしまっている。地床炉直上に炭化材を検出した。				
かまど	かまどは西壁中央に位置し、煙道平面形は削り貫きのトンネル状で、断面は不整円形を呈する。天井部分が一部崩落しているが残存状況は良好であり、やや蛇行しながら燃焼部から煙出しに向かって緩やかに傾斜している。煙道内にはかまど崩壊土(J層)が堆積している。J1~3・8層は暗褐色土主体に黄褐色粘質土と焼土を多量に含む層である。J4~7層は黒褐色土を主体に黄褐色シルトと炭化物を多量に含む。煙道の規模は燃焼部から煙出しの先端までの長さが2.08m、幅0.22~0.26m、底面から天井までの高さは0.28~0.44m、検出面から煙出し底面までの深さは0.93mをはかる。				
燃焼部	かまど基底部分は南側のみが残存する。角礫・円礫などを心材として構築し、褐色粘質土・暗褐色シルトの混合土(K層)で石組み部を覆っている。規模は、長さ0.55m、幅0.23m、高さ0.26mをはかる。火床面は0.69×0.56mの範囲で広がる。				
ピット	ピットは床面上で7口検出し、各ピットの深さは次のとおりである。P1-0.09m・P2-0.16m・P3-0.19m・P4-0.16m・P5-0.08m・P6-0.23m・P7-0.15m。ピット内の埋土(E層)は暗褐色土を主体に粒状の黄褐色シルトを含む層である。				
遺物	(第17図1~32) 1~9はいずれも底部が回転糸切無調整の須恵器坏である。4は口縁部を打ち欠き、内面と口縁部の一部に炭化物が付着する。5は床面から出土しており、底径4.8cmをはかり他の坏とくらべて小さい。6の色調は灰白色を呈し焼成は良くない。7・8は口縁部内面の一部にタール状の炭化物の付着が認められる。				
	10~16はあかやき土器坏である。切り離しはいずれも回転糸切無調整である。10は体部下半がやや内湾気味に立ち上がる。11・13は口縁部内外に重ね焼きによる黒斑が認められ、摩滅が著しい。12・14は床面から出土し、摩滅が著しい。16は口縁部内外に重ね焼きによる黒斑が認められる。				
	17~22は土師器坏で、内面は黒色処理され、ヘラミガキを施している。体部下半がやや内湾気味に立ち上がり、いずれも外面に重ね焼きによる黒斑が認められる。底部の切り離しは19が				



第15図 RA006豎穴住居跡(1)



第16図 RA006竪穴住居跡(2)

回転ヘラ切無調整で、それ以外は回転糸切無調整である。21は口縁部を打ち欠き、内外にター
ル状の炭化物が付着する。23は須恵器高台付皿である。やや内湾しながら口縁部が外反する。

甕

24~28はあかやき土器小形甕である。24は完形で器高17.1cm、口径14.4cm、底径8.2cm、最
大径16.4cmをはかり、最大径を体部中央にもつ。口縁部はゆるやかに外反し、体部下半に火熱
を受ける。25は口縁部~底部まで残存するが1/3欠損する。器高14.3cm、口径13.2cm、底径6.8
cmをはかり、最大径を口縁部にもつ。26・27は体部下半~底部にかけて残存する。26は残存
高8.2cm、底径7.2cmをはかる。火熱を受けており、内面に煤が付着する。27は残存高7.3cm、
底径7.4cmをはかる。28は口縁部~体部上半にかけて残存し、残存高7.8cm、口径15.6cmをはか
る。口縁部形態は頸部から急激に外反し、直立ぎみに立ち上がる。

長頸瓶

29は須恵器長頸瓶の底部である。1/2欠損し、残存高3.8cm、底径10.6cmをはかる。高台部分
にヘラ状工具による刻目を施し、底部には指頭圧痕が残る。

短頸壺

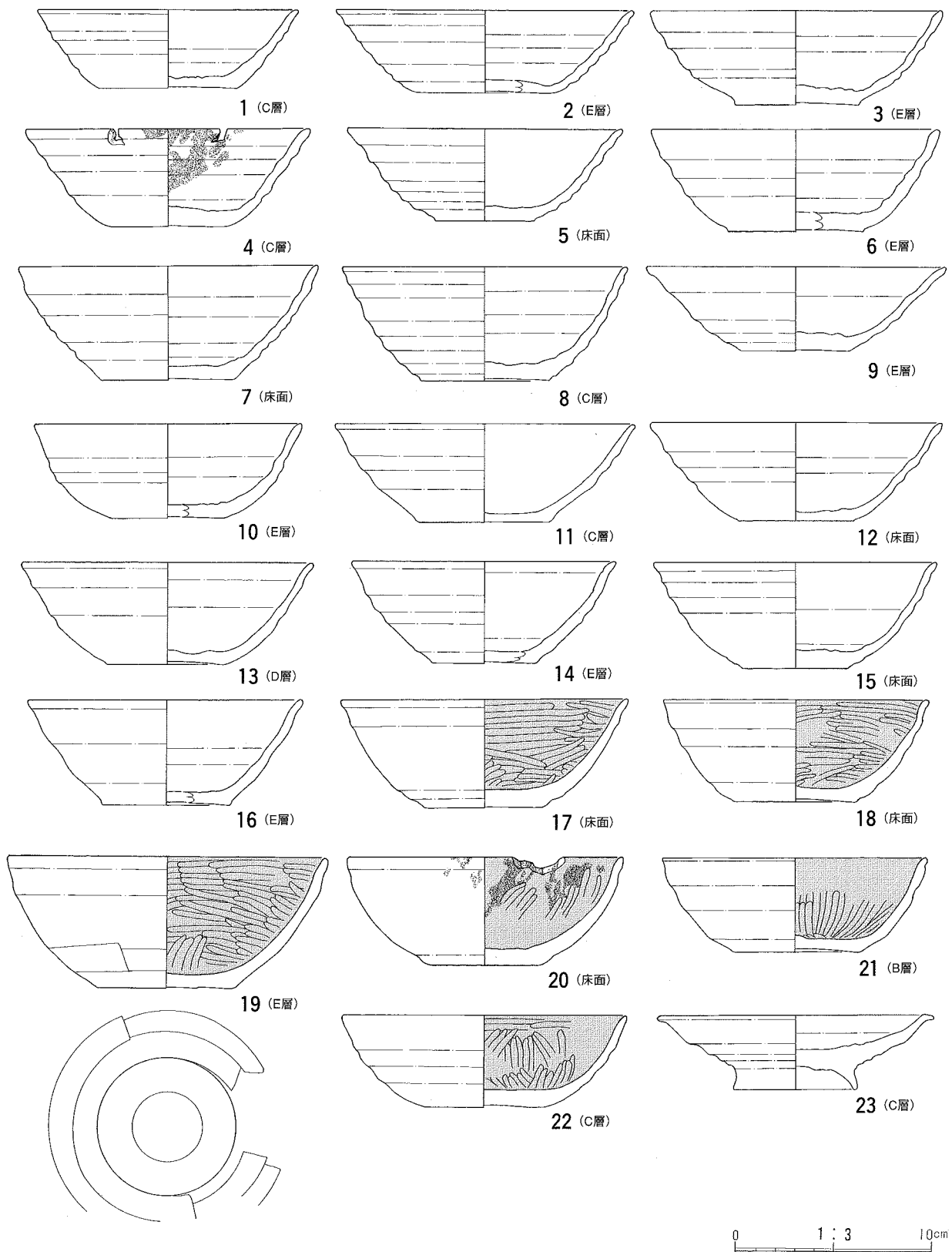
30は土師器短頸壺である。口縁部~体部上半・底部が残存する。口径4.4cm、最大径9.8cmで、
最大径を体部上半に持つ。内外面とも黒色処理され、外面は丹念に横位のヘラミガキで調整さ
れる。

石製品

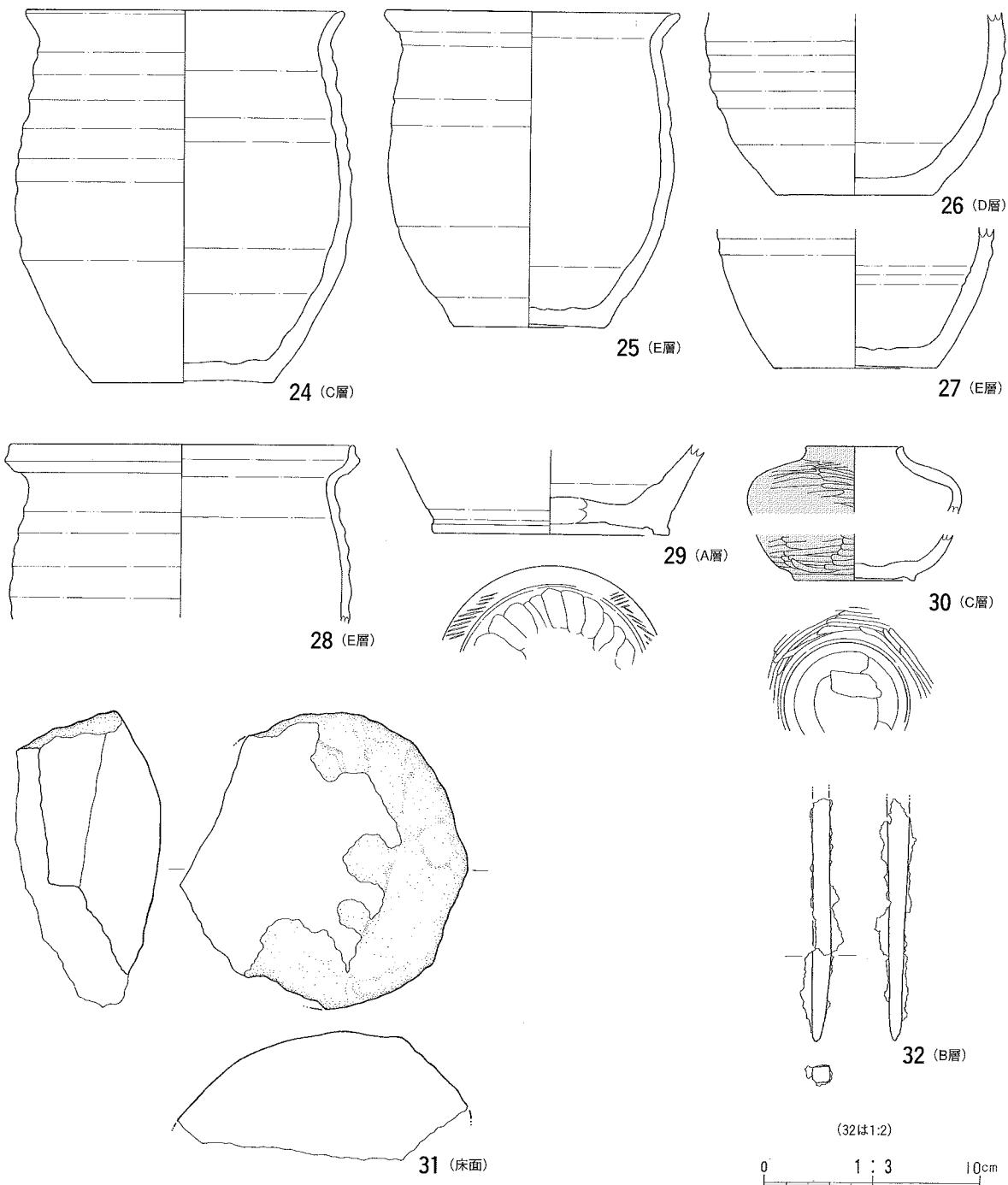
31は床面から出土している角閃石安山岩製の砥石である。2面に使用痕が認められる。

鉄製品

32は頭部を欠損する角釘である。残存する長さは5.4cmである。



第17図 RA006堅穴住居跡出土遺物 (1)



第18図 RA006竪穴住居跡出土遺物(2)

RG002溝跡 (第19図)

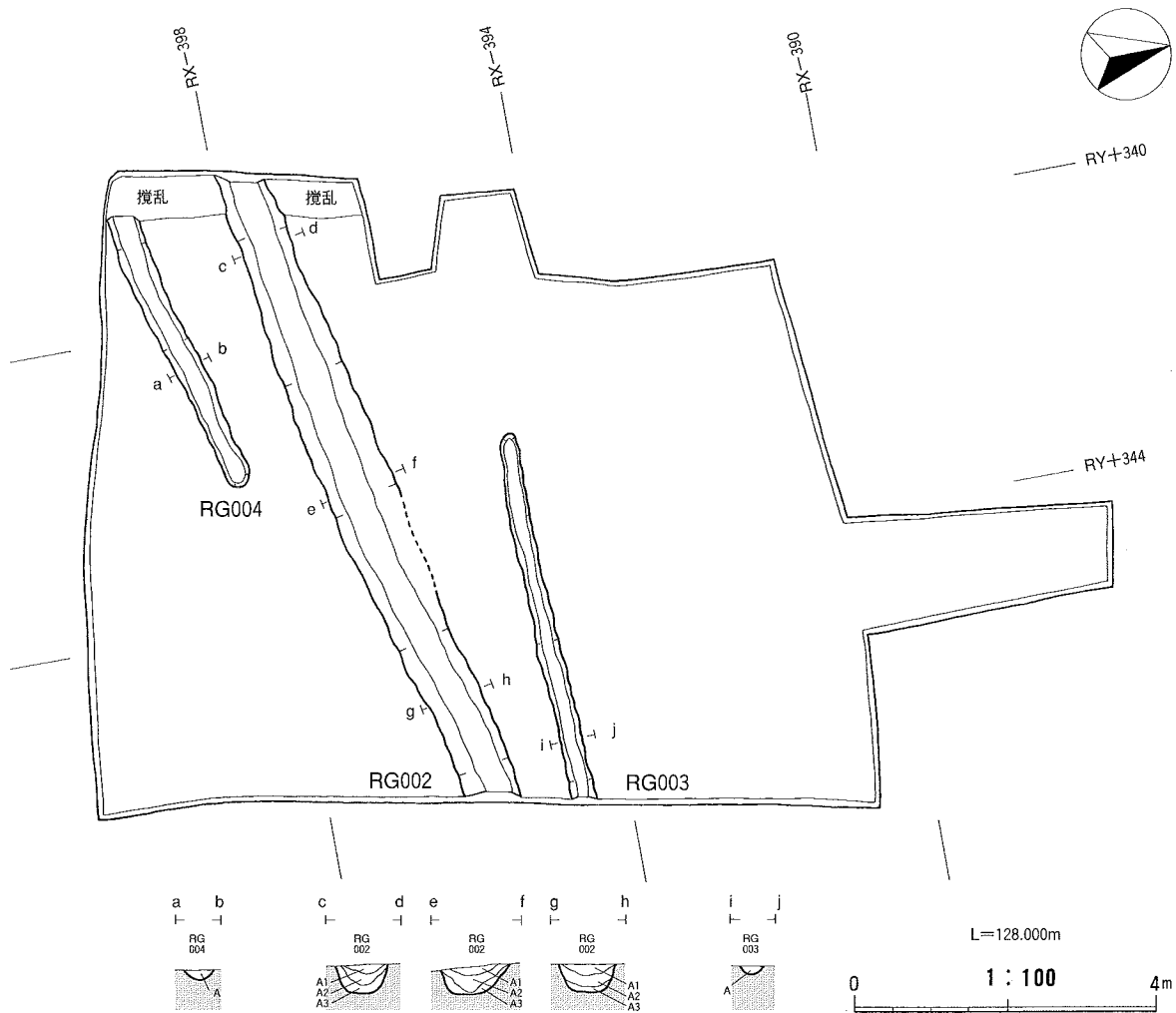
- 位置 調査区南側 平面形 直線状に東西に延びる 重複関係 RA006を切る。
- 規模 検出した長さは8.88m、幅は上端0.65~0.94m・下端0.34~0.44mをはかる。
- 掘込面 削平 検出面 黄褐色シルト層上面
- 埋土 自然堆積によるものである。暗褐色土を主体に黄褐色シルトを含む層で、3層に細分される。
A1・A2層は粒状に少量含み、A3層は粒~塊状に多量に含む。
- 壁の状態 外傾して立ち上がる。深さは0.28~0.41mをはかる。
- 遺物 図示していないが、平安時代の土師器・須恵器片が出土している。

RG003溝跡 (第19図)

位置 調査区中央 平面形 直線状に東西に延びる 重複関係 RA006を切る。
 規模 検出した長さは4.96m、幅は上端0.24~0.34m・下端0.10~0.20mをはかる。
 掘込面 RA005の埋土(B層) 検出面 RA005の埋土(B層)上面
 埋土 自然堆積によるものである。黒褐色土を主体に黄褐色シルトを粒状に含む。
 壁の状態 外傾して立ち上がる。検出面からの深さは0.28~0.41mをはかる。
 遺物 図示していないが、平安時代の土師器・須恵器片が出土している。

RG004溝跡 (第19図)

位置 調査区南 平面形 直線状に東西に延びる 重複関係 RA006を切る。
 規模 検出した長さは3.94m、幅は上端0.29~0.45m・下端0.14~0.26mをはかる。
 掘込面 削平 検出面 黄褐色シルト層上面
 埋土 自然堆積によるものである。暗褐色土を主体に黄褐色シルトを粒状に含む。
 壁の状態 外傾して立ち上がる。検出面からの深さは0.05~0.11mをはかる。
 遺物 図示していないが、平安時代の土師器・須恵器片が出土している。



第19図 RG002・003・004溝跡

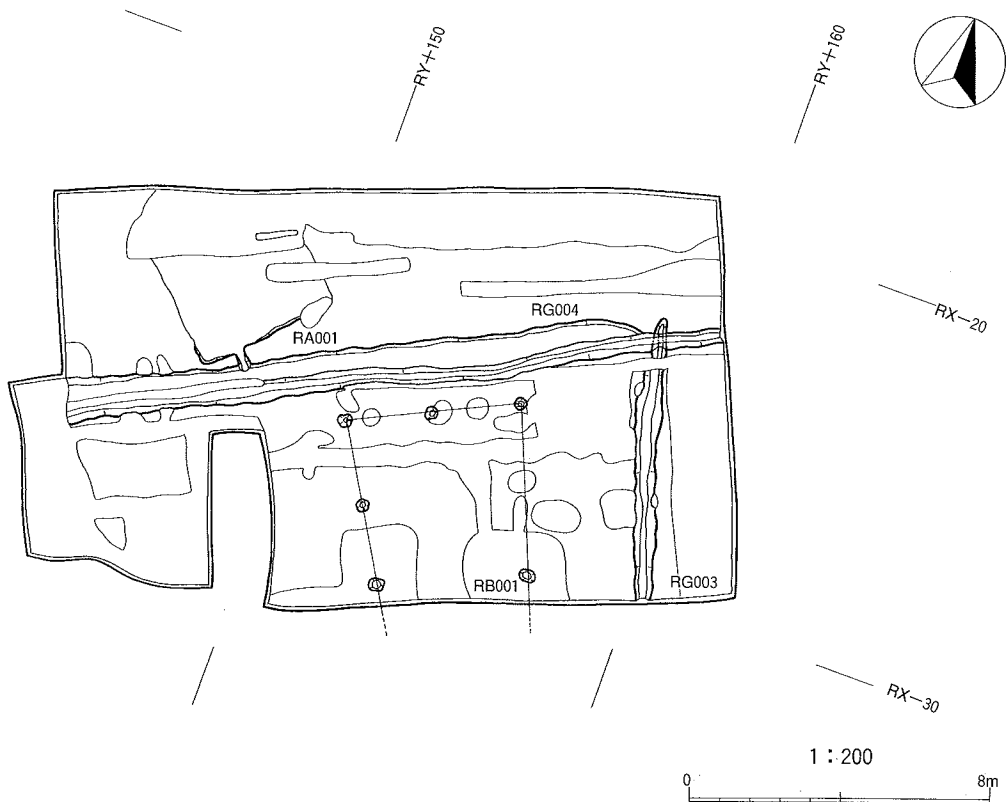
(4) 内村遺跡第3次調査

第3次調査区は遺跡西端に位置する。平成14年度に緊急発掘調査事業（市費）として個人住宅新築の試掘調査を実施した結果、遺構・遺物が検出されたため、平成15年度に申請範囲の全面本調査に切り替えて、市内遺跡群発掘調査事業として調査を行った。調査期間は平成15年4月17日～9月22日までであるが、調査区が狭いため反転作業および住宅半分を建築する期間として4月29日～9月14日までの間は調査を中断している。調査面積は183㎡である。

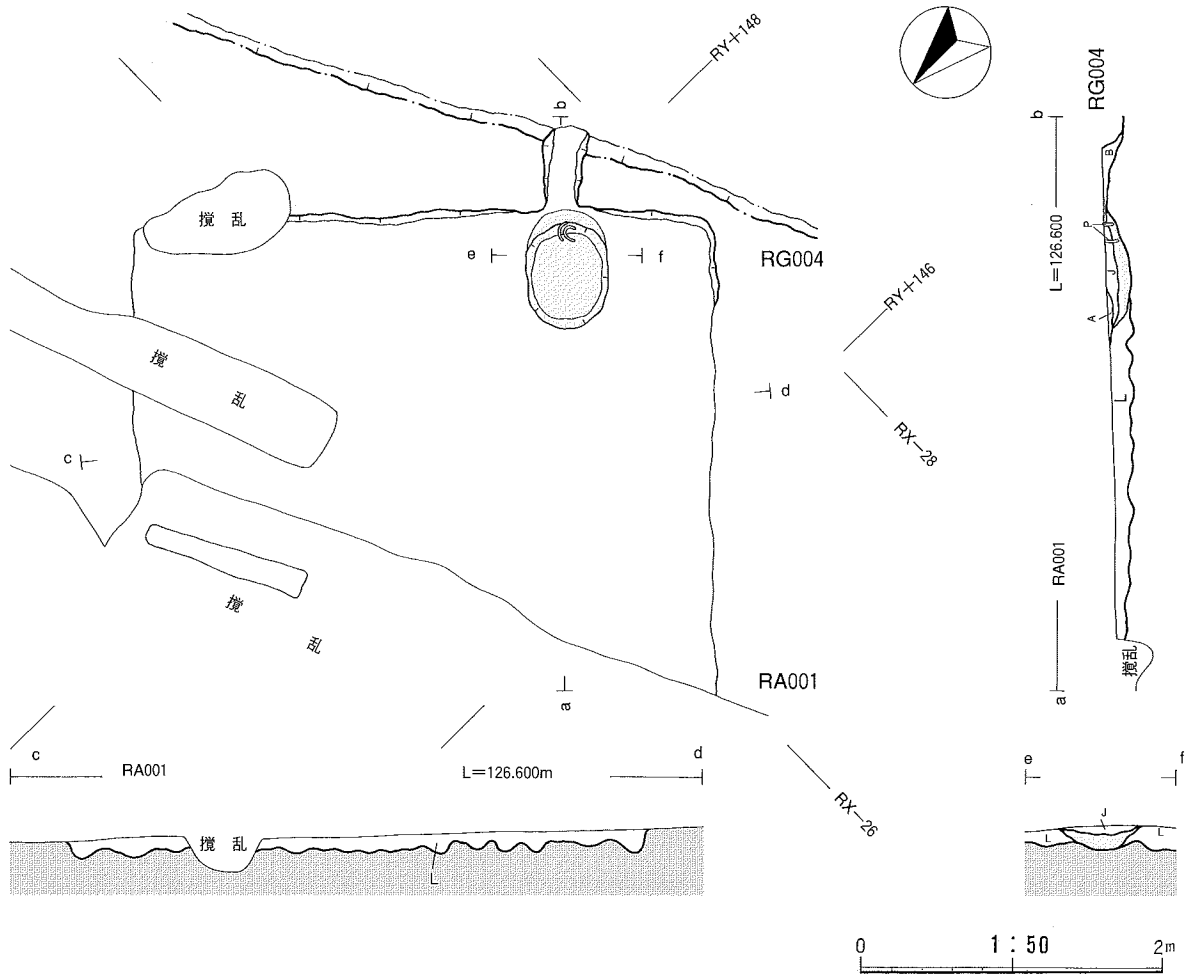
遺 構 検出された遺構は平安時代の竪穴住居跡1棟（RA001）、掘立柱建物跡1棟（RB001）溝跡2条（RG003・004）である。遺物はほとんど出土していないが、RA001竪穴住居跡からかまど支脚に使用した土師器甕が検出されている。

RA001 竪穴住居跡（第21図）

位 置 調査区北西 **平 面 形** 方形 **主軸方向** S45° E
規 模 北東－南西 上端3.91m、下端3.85m 北西－南東 上端3.12m以上・下端3.05m以上
重複関係 RG003に切られる **掘 込 面** 削平 **検 出 面** 黄褐色シルト層上面
埋 土 自然堆積によるものである。A層は黒色土を主体に黒褐色土を粒状に含む。B層は黒褐色土を主体に黄褐色シルトを粒状に含む。
壁の状態 削平によりほとんど残っていない。



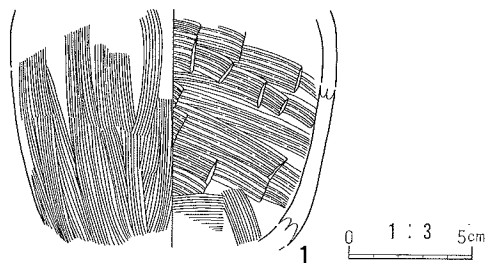
第20図 内村遺跡第3次調査区全体図



第21図 RA001竪穴住居跡

- 床の状態** 層厚0.06~0.14mの構築土(L層)で平坦にしている。にぶい黄褐色シルトに黒褐色土と明黄褐色シルトを塊状に含む混合土である。
- かまど** かまどは南東壁西よりに位置し、煙道平面形は溝状で、煙出し部分はRG003に切られる。燃焼部から煙出しに向かって緩やかに傾斜している。南東壁から残存する煙道の長さは0.52m、幅0.22~0.39m、検出面から煙道底面までの深さは0.02~0.14mをはかる。
- 燃焼部** かまど基底部は残存していない。火床面は0.79×0.54mの範囲で広がる。やや煙道よりの部分に第22図1の小形甕を転用して支脚としている。
- 出土遺物** (第22図) 1は土師器小形甕である。

底部および口縁部~体部上半が欠損している。外面はヘラナデ調整、内面はハケメ調整を施す。かまどの支脚として使用されていたため、器面は被熱し脆くなっている。このほか図示しなかったが、あかやき土器坏の体部破片が出土している。



第22図 RA001竪穴住居跡出土遺物

R B 0 0 1 掘立柱建物跡 (第23図)

位 置	調査区南部	平 面 形	梁間2間×桁行2間あるいはそれ以上の南北棟
重複関係	なし	棟 方 向	P 1 - P 5 を通る柱筋でN22° W
規 模	東西2間(4.62m・15尺2寸)、南北2間(4.49m・14尺8寸)で南側は調査範囲外に延びる。		
掘 込 面	削平	検 出 面	黄褐色シルト層上面
柱間寸法	梁間はP 1・P 2間—2.37m、P 2・P 3間—2.25mである。桁行はP 1・P 5間—4.58m、P 3・P 4間—2.26m、P 4・P 6間—2.14mである。P 1・P 5の間の柱穴は攪乱により削平された可能性がある。		
柱 穴	明確な柱痕跡が確認されたものはなかった。P 5、P 6は攪乱により大部分が削平されている。掘方の径は0.60~0.80mをはかる。埋土は黒褐色土を主体に褐色シルトを若干含み、ややしまりがある。各柱穴の深さはP 1—0.40m・P 2—0.38m・P 3—0.42m・P 4—0.56m・P 5—0.08m・P 6—0.09mである。		
遺 物	なし		

R G 0 0 3 溝跡 (第23図)

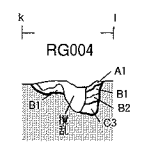
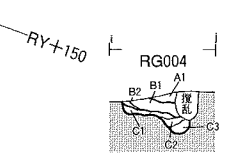
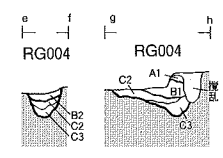
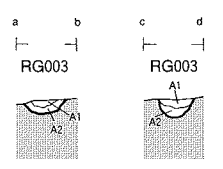
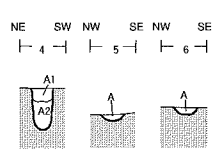
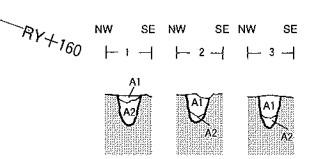
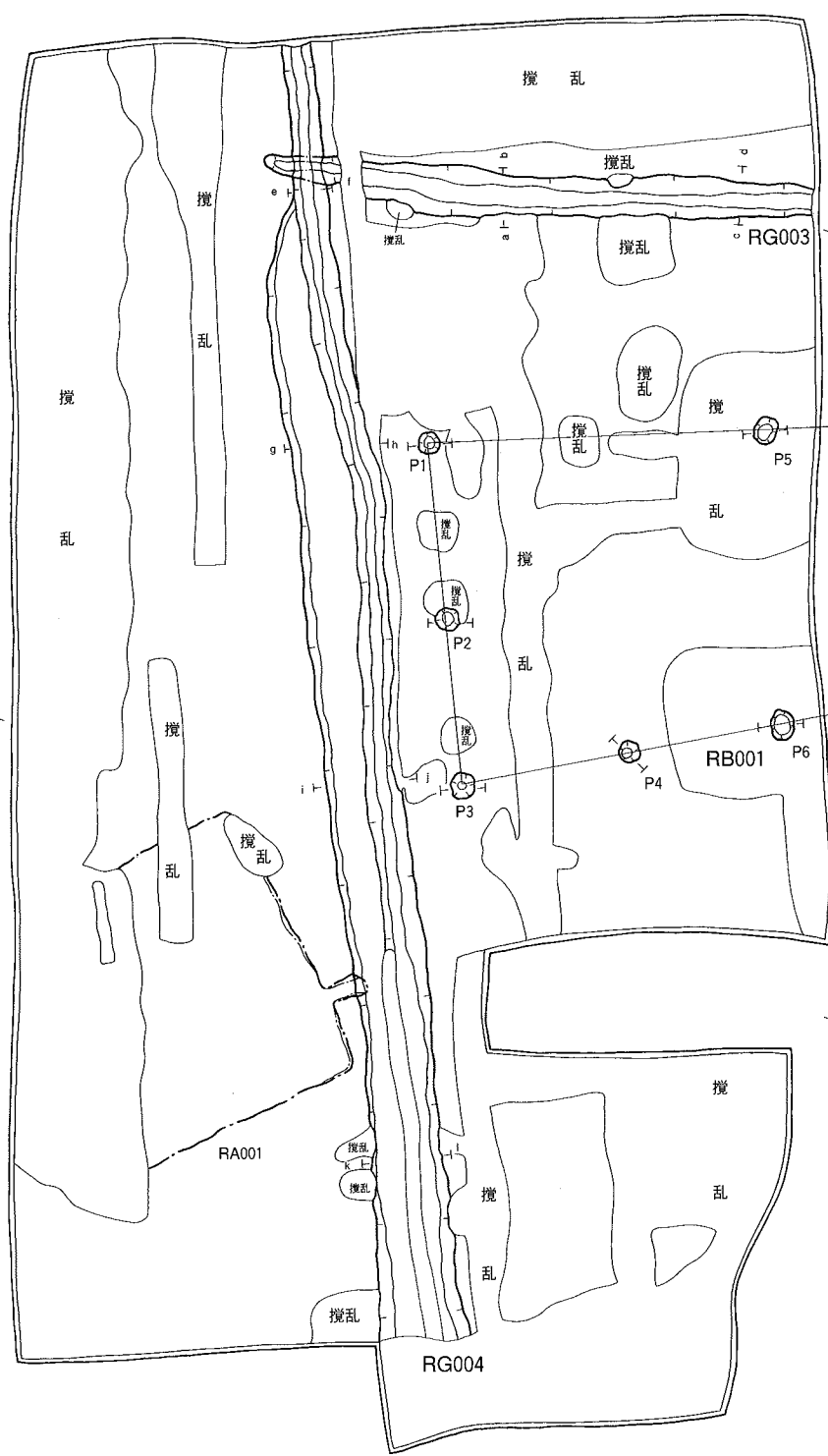
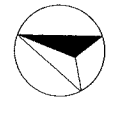
位 置	調査区東	平 面 形	直線状に南北に延びる	重複関係	R G 004を切る
規 模	検出した長さは7.46m、幅は上端0.22~0.70m・下端0.11~0.29mをはかる。				
掘 込 面	削平	検 出 面	黄褐色シルト層上面		
埋 土	自然堆積によるものである。黒褐色土を主体に褐色シルトを粒状に含む。下層ほど褐色シルトの割合が多くなる。				
壁の状態	外傾して立ち上がる。検出面からの深さは0.03~0.30mをはかる。				
遺 物	なし				

R G 0 0 4 溝跡 (第23図)

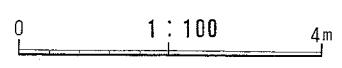
位 置	調査区中央	平 面 形	直線状に東西に延びる	重複関係	R G 003に切られる
規 模	検出した長さは17.52m、幅は上端0.39~1.04m・下端0.10~0.20mをはかる。				
掘 込 面	削平	検 出 面	黄褐色シルト層上面		
埋 土	自然堆積によるものである。A・B・C層に大別される。B・C層はさらに細分される。 A層—黒色土を主体に黒褐色土を粒状に含む。ややしまりがある。 B層—黒褐色土を主体にする層で、2層に細分される。B 1層は暗褐色土を粒状に少量含み、 B 2層は暗褐色土を多量に含む層である。 C層—黒色土を主体にする層で、3層に細別される。C 1層は粒状の褐色シルトを多量に含む。 C 3層は最も多量に褐色シルトを含む層である。				
壁の状態	外傾して立ち上がる。深さは0.23~0.55mをはかる				
遺 物	図示していないが、平安時代の土師器・須恵器片が出土している。				

RX-20

RX-30



L=127.000m



第23図 RB001掘立柱建物跡、RG003・004溝跡

(5) まとめ

今回の調査の結果、二又・内村遺跡は平安時代の遺構・遺物を主体とする遺跡であることが確認された。

二又遺跡 二又遺跡は、これまでに平安時代の竪穴住居跡や溝跡が確認されており、第5次調査でも当該期の竪穴住居跡（R A 006）、溝跡（R G 002・003）が検出された。

R A 006竪穴住居跡は一辺が6 m以上、床面積は36m²を超える中型のものである。竪穴住居の埋土、床面からは須恵器坏・皿、あかやき土器坏・甕、土師器坏などが多数出土している。床面構築土中からも多数の土器が出土しているが、その特徴は埋土中のものと変わらず、時期差は認められない。底部切り離しは糸切後、再調整されるものは少なく、第 図19をのぞいてはすべて回転糸切無調整である。坏の器形は須恵器・あかやき土器がやや内湾し、直線的に立ち上がるもの、土師器が全体的に丸みをもつものが主体となる。これらの土器の特徴から竪穴住居跡の時期は9世紀後葉と考えられる。

内村遺跡 内村遺跡の調査は、これまで、2件の排水管敷設に伴う調査のみで、まとまった面積を調査したのは今回が初めてである。検出された遺構は竪穴住居跡1棟（R A 001）、掘立柱建物跡1棟（R B 001）、溝跡2条（R G 003・004）である。

R A 001竪穴住居等は畑の耕作によりほとんど削平されており、かまどは燃焼部のみが残存している。時期は出土遺物が少なく詳細は不明だが、9～10世紀代と考えられる。R B 001掘立柱建物跡から遺物は出土していないが、東西に延びるR G 003溝跡に対して軸方向が一致していることから、同時並存の可能性がある。そのR G 003溝跡の時期を明確にする遺物は出土していないが、R A 001竪穴住居跡を切っていることから、構築時期は平安時代以降である。R G 004溝跡はさらにR G 003溝跡を切るが遺物は出土していない。

内村遺跡は古くからその存在が知られており、昭和9年には畑のリンゴの木の根元（第13図）から12世紀後半の常滑の大甕が出土している。その他に二個の壺が出土したことが伝えられているがその種別や消息は不明である。この大甕がどのような遺構に伴うものなのかは確認されていないが、当時の出土状況や完形で残存していること等から、経塚に納められていたものと推定され、「内村経塚出土遺物」となっている。今回の調査区はその常滑産の甕が出土した畑に隣接する地点であったが、同時期に比定される遺構・遺物は発見されなかった。今後、周辺域の調査が進捗すれば、経塚あるいは同時期の遺構・遺物が発見される可能性がある。

（佐々木 亮二）

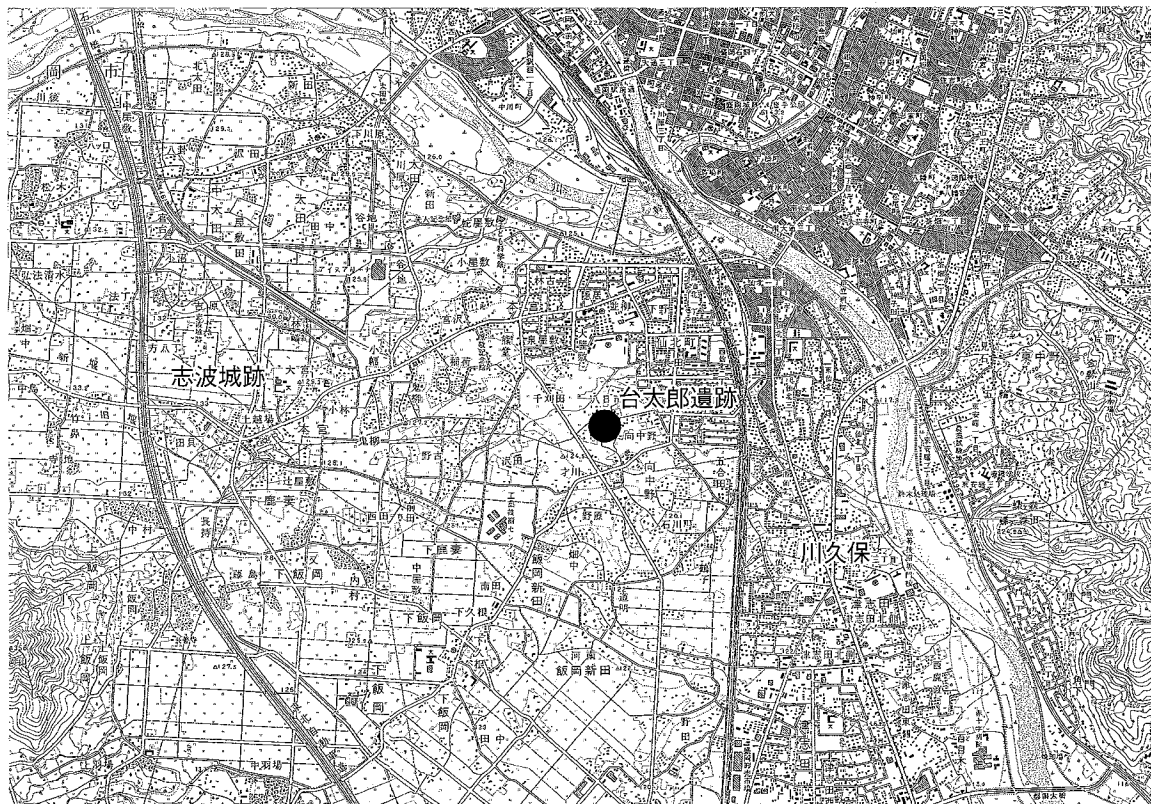
参考文献

都南村誌編集委員会 1974『都南村誌』都南村

3. 台太郎遺跡（第55次調査）

（1）遺跡の概要（第23図・24図）

位置と地形 台太郎遺跡は盛岡市市街地中心部より約3km南南西の、盛岡市向中野字向中野、字八日市場、字台太郎に存在する、古代から中世、近世を中心とする大規模な集落遺跡である。ここは雫石川南岸の沖積段丘上（砂礫段丘Ⅲ）であり、遺跡の標高は119m～121mである。市内を流れる北上川と支流の雫石川、中津川は、現在はJR盛岡駅の南側1kmのあたりで合流する。しかし江戸時代の城下町建設以前は現状と大きく異なり、雫石川は本遺跡の北東側を流れて、現在の南仙北三丁目の通称川久保付近で北上川に合流していた（星川1874他）。この雫石川旧河道と本遺跡との比高は、区画整理施行前の地表面で1m～2mである。遺跡の北側、西側、南側は小河川の旧河道や低湿地で区画され、遺跡内部との比高は現況地形でも50cm～80cmある。遺跡内は概ね平坦な地形である。本遺跡の西側には熊堂A・B遺跡、飯岡沢田遺跡、飯岡才川遺跡、南側には細谷地遺跡、向中野館遺跡が存在する。いずれも古代の集落跡であり、飯岡沢田遺跡からは8世紀から9世紀の古墳や円形周溝が多く確認されている。また、台太郎遺跡・向中野館遺跡からは中世の居館跡も確認されている。



第23図 台太郎遺跡の位置（1：50,000）

遺跡の概要 台太郎遺跡の規模は東西が800m、南北500mの広さがある。昭和60年4月、遺跡東部における区画整理事業の道路建設工事で竪穴住居跡が確認され、はじめて遺跡として認識された。これまでに個人住宅等の建設や宅地造成に伴う調査、盛岡南新都市開発整備事業に伴う調査が、岩手県埋蔵文化財センターと、盛岡市教育委員会により継続されている。これまでの発掘調査で古墳時代末期の7世紀から平安時代の10世紀にいたる集落跡、中世の居館を中心とした集落跡や墓域等、近世の村落跡などが確認されている。このうち古代の竪穴住居跡はすでに600棟を越えており、盛岡市周辺では屈指の規模をもつ古代集落跡である。

集落で最も古い7世紀代の竪穴住居跡は7棟以上確認されている。7世紀中ごろから後半にかけての年代であり、竪穴住居はかまどを持っている。7世紀末ごろから8世紀にかけて、竪穴住居の棟数は急激に増加し、遺跡の西南部をのぞいて全域に分布する。特に遺跡南部、東南部に多く分布する。大形の竪穴住居と中形から小形の複数棟の竪穴住居でグループが構成されるようであり、この時代の竪穴住居跡の重複はほとんどない。平安時代の9世紀初頭は、本遺跡の約3km西方に志波城が造営されるが、この頃から9世紀前葉の竪穴住居はほとんど見られない。9世紀中葉以後、10世紀前半にかけて再び集落が隆盛し、遺跡の西部、北部などの微高地縁辺部に集中する、7～8世紀の集落と異なり、竪穴住居跡の重複が著しい。

10世紀後半から12世紀前半まで、本遺跡では集落遺構や遺物の存在は確認できないが、12世紀後半の渥美の灰釉小形壺が遺跡北東部の微高地縁辺部より単独出土している。13世紀の後半には、遺跡中央部に不整五角形プランの居館が営まれ、周辺域にはこれに関連する区画溝や道路跡、掘立柱建物跡、竪穴建物跡等が分布している。また、遺跡南部には中世の墓坑群と、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、諏訪神社の周囲を囲む堀や、社殿または仏堂らしい掘立柱建物跡も確認されている。周辺村落や墓坑などは、出土陶磁器の年代から15世紀あたりまでの存続が考えられる。居館北東側には幅6m内外で併行する道路側溝とみられる溝があり、この溝の東側に併行する現況道路も存在する。この道は遺跡北東部の段丘崖や居館の堀、館周辺部の区画溝とも併行しており、居館や周辺村落と並存した道路跡と見られる。現況道路も雫石川旧河道に併行しながら川久保付近まで延長される。また本遺跡の南方には、向中野館（北館、南館）が存在する。これまでの発掘調査では中国染付等の小破片が出土しているが、居館の年代については報告書では明らかにされていない。しかし館跡を構成する曲輪が方形を基調としたプランであることや、北館付近では堀や土橋、小さな曲輪などの複雑な配置であることなどから、概ね16世紀を中心とする年代が考えられる。

江戸時代に入ると雫石川は現況の流れとなり、旧河道の東側には奥州道中が通じ、城下の玄関口にあたる仙北組町が開かれる。これにより向中野はこの町の南西側の郊外となった。この時代の遺構は掘立柱建物の曲屋や直屋などの遺構が遺跡内に点在するようになる。現在進行中の盛岡南地区区画整理事業の施行前、本宮から向中野一帯の地域は、水田地帯のなかに農家が点在する散居形の農村形態であった。検出された近世遺構はこれと類似しており、これらは近世の向中野村の一部と考えられる。



第24図 台太郎遺跡全体図 (1 : 3,000)

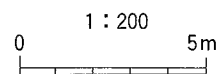
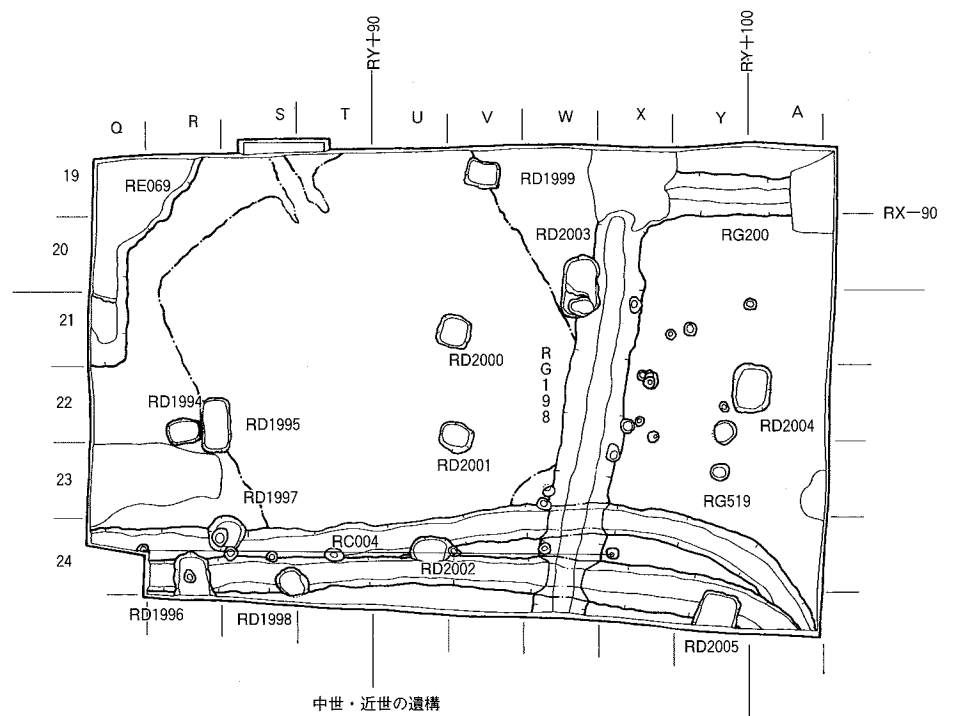
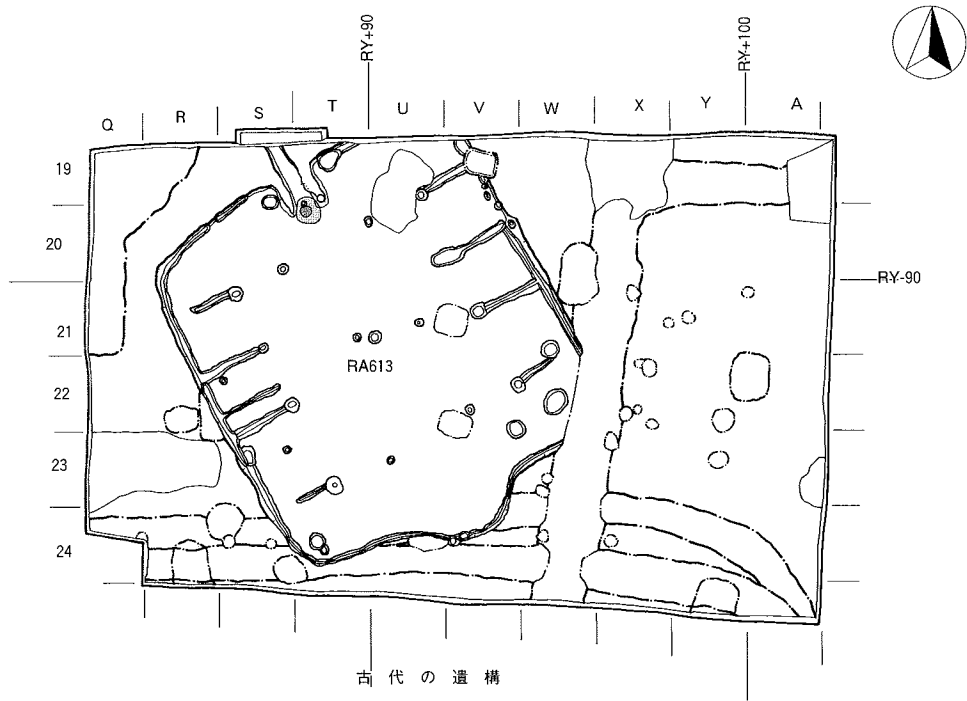
(2) 調査成果

遺構検出状況 今回の調査区は遺跡中央部のやや南よりの地点である。最初に遺構の有無と密度を確認するため、2m×19mの試掘トレンチを東西方向に2条設定した。そして重機による掘削と人力による遺構検出を併用し、北側トレンチの西端から遺構の有無を確認した。この付近は旧住宅の排水施設や住宅以前の根菜類栽培等の攪乱が深く及んでいたため、遺構のプランが不明確で、後述する竪穴住居跡のかまど付近や近世の竪穴など、遺構の壁が残存する高さよりも、トレンチ内を深く掘り下げてしまった部分がある。試掘調査の結果トレンチの全域にわたり遺構が確認されたため、敷地内の表土を全面除去して遺構確認作業を実施した。その結果、古墳時代終末から奈良時代の大型竪穴住居跡1棟、中世～近世の溝2条、中世～近世の土坑（墓坑）12基、近世竪穴1基、近世から近代の溝2条、中世以後の掘立柱列1列、柱穴15口を調査した。

調査グリッド 調査区内の平面位置を表示するためグリッドを設定した。2m×2mの大きさとし、調査区北西方の調査座標の交点RX-50.000m・RY+50.000mを起点に、西から東にアルファベットのAからYまで、北から南にアラビア数字の1から25までを付して、両方を組合せ、S19、W21のようにして平面位置を表示した。

RA613 竪穴住居跡（第26図～第32図）

位置	調査区中央部。	平面形	隅丸方形で南辺中央部が緩やかに張り出す。
主軸方位	N27.5° W		
重複関係	RG198・518・519、RD1995・1999・2000・2001・2002、RC004に切られる		
掘込面	当時の地表面	検出面	褐色シルト層の上面（表土直下）
規模	東西9.5m、南北9.8m～10.7m		
埋土	竪穴住居跡埋土は根菜類の栽培等による攪乱が著しく、床面に到達する攪乱も少なくない。 A層 黒褐色土主体で褐色シルトが粒状に多く混入し、粒状から層状の土層である。6層に分かれ、各層の厚さは3cm～10cmである。水平に近い状態の人為堆積の土層であり、特に竪穴中央部では版築状を呈し、硬い。 B層 黒褐色土主体で炭化物や焼土粒が混入する自然堆積層。北壁近くやかまど近くに堆積するが、それ以外の場所では見られない。 C層 黒色土主体で、C1層には炭化物が多く混入する。自然堆積層である。 D層 壁際に堆積した自然堆積の土層で暗褐色土主体。褐色シルトのブロックが混入する。竪穴の壁や周堤の崩落土か。 E層 竪穴床面の構築土。黄色から褐色シルト主体で、層の構造は塊状。暗褐色土や黒褐色土が混入する。 J層 かまど内、煙道内、かまど近くに堆積する自然堆積層であり、かまどの崩壊土である。暗褐色土が主体で黒褐色土、褐色土、焼土粒が混合し、少量の炭化物も含まれる。土師器甕などの破片も多く含まれる。 K層 かまど本体の構築土である。褐色シルトが主体で暗褐色土が混入する。		
壁の状態	概ね直壁であるが東壁中央はやや緩やか。壁高は23cm～26cm残存。壁下に溝（周溝）を伴		



第25図 台太郎遺跡第55次調査区全体図 (1:200)

う。溝の大きさは幅15cm内外、深さは10cmから15cmである。溝の底部は所々小さなピット状になり、西側の周溝では杭か板状のものが立てられていた痕跡が土層断面で認められた。

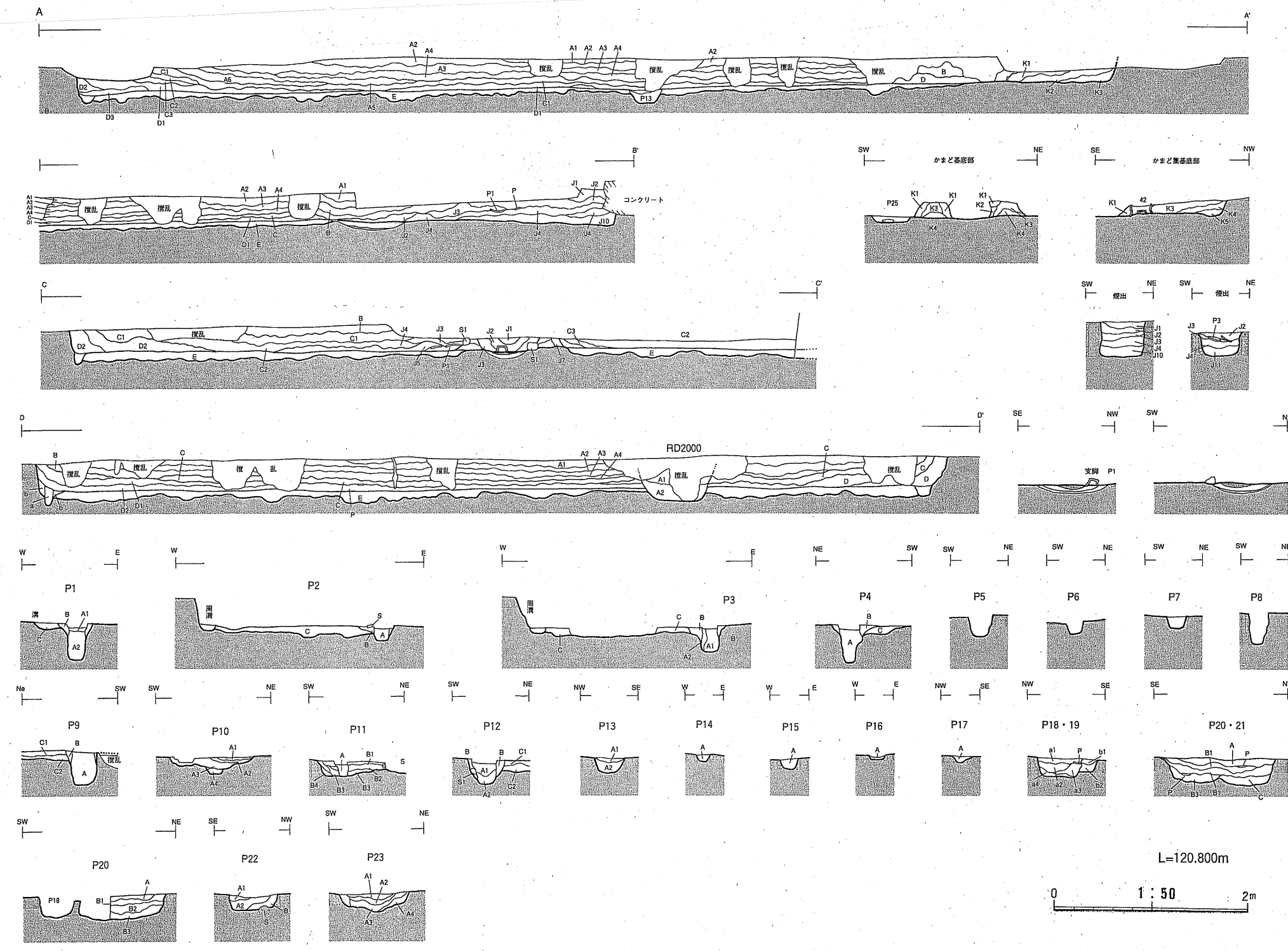
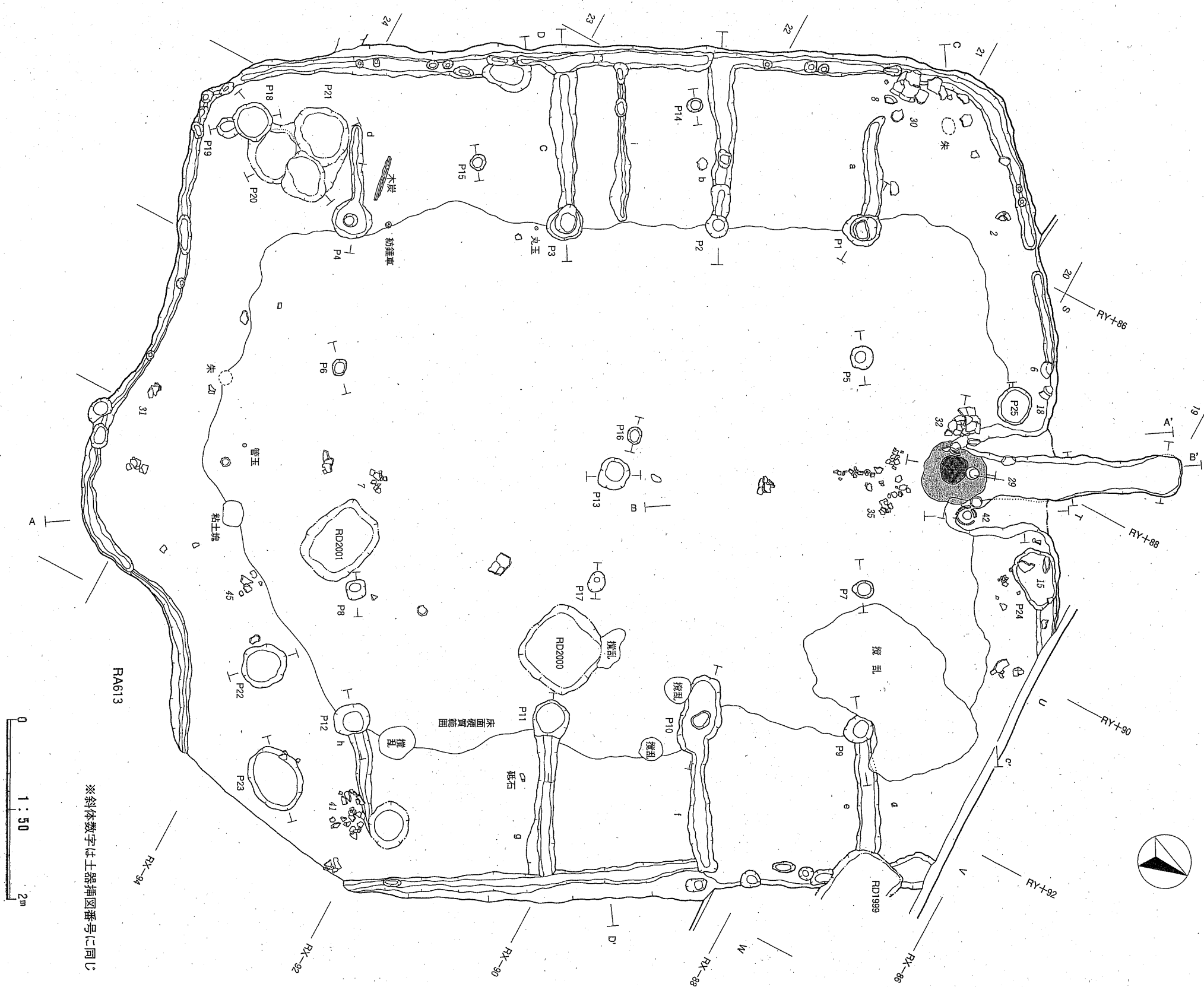
床の状態 竪穴底面に厚さ5cmから15cmのE層を搗き固めて床面を構築している。全体によく平坦に構築されているが、北部のかまど付近と南側壁沿いでは9cm程度の比高があり、南側壁沿いがやや低くなっている。床面のうち柱穴に囲まれた中央部とかまど近く、それに南側壁から1mほどの距離をおいた内側の床面はひじょうに硬くなっている。

かまど かまどは北壁中央部に1基存在する。北壁から1.1mの長さにかまど本体が構築され、煙道は刳貫式で竪穴北壁から1.5mの長さをもつ。かまど本体は基底部の幅1.1m～1.15m。高さは床面から15cm内外残存する。燃焼部の幅は45cm内外で、かまど本体はK層を北壁際から順次積上げて構築し、基底部先端、焚口の両側には、西側に第29図32東側に第30図44の土師器甕が倒立で設置されている。西側の32の甕は原位置からやや動いて、焚口西側につぶれた状態で出土している。東側甕は体部上半から口縁部が残存。この中に44の底部が落ち込んで出土している。この甕の間には、径70cmの火床面があり、焼土は中央部で深さ10cmまで浸透している。このなかで中央部の径30cm、深さ4cmの部分は特に硬くレンガ状に焼けている。火床面の中央からやや奥には、29の土師器甕底部を伏せた支脚がある。かまどの煙道は幅30cm～46cm。煙出しは径45cm。煙道の底部は煙出し部に向けて緩やかに下がっている。

柱 穴 主柱穴はP1～P12の3間×3間の配置である。各コーナーの柱穴柱痕跡の中心は、竪穴の壁の下端から1.74m～1.9mの距離にある。柱列の長さは柱と柱の距離を芯々で計測すると、南北の柱列は西側（P1～P4）で5.64m、東側（P9～P12）で5.65m。東西の柱列は北側（P1～P9）で5.62m、南側（P4～P12）で5.52mである。概ね正方形に近い。各柱間寸法は南北の西側柱列（P1～P4）が北から1.56m、1.7m、2.38m。東側柱列（P9～P12）が北から1.77m、1.68m、2.2mで、南端の柱間が少し広い。東西の柱列は北側が西から1.45m、2.59m、1.58m。南側が西から1.59m、2.49m、1.44mで、中央の柱間が広い。東西の側柱の柱穴は、竪穴の壁と主柱穴の間に存在する仕切状の溝と連続しているが、土層断面の観察では、P10を除く全ての柱穴掘形が、仕切状の溝の埋土を切っていることが確認されている。床中央にP13が存在する、径34cm、深さ18cmであるが柱痕跡は認められない。主柱穴は四隅のP1、P4、P9、P12が柱穴、柱痕跡ともに大きく深く、柱穴の径32cm～42cm、深さ35cm～40cm。柱痕跡は径18cm～22cmの丸柱である。これらの間に存在するP2、P3、P5～P8、P10、P11の柱穴はやや小ぶりで浅い。P10は不整形であるうえに柱痕跡も不明瞭である。埋土断面では柱の据方かと思われる底部の窪みの埋土を穴全体の埋土が覆っており、穴の全体形状が不整形な皿状であることなどから、柱が抜き取られている可能性がある。主柱穴の埋土はP5～P8を除く柱穴で断面観察しており、柱痕跡（A）が黒褐色土主体で褐色シルトや暗褐色土が少量混入する。掘形埋土（B）は黒褐色土と暗褐色土の混合土である。P1の柱痕跡には、朱の粒が混入していた。このほかの柱穴または柱穴状のピットには、P14～P17の4口がある。どれも小形の穴で規則性は見られず、柱痕跡は確認されていない。

仕切状の溝 仕切状の溝は西側にa～d・iの5条。東側にe～hの4条が存在する。このうちb、c、f～iは周溝に接している。重複関係の判明した箇所では仕切状の溝は床の周溝や主柱穴の掘方に切られている。a～hの溝の幅は15cm～30cm、深さは5cm～15cmあり、溝の底面に顕著な凹

第26図 RA613竪穴住居跡



凸はない。i は幅6cmから16cm、深さは3cmから12cmで、杭を打ち込んだような形状の部分もある。a～hの埋土は暗褐色土を主体とし、黒褐色土や褐色シルトが混入する硬い土で全て人為堆積である。

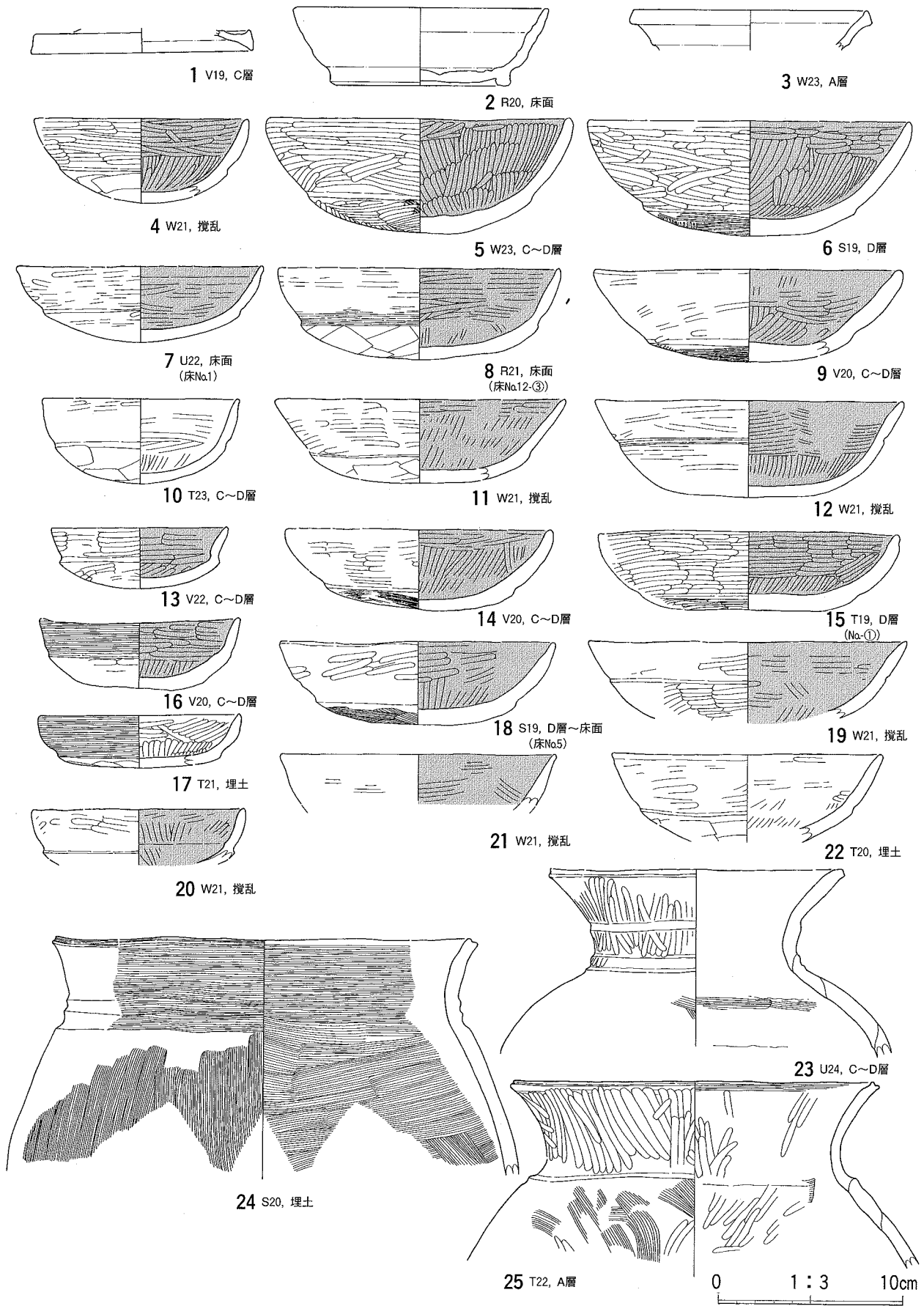
その他の穴 堅穴南西隅にP18～P21の穴が存在する。このうちP18とP19は床面上から確認できたが、P20とP21は不明瞭で、P18精査後に確認された穴である。P20は本来2つの穴と思われるが、埋土が一連の堆積であり、とりあえず1つの穴として扱う。重複関係はP21の最初の堆積よりもP20の堆積が新しく、P19とP20をP18が切っている。埋土はP18が黒褐色土主体、P19が暗褐色土主体。P20からP21の上層が褐色主体。P21埋土（最初の堆積）は焼土の少量混入する黒色土主体である。P20の埋土の中ほどのところから刀子（第32図49）が横になった状態で出土している。

堅穴南東部にあるP22とP23は円形または楕円形の浅い穴で、埋土は堅穴のD層に類似する土が入り込んでいる。またかまどの東側にP24、西側にP25が存在し、かまどの崩壊土J層が流れ込んでいる。

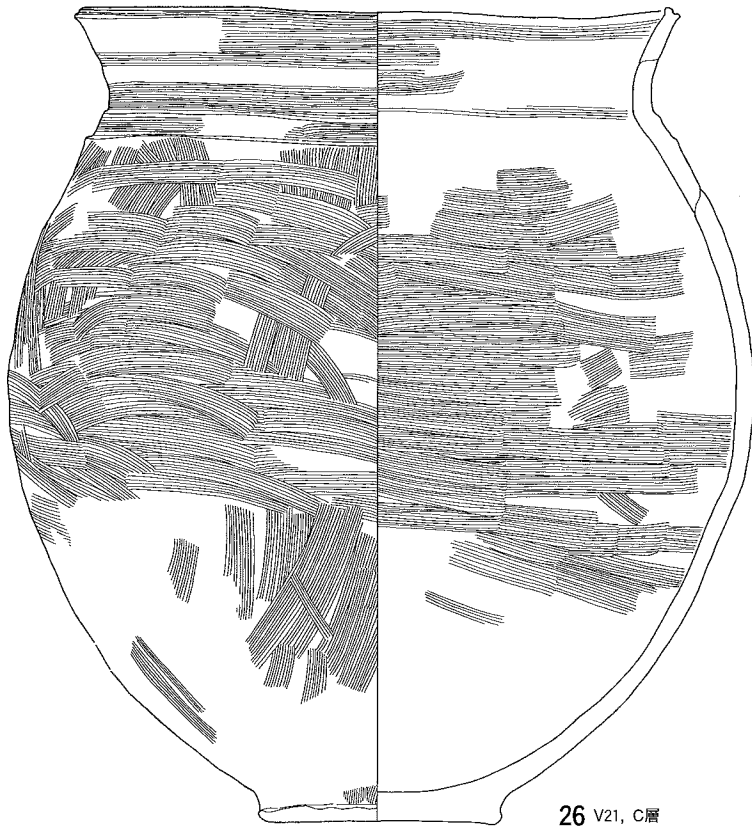
遺物出土状況 遺物は堅穴内部の各層から出土しているが、A層の上部、A層の中部からの出土は少なく、A層の下部、B層、C層からD層、J層、床面、が多い。床面からの遺物は、中央部の硬い床部分が比較的少なく、堅穴の壁際近くの床面から多く出土した。また、乳白色の粘土塊が南部の床面から、朱の粉末の集中部分が北西部隅と南部の床面で、炭化木材が南西部P4付近で確認された。出土した土師器にも朱彩の施文があるものや、器面や割れ口に朱の痕跡が認められるものがある。ほかに堅穴東部の床面から砥石、南部の床面から管玉、南西部床面からガラス製丸玉、土製紡錘車が出土している。この南部から南西部の床面上のC層、D層の土を篩にかけたところ、破片を含めて7点のガラス製小玉が発見された。また、支柱穴のP1付近や南西部床面に、朱が散布している箇所が確認されているが、出土した土器の破片の器面や割れ口にも朱の痕跡の認められるものがある。

須恵器 第27図1～3は須恵器である。1は坏蓋の周縁部でC層から出土。2は床面から出土した高台付坏で、底部は丸底で、外面は周縁に太く短い高台を付している。底部下端は高台下端よりもやや高い。全体に器壁がやや厚く、灰褐色のやわらかい感じの焼成である。3は長頸瓶または長頸壺の口縁部で、A層から出土した。

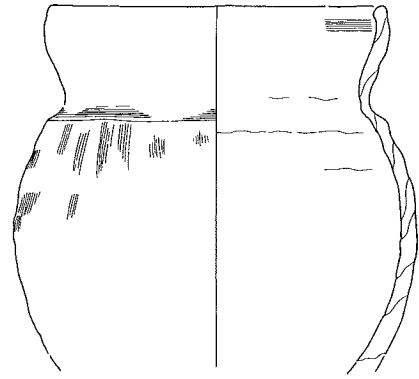
土師器坏 第27図4～第31図46は土師器である。4～22は土師器の坏である。このうち4、11、12、20、21は堅穴の埋土中に掘り込まれた、根菜類の攪乱からの出土である。出土した坏のほとんどは内面が黒色処理されている。4～6と10は深い丸底の坏で、4と10は小形の坏、5と6は大ぶりの坏である7～9、11、13、16、18、22はやや浅い丸底の坏で、13は小形の坏で口縁部と体部境の内外の段が明瞭である。12と15、17は底部が平底になる。17は小形の坏である。調整は4と5が内外ヘラミガキで4は底部外面を篋削りし、5は底部外面をハケメ調整の後ヘラミガキしている。6、9、14は内外ヘラミガキで低部外面をハケメで調整している。7、12、13、15、19、20、21は内外ヘラミガキ、8、10、11、22は内外ヘラミガキで底部外面をヘラケズリしている。18は内外ヘラミガキで底部外面はナデ、16、17は口縁部外面をナデ、内面は全てヘラミガキ、底部外面はヘラミガキまたはヘラケズリである。



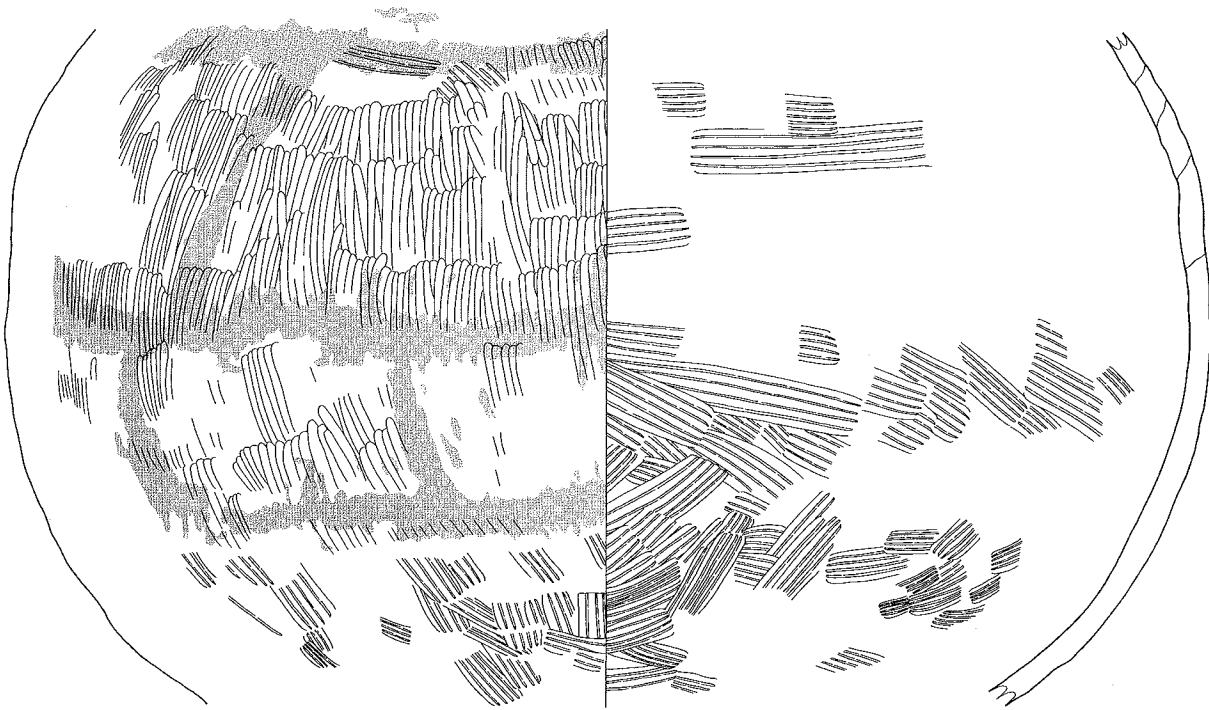
第27図 RA613堅穴住居跡出土土器 (1)



26 V21, C層



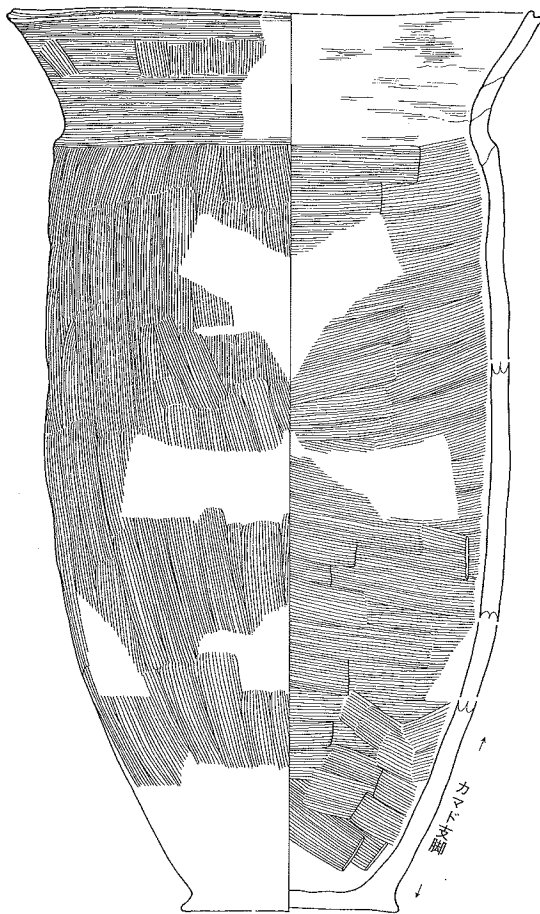
27 V24, C~D層



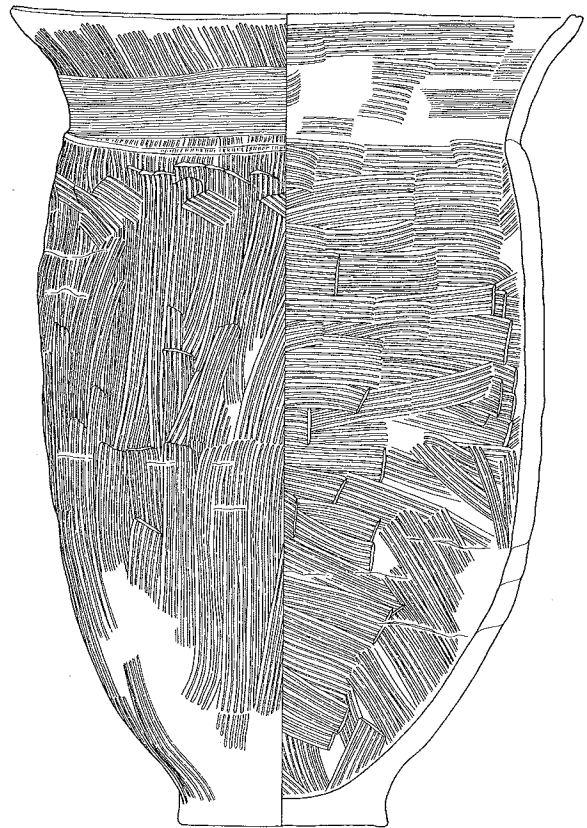
28 煙道 (S19), J層 (朱彩)

0 1:3 10cm

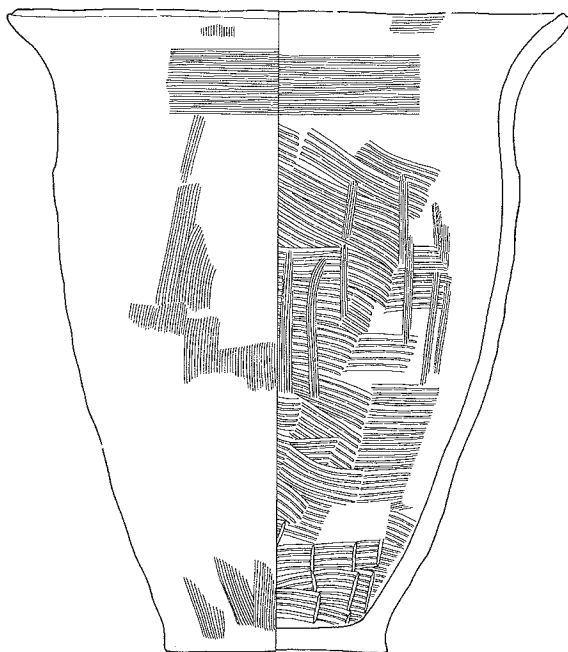
第28図 RA613竪穴住居跡出土土器 (2)



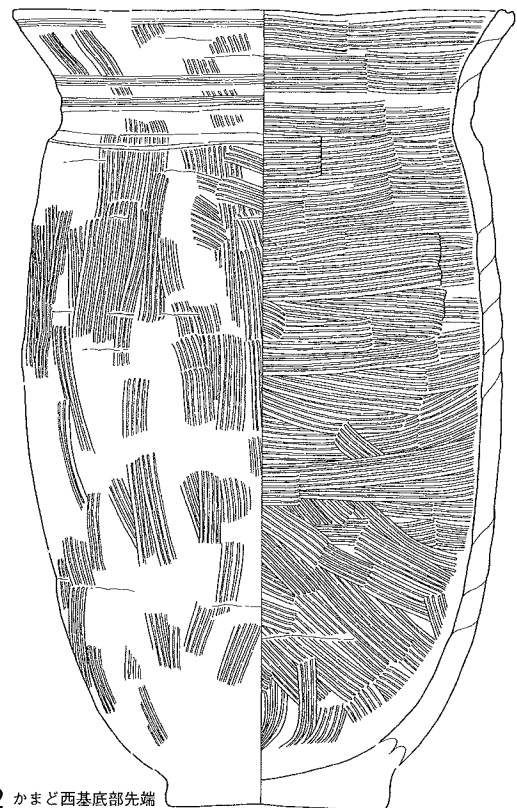
29 T20, カマド火床面+A層



30 R21, D層 (No.12)



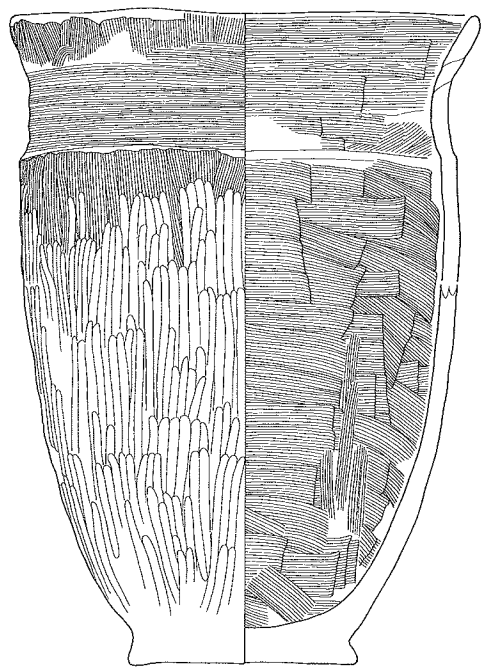
31 U24床面
(床No.20)



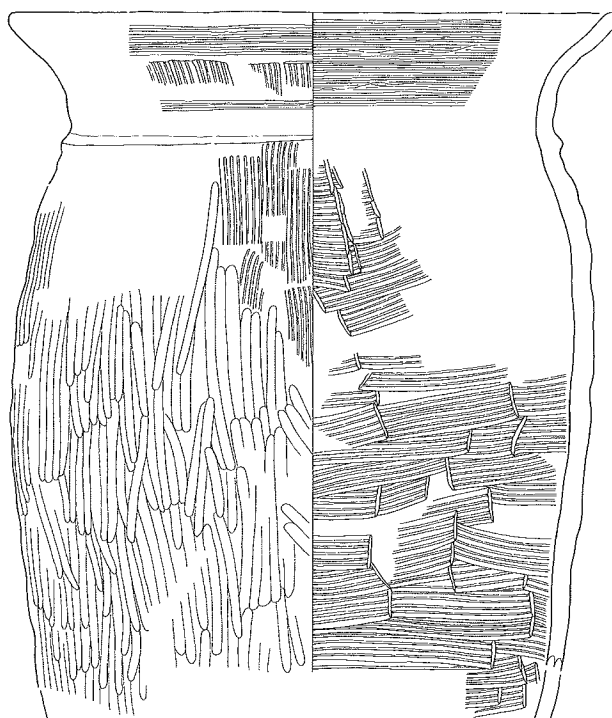
32 かまど西基底部先端

0 1 : 3 10cm

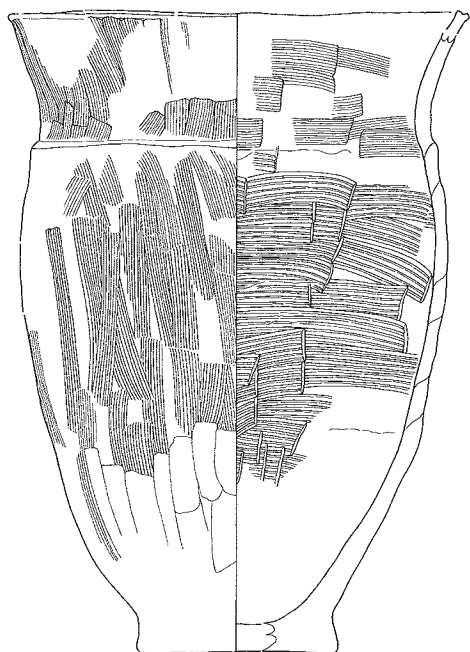
第29図 RA613竪穴住居跡出土土器 (3)



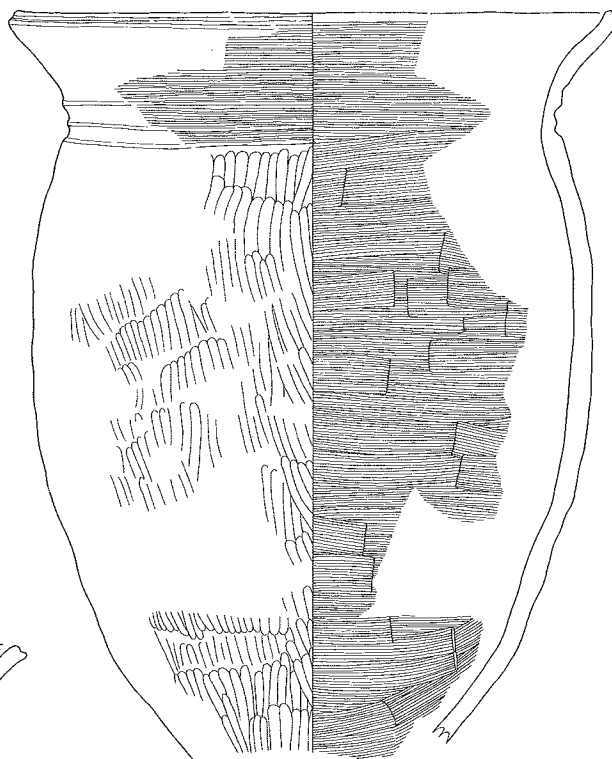
33 V20, A層下~C層



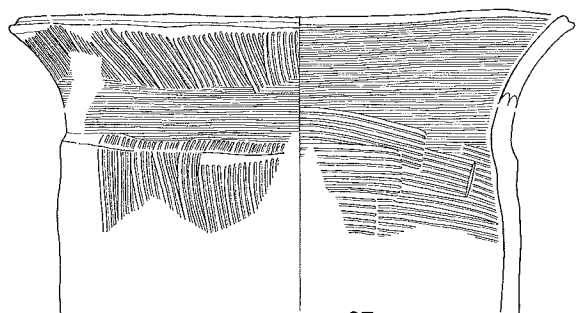
34 S19, D層 (No5)



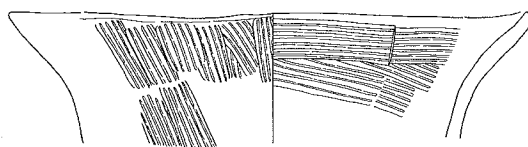
35 T20, 床面



36 U21, C~D層



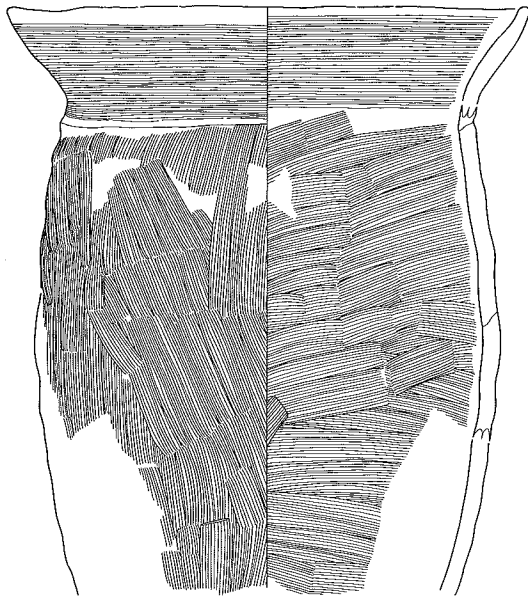
37 U23, C層
(No.17)



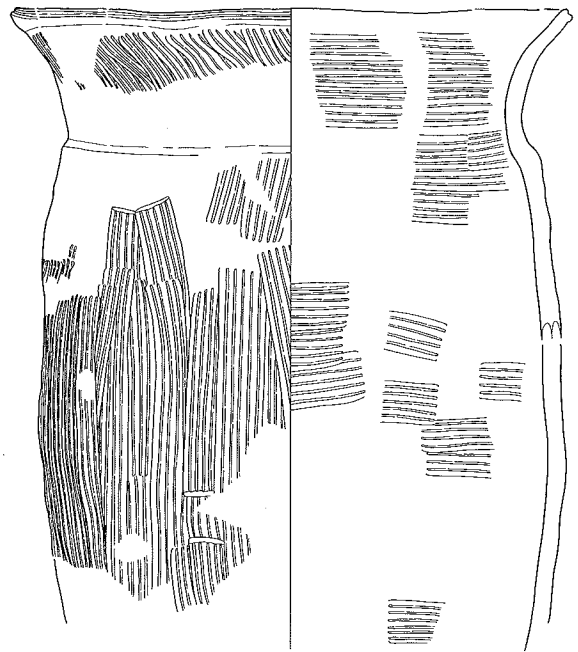
38 U25, C~D層

0 1 : 3 10cm

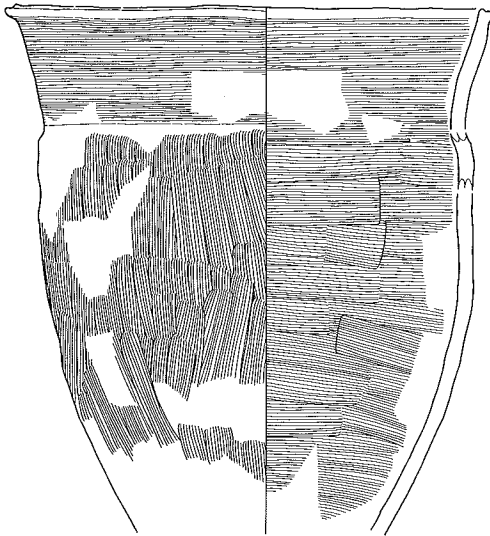
第30図 RA613堅穴住居跡出土土器 (4)



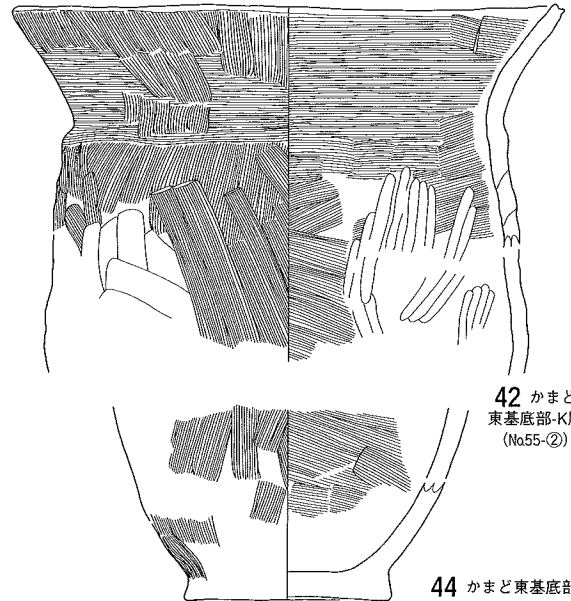
39 T22, 床面



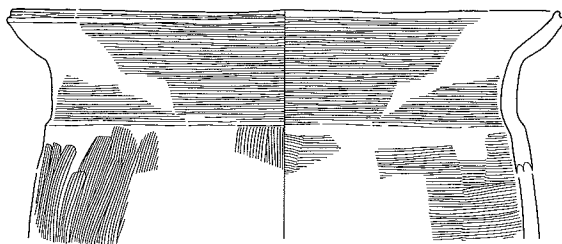
40 P19, 埋土



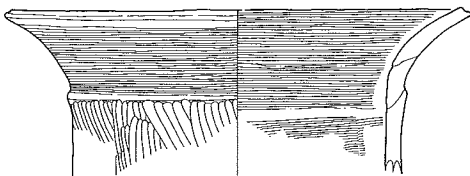
41 W22, C層



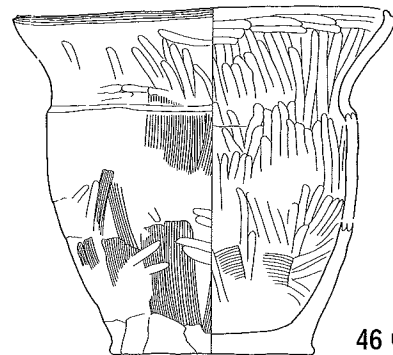
42 かまど
東底部-K層
(No.55-②)



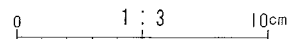
43 T20-A層



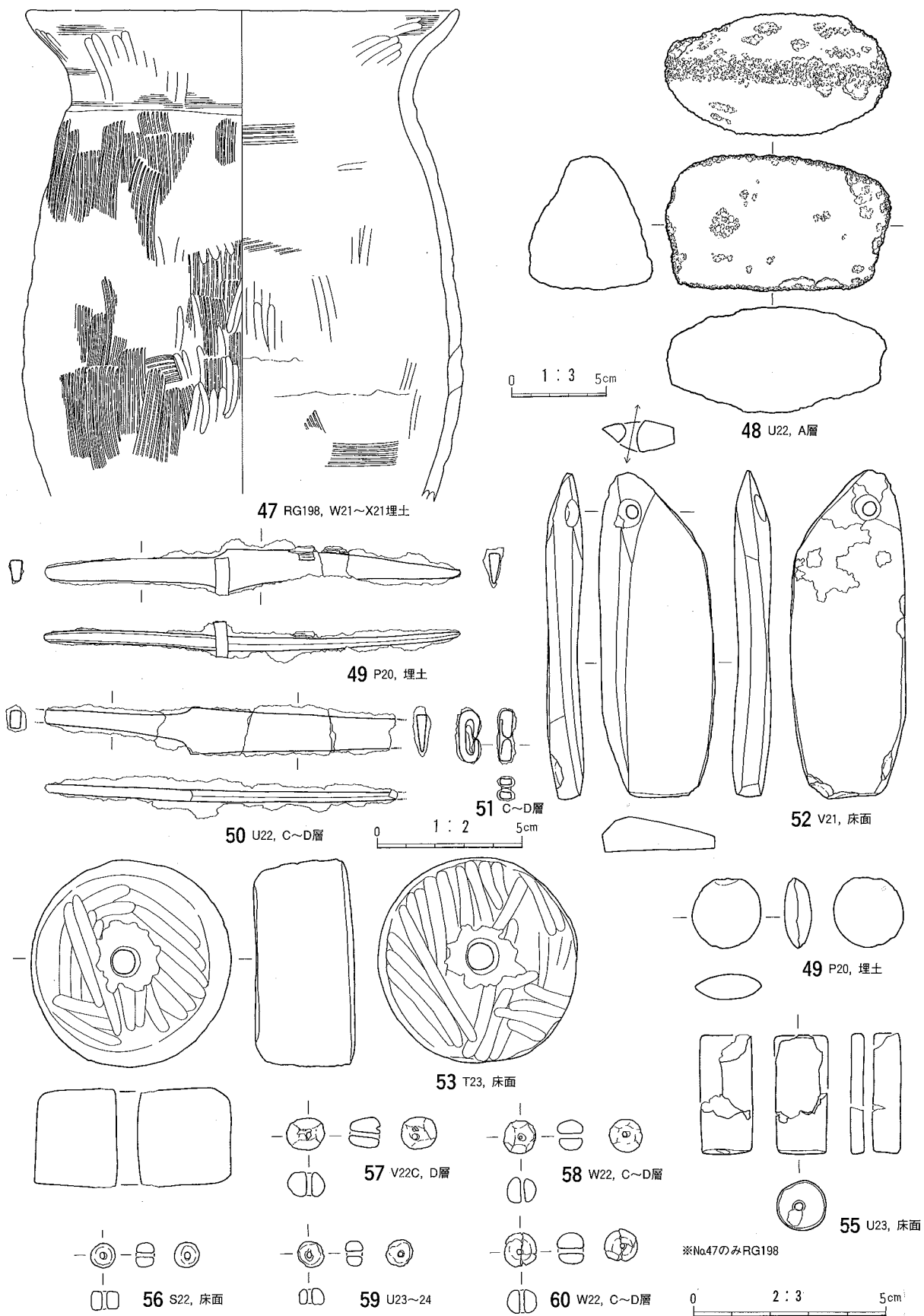
45 V23床面
(床No.29)



46 U19-C~D層



第31図 RA613竪穴住居跡出土土器 (5)



第32図RA613竪穴住居跡、RG198溝出土遺物

- 壺** 第27図23は壺の口縁部から体部上端部である。口唇部外側に沈線をもち、口縁部は朝顔形に開く。口縁部から頸部にかけての外面に3段の段が認められる。体部両面にナデ、口縁部外面は縦にヘラミガキ調整している。
- 球胴甕** 24～28は球胴甕である。24～26は口唇部に沈線を有し、24は口縁部外面が3段になり、25はやや壺に近い。24と26は内外ナデ調整、25は口縁部外面が縦のヘラミガキ、体部外面がナデ、内面は全てヘラミガキである。27は小形の球胴甕で口縁部が内湾し、外面がナデ調整される。口縁部の割れ口に朱が付着している。
- 朱彩土器** 28は朱彩の施された大形の球胴甕である。煙道内部のJ層より出土した。内面はハケメ、外面はヘラミガキで、上下2段に間隔が異なる格子目状の文様が描かれている。底部近くの部分はかなり強い火力を受けた形跡があり、その部分は灰色に変色している。
- 甕** 29から45は長胴の甕である。このうち29の甕底部はかまどの支脚に用いられていたものであり、体部から口縁部にかけてはA層から出土しており、同一個体で接合されたものである。32はかまど西袖先端部から床面にかけて、つぶれて出土した甕である。42はかまど東側袖の先端部に倒立して設置されており、44の甕底部は42の内部に落下していたもので、42と44は同一個体の可能性がある。
- 口縁部から体部まで残存するもののうち、31は底部から頸部に向けて外傾する体部をもつが、ほかには細長い倒卵形あるいは砲弾形の体部で、体部最大径が体部中位または中位よりやや上の位置にあり、底部周縁部が外に張り出す器形である。底部内面は丸底とはならず、狭いながらも平坦になるものが多い。頸部と体部境の段は外面のみに認められるものが多いが、33と43の内面には外面の段に対応する器面の変化が認められる。32と36は頸部から口縁部が3段に作られている。また、29、30、32、35、36、37、38、40、41、42、43、45、46は口唇部上面に浅い沈線がある。このなかには内湾、または外ソギ様の口唇部外側に細い粘土紐を貼り付けて、この沈線のある口唇部の形状をつくっているものがある。器面の調整は29、39、41、43が内外ナデ調整である。30、32、37、38、40は内外ハケメ。31は内面刷毛目で外面はナデ調整。33と36、45は内外ナデ調整で体部外面は縦方向にヘラミガキされている。34は内外ハケメで周縁部を内外ナデ調整、体部外面を縦にヘラミガキしている。42の内面はナデ調整のちヘラミガキ。外面はナデ調整とヘラケズリである。
- なお、30の甕底部内面には朱の痕跡が残る。
- 小形甕** 46は小形甕で、口縁部は内湾し、口唇部に沈線をもつ。頸部外面に段があり、低部下端が張出す。体部は短く、低部に向ってすぼまり、体部上半に最大径をもつ器形である。調整は内面、外面ともにナデ調整とヘラミガキである。
- 磨石** 48は火山岩を使用した磨石である。縄文時代の石皿や磨石によく使用される石で、この竪穴住居の遺物ではないかもしれない。全体に軽い摩擦痕が認められ、周縁部などには敲打痕がある。
- 鉄製品** 49と50は鉄製の刀子である。50は南東部のC～D層から、49は南西部P20の埋土中から横位で出土した。木質部はほとんど残っていないが、49には柄の縁金が残っている。
- 砥石** 52は携帯用の砥石で、表裏、側面とも磨面であり、上端部に孔が穿たれている。
- 土製品** 53は土製の紡錘車で、南西部床面から正位で出土した。上面と下面はヘラミガキで、側縁部

はヘラケズリで調整されている。54は基石状のものである。

玉類 55は碧玉製の管玉である。紐を通す孔の位置が偏在している。南西部床面とその直上のC層・D層から砕けて散在して出土した破片が接合されたものである。56は青色のガラス製丸玉で、南西部床面より出土した。57～60は土製の丸玉である。他に図示していないが、C層、D層中から青色のガラス製小玉（第3表）7点（破片含む）が出土している。このうち5点は破砕した破片である。

台帳No	挿図No	グリッド・層位	種別	大きさ(径×厚・高/単位mm)	備考
1	55	U 2 3 - 床面	管玉	1 2 . 8 × 3 0 . 8	碧玉・濃緑色・接合
3	56	S 2 2 - 床面	丸玉	6 . 4 × 5 . 0	ガラス・藍色
11	57	V 2 2 - C ~ D層	丸玉	9 . 5 × 8 . 5	土
12	58	W 2 2 - C ~ D層	丸玉	8 . 6 × 7 . 2	土
10	59	U 2 3 . 2 4 - 埋土	丸玉	7 . 2 × 4 . 7	土
13	60	W 2 2 - C ~ D層	丸玉	9 . 2 × 7 . 1	土
4	—	U 2 3 - D層	小玉	4 . 0 × 2 . 3	ガラス・青色
8	—	W 2 1 - C ~ D層	小玉	3 . 9 × 2 . 0	ガラス・青色
2	—	V 2 1 - C ~ D層	小玉	3 . 8 × 2 . 1	ガラス・青色・破砕
5	—	V 2 3 - C層	小玉	— × 2 . 2	ガラス・青色・破砕
6	—	V 2 3 - D層	小玉	4 . 0 × 3 . 0	ガラス・青色・破砕
7	—	V 2 3 - D層	小玉	3 . 9 × 2 . 5	ガラス・青色・破砕
9	—	埋土	小玉	3 . 8 × 2 . 9	ガラス・青色・破砕

第6表 玉類計測表

土坑群(第34図)

確認数 今回の調査区では土坑は12基検出された。個々の遺構の詳細は第4表にまとめてある。重複関係では古代のRA613竪穴住居跡、中世のRG198溝跡を切り、近世後期以後のRG158・159
時期 溝に切られている。重複関係や埋土の土質から、中世から近世の土坑である。平面が長方形や円形を基調とすること、埋土が人為堆積であることや、RD1995では骨粉が検出され、RD2005のように土層断面でマウンドの存在が判明したものがあることなどから、多くは墓坑と考えられる。RD2003は馬の歯が確認されており、馬を埋葬したものと考えられる。

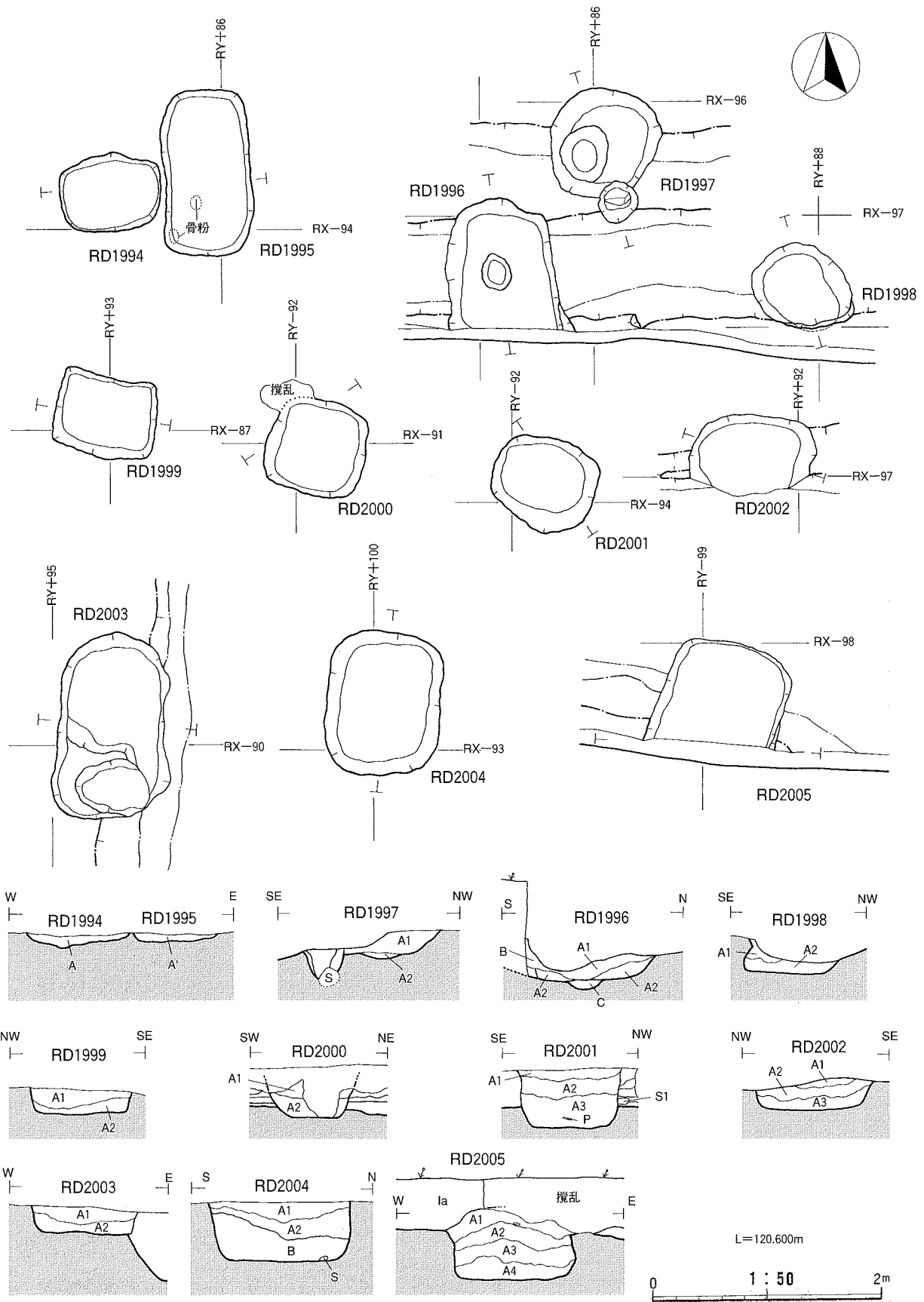
本調査区南側の第23次・第26次調査区では350基以上の墓坑が検出されており、しかも重複が著しい。墓坑内部からの出土遺物はほとんどないが、周辺からの陶磁器類により、13世紀から15世紀にいたる墓坑群としている（岩手県埋蔵文化財センター 2002）。

RD番号	プラン	規模 (cm)		重複	埋土	遺物・備考
		長軸×短軸×深さ	方位			
1994	隅丸長方形	89×68×18	W6°S		人為・黒褐色土・褐色土混合	
1995	隅丸長方形	146×78×7	N0°	RA613を切る	人為・暗褐色土・褐色土混合	骨粉
1996	隅丸長方形	115以上×100×34	N3°W	P2を切り、RG518・519に切られる	人為・A暗褐色・褐色混合B褐色土・暗褐色土混合	
1997	円形	96×94×24	N16°E	P3・RG519に切られる	人為・褐色土・黒褐色土混合	
1998	不整形	83×76×27	N33°W	RG518に切られる	人為・褐色土・黒褐色土混合	
1999	長方形	90×70×23	W11°N	RA613を切る	人為・黒褐色土主体	
2000	隅丸方形	85×85×33	N17°E	RA613を切る	人為・黒褐色土・褐色土混合	上部攪乱
2001	隅丸長方形	94×82×52	W22°N	RA613を切る	人為・黒褐色土主体	
2002	隅丸長方形	112×72×27	W5°N	RA613を切り、RG519に切られる	人為・暗褐色土主体	
2003	隅丸長方形	162×103×26	N4°E	RG198を切る	人為・黒褐色土	馬の歯
2004	隅丸長方形	128×100×52	N7°E		人為・暗褐色土・黒褐色土混合	
2005	隅丸長方形	110以上×114×46	N20°E	RG518に切られる	人為・暗褐色土主体	マウンド有

第7表 土坑一覧

RG198溝跡 (第32図・35図)

位置 調査区を南北に貫く溝で、南側延長部分は第23次調査 (岩手県埋蔵文化財センター 2002) で確認されている。また、第18次調査 (同2001) で確認されているRG043溝と連続する可能性がある。この溝はRA613竪穴住居跡南東隅を切り、RD2003土坑、RG518、519溝跡、RC004掘立柱列に切られる。北東側に確認されたRG200と連続する可能性もあるが、接続部が大きく攪乱されているため、新旧関係や同時性は確認できなかった。表土直下の褐色シルト層上面で確認され、幅2.1m～2.5m、深さ56cm～64cmで、断面形は底の丸いV字形ないしは逆台形である。埋土は黒褐色土の自然堆積である。遺物は埋土全体から土師器甕の破片が出土したほか、RA613竪穴住居跡と切合い箇所埋土から第32図47の土師器甕が出土し、図示していないが溝南半部の埋土上部から青磁の細かな破片が1点出土している。埋土の土質から、溝跡の時期は中世から近世である。第23次調査区ではこの溝跡の延長が検出されており、近世陶磁器と銭貨が出土している。



第34図 中世以後の土坑

R G 2 0 0 溝跡（第35図）

調査区北東部に東西に続く溝跡で、東方延長部分は第26次調査（岩手県埋蔵文化財センター2002）で確認されている。幅1 m～1.2m、深さ35 c mで、断面はレンズ状の浅い溝である。表土直下の褐色シルト層上面で確認している。埋土は黒褐色土主体で自然堆積である。埋土から土師器甕などの破片が出土している。埋土の土質から中・近世以後の溝である。第23次調査区ではこの溝の東方延長部分が確認されており、近代磁器が出土している。埋土はR G 198に近似するが、溝が埋没したのは近代のことと考えられる。

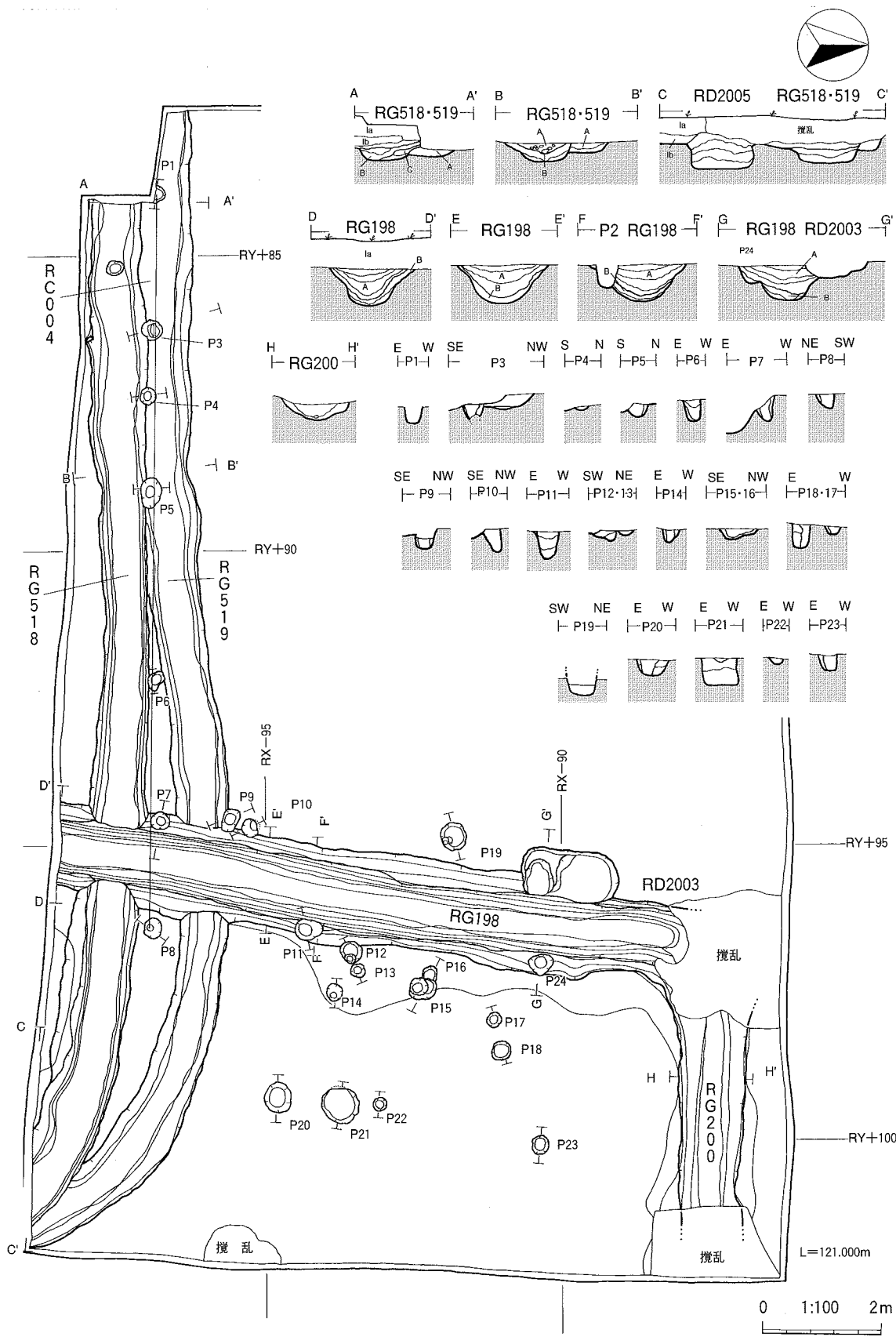
R G 5 1 8 ・ 5 1 9 溝跡（第35図・37図）

調査区南部に東西方向に検出された溝跡で、R G 518がR G 519を切っている。2条の溝は古代のR A 613竪穴住居跡、中・近世のR G 198溝跡、R D 1996～1998土坑、R D 2005土坑、中世以後のR C 004掘立柱列を切っている。溝の大きさは双方とも幅80 c m～1.2m、深さはR G 518が30 c m内外、R G 519が15 c mから20 c mで、断面は底の平らな逆台形である。底面に酸化鉄分が沈殿している。R G 518のA層は砂礫混じりの暗褐色砂土で人為堆積。B層は暗褐色土主体で自然堆積である。R G 519埋土は暗褐色土主体の自然堆積である。R G 518のA層からはガラス瓶の破片や近世、近代陶磁器。第37図3の鍔が出土している。B層からは土師器と近世陶磁器の破片が出土しており、昭和期まで溝の形状を留めていたことがわかる。R G 519の埋土からは土師器破片と第37図2の肥前の染付皿が出土している。この皿は内面見込に五弁花文、周縁に墨はじきの桜花文がある。遺構の重複関係や埋土の特徴、出土遺物などから、2条の溝は近世後期以後の溝である。

区画整理施行前の本調査区南側には、この2条の溝に近いところを、同様の方向で水田用水路が流れており、溝底部の酸化鉄分の沈殿の様子から水がながれていたものとみられ、近世以後の水田用水の溝と推定される。

R C 0 0 4 掘立柱列跡、柱穴群（第35図）

位置・重複 調査区内で21口の柱穴または柱穴状ピットが確認されている。R A 613竪穴住居跡やR G 198溝跡と重複する柱穴は、竪穴住居跡埋土を切り、P 24はR G 198溝跡に切られている。R G 519と重複するものはこの溝に切られている。多くの柱穴は規則性がなく、建物跡を構成するものか否か不明である。柱穴のうち1、3、5、6、7、8が掘立柱列を構成している。柱列の方位はW 1° Nを示し、確認された柱列の総延長は柱穴の芯々で12.36m、柱間は5間で西から2.3 m、2.7m、3.2m、2.4m、1.76mで、不規則である。柱穴の掘方埋土は黒褐色土と褐色シルトの混合土、柱痕跡は黒褐色土主体である。柱穴内からの出土遺物はないが、遺構の重複関係から中世から近世の掘立柱列と柱穴群である。

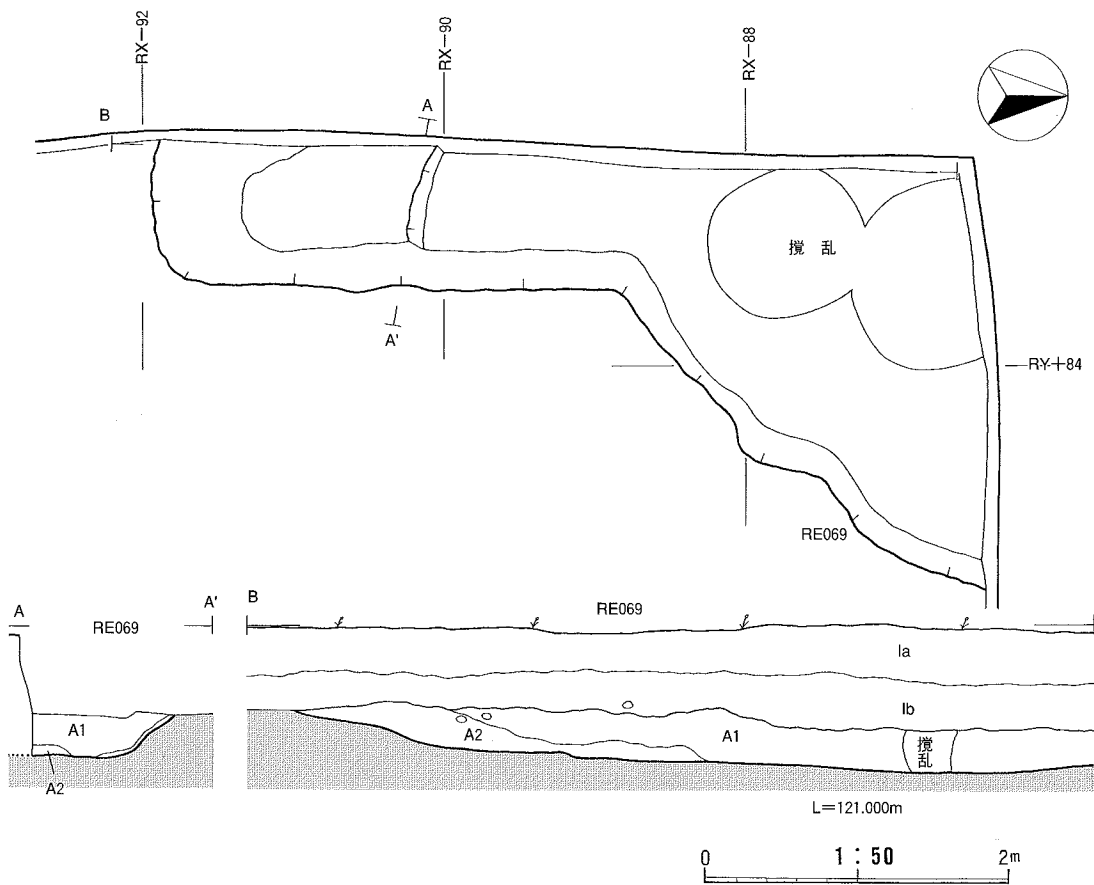


第35図 中・近世の溝跡・掘立柱列跡・柱穴群

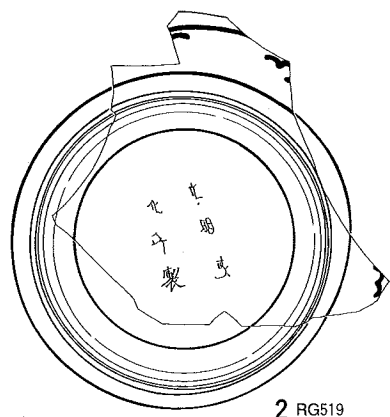
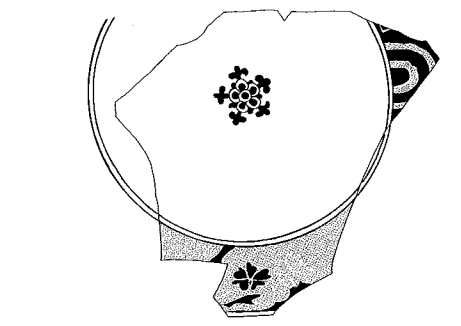
RE069 竪穴 (第36図・37図)

調査区北西部の隅に確認された遺構で、大半が調査区の外に伸びる。確認部分では南北5.35m、東西2.73mあり、深さは25cmから35cmである。南側部分が入口状に張り出しており、とりあえず竪穴としたが、調査範囲内では柱穴などは全く見当たらない。大きな土坑のようでもあり、全体像は不明確である。埋土の大半は、攪乱に浸透した雑排水等により青灰色に変色していたが、自然の土色を確認できた部分では、暗褐色土が主体で褐色シルトが混入する人為堆積土である。埋土はあまり硬くない。埋土中から近世陶磁器、鉄製品が出土している。

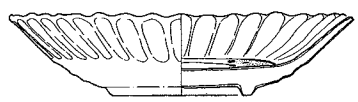
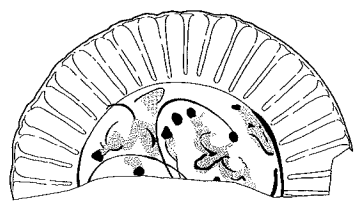
第37図1は肥前の染付菊花皿で17世紀代の製品。ほかに近世後期の益子窯の土瓶、相馬大堀窯系の灰釉湯呑碗等の破片が出土しており、近世後期以後の遺構である。



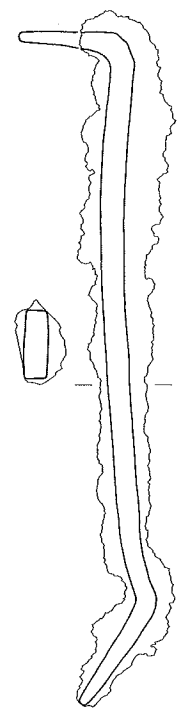
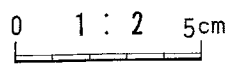
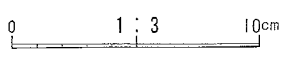
第36図 RE069 竪穴



2 RG519



1 RE069'



3 RG518

第37図 近世遺物

(3) 調査のまとめ

今回の調査では古代の大形竪穴住居跡、中世～近世の溝跡、中世から近世の土坑群、掘立柱列、近世の竪穴、近世後期から近代の溝跡を調査した。中世以後の遺構については周辺部で広範囲に確認された遺構群のごく一部分であり、ここでは古代の大形竪穴住居跡を中心に述べてみたい。

竪穴住居跡

台太郎遺跡ではこれまでに600棟を越える奈良・平安時代の竪穴住居跡が発掘調査されているが、今回確認された竪穴住居跡は、本遺跡内のみならず、盛岡市内及び周辺地域の奈良・平安時代集落遺跡でも規模が最も大きな竪穴住居跡である。かまどを北西壁の中央に造り、左右1対の土師器甕を焚口に据え付け、かまど本体は粘土を積んで構築している。煙道は削り貫き式である。屋根を支える支柱穴は3間×3間の配置で、四隅の柱穴が大きく深く、柱列四辺の間の柱穴は小さく浅い。東西の両側柱列の柱穴と壁際の周溝とは、細い仕切状の溝で連結されている。

かまど

仕切状の溝

この溝は、奈良時代等の比較的大形の竪穴住居跡によくみられる施設であり、これまでは間仕切りの痕跡、あるいは床の根太の圧痕等の指摘もあったが、この溝の機能については確定していなかった。今回調査ではこの点を意識して、柱穴から溝までの土層を縦断して観察した。その結果8箇所のうち7箇所の土層断面で、溝の埋土を柱穴掘方が切っていることを確認できた。これら7箇所の柱穴ではいずれも柱痕跡が認められ、溝の埋土は硬く人為堆積であることから、柱が立っていた時点では溝は完全に埋められていたことになる。また、西側の壁下の周溝は杭を打ち込んだような凹凸があり、仕切り状の溝の埋土を切っていた。この仕切り状の溝が間仕切りの痕跡であった場合、溝の中から壁材が立ち上がり、それが立ち腐れや抜取りであれば、その痕跡が、溝の埋土中や溝の底面に残らなくてはならないが、実際の観察では認められなかった。また、床根太の直接の痕跡ということも、溝の中と柱部分が共存しない以上、この溝の中に根太がはまっていたか、根太をはめ込んだという考え方も成り立たないことになる。

では何のための溝なのか。この竪穴の床面は竪穴構築時に約10cmから15cm掘り下げ、土を詰め、固めて構築されている。3間×3間の支柱穴に囲まれた範囲の床面は最後まで土間であったらしく、支柱穴列の外側床面よりもはるかに硬い。竪穴構築時点では、土を入れて搗き固めた床はこのように硬質ではなかったと思われる。このため、板張りの床と床上の重量が根太にかかり、軟弱な床面が沈まないようにする必要が生じたと思われる。つまりこの溝は、根太の直接下になる部分を溝状に掘り込み、内部に締まりのよい土を入れて搗き固めた、一種の地業とは考えられないだろうか。

構造

この竪穴住居は支柱穴が3間×3間の正方形に配列される構造で、屋根が方形造りの可能性もあるが、各柱列の柱間のとり方などから南北棟の入母屋か寄棟の屋根と考えられ、東西が梁間方向、南北が桁行方向の柱列となる。そして竪穴南側中央の張り出しの位置や、これに対応する梁間中央の広い柱間から、南側妻入りの構造をとっていたと考えられる。この竪穴住居の平面は土間と床張部分を柱列で明確に分けており、これを廂付の掘立柱建物に置き換えてみれば、

支柱穴に囲まれた部分は建物の身舎部分に、東西の側柱外側の床張部分は廂部分にあてて考えることができよう。尚、堅穴の埋土の観察から、この住居は廃絶後、あまり長く経過しない時期に、堅穴の窪みを完全に埋め戻している。

土器と年代・居住者

土師器 堅穴住居の内部からは豊富な土器類が出土している。須恵器の高台付坏、土師器の有段丸底の坏類、球胴壺、球胴甕、朱彩球胴甕、頸部有段の長胴甕、小形甕がある。坏類は体部と口縁部境の外面に段または沈線を有し、口径10cmに満たない小ぶりの坏から、口径17cmを越える大ぶりなものである。内面は滑らかな弧状の物が多いが、中には外側の段に対応する器面の変化が認められるものもある。ほとんどが内面黒色処理され、丁寧にヘラミガキされている。

須恵器 球胴壺、球胴甕、長胴甕、小形甕の口唇部上面に細く軽い沈線が認められるものや、口縁部外面に段を有するものなど、盛岡以北地域の特徴を持つものが目立つ。床面出土の須恵器高台付坏は底部が丸みをもつ器形で、底部下端は高台下端よりもやや高い。宮城県赤井遺跡のⅡ1期～Ⅱ2期に属する須恵器高台付坏B（矢本町教委2001）に類似するが、本堅穴住居跡の須恵器は大きさに比べて器壁がやや厚く、高台がより太く短い特徴がある。須恵器、土師器の様相から、本堅穴住居跡の年代は、7世紀後葉から8世紀前葉までのいずれかの時期であろう。

年代

土器以外では鉄製の刀子、土製紡錘車、碧玉製管玉、ガラス製丸玉、小玉、土製丸玉がある。管玉は破碎・散乱した状態のものが接合され、ガラス製小玉にも壊れたものが多い。

居住者

堅穴住居跡は大規模であり、12本の支柱をもつしっかりとした構造であること。さらに須恵器の高台付坏や大ぶりの朱彩球胴甕、玉類等の保有から考えて、この村落、あるいは周辺域の有力な首長層の居住が推定される。

この堅穴住居は多くの遺物を残したまま廃絶し、まもなく入念に埋め戻されている。ここには堅穴住居跡に後続する古代の遺構は重複しておらず、どのような理由で完全に埋めなければならなかったのか不明である。

(室野秀文)

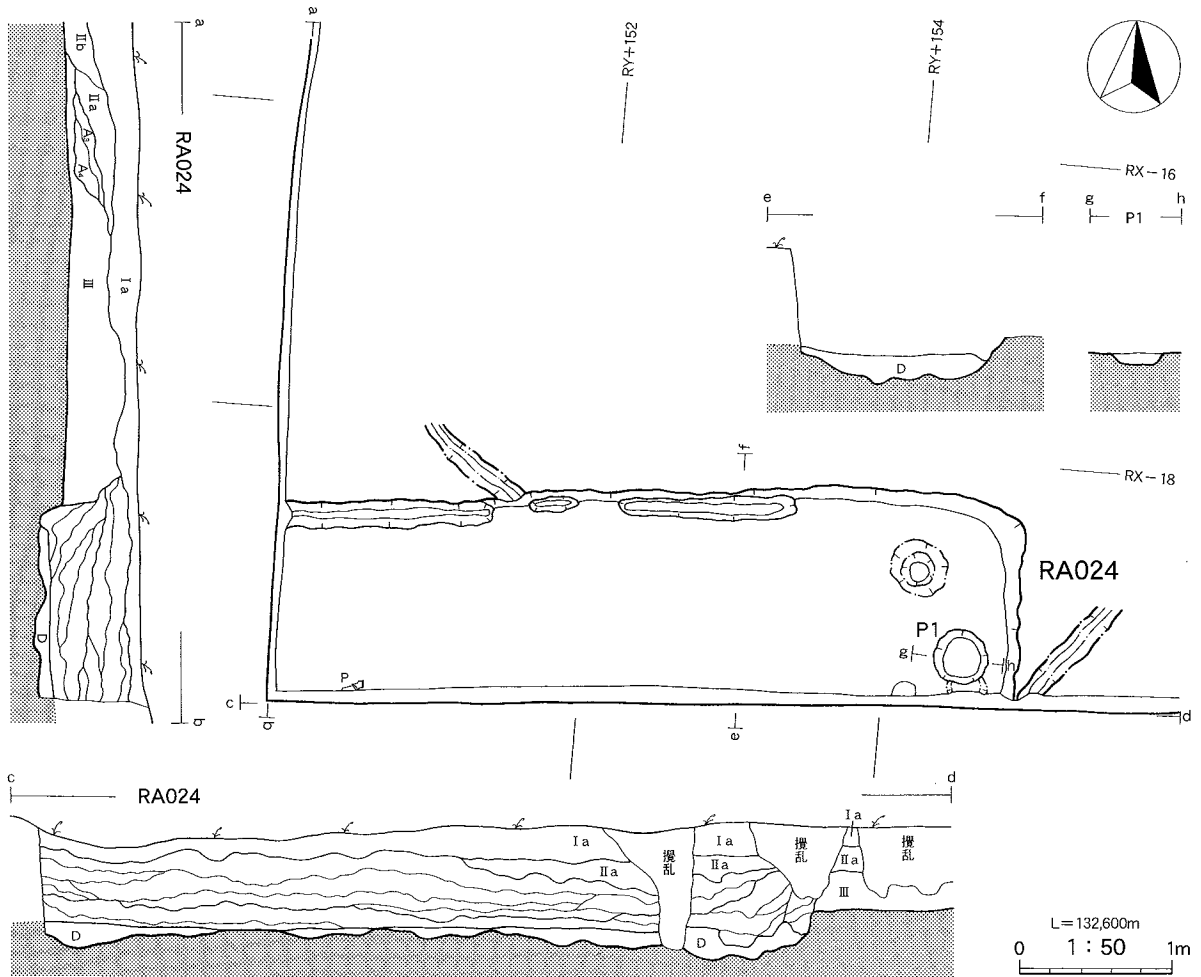
引用・参考文献

- 矢本町教育委員会 2001『赤井遺跡Ⅰ－牡鹿柵・郡家推定地－』矢本町文化財調査報告書第14集
- 岩手県埋蔵文化財センター 2001『台太郎遺跡第18次発掘調査報告書』盛岡市・(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 岩手県埋蔵文化財センター 2002『台太郎遺跡第23次発掘調査報告書』盛岡市・(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 岩手県埋蔵文化財センター 2002『台太郎遺跡第26次発掘調査報告書』盛岡市・(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 岩手県埋蔵文化財センター 2002『台太郎遺跡第35次発掘調査報告書』盛岡市・(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 岩手県立博物館 1982『岩手の土器』岩手県立博物館
- 星川正甫 1874 「盛岡砂子」『南部叢書第一冊』1927南部叢書刊行会
- 杉沢昭太郎 2003 「中世の盛岡市向中野」『紀要XⅩⅡ』(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 津嶋知弘 2004 「志波城と蝦夷社会」『古代蝦夷と律令国家』高志書院
- 八木光則 2004 「爾薩体・幣伊の土師器－7・8世紀の土師器編年試案－」『古代東北北海道研究会第3回研究会資料』

3. 古代の遺構、遺物

RA 024 竪穴住居跡 (第 47 図)

位置 調査区南端部 平面形 方形 規模 東西 4.85 m以上・南北 1.3 m以上
 重複関係 RA 027 竪穴住居跡を切る。 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
 埋土 自然堆積で、層相の違いによりA～Dの4層に大別される。A層は、黒色土を主体とする。B層は褐～暗褐色土を主体に、褐色土を粉状に含む。C層は褐色土を主体とする。床面構築土D層は暗褐色～褐色土を主体に、褐色土を粉状に含む。
 壁の状態 検出面から床面までの深さは0.07～0.13 mで、ほぼ直壁である。



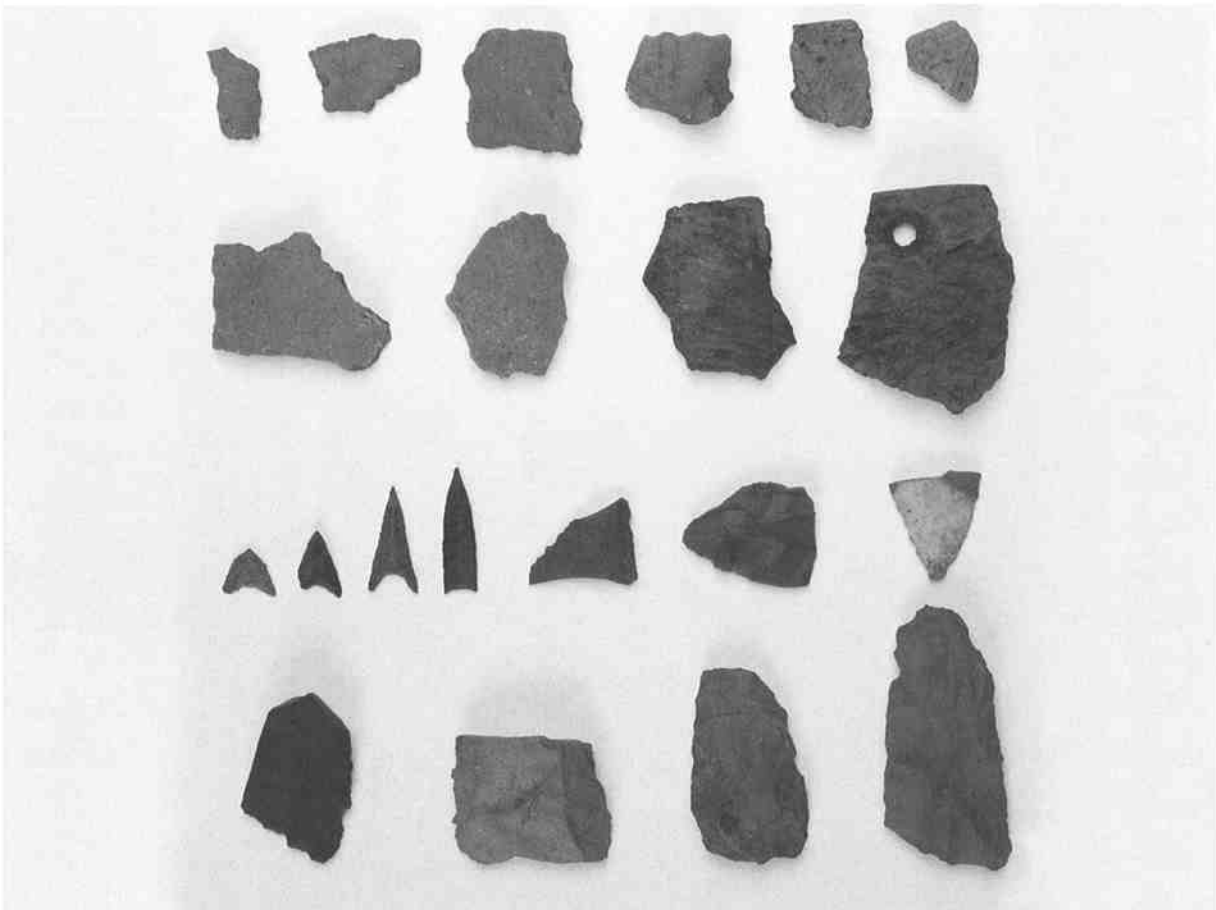
第47図 RA024竪穴住居跡



第48図 RA024竪穴住居跡出土遺物



宿田遺跡調査区全景



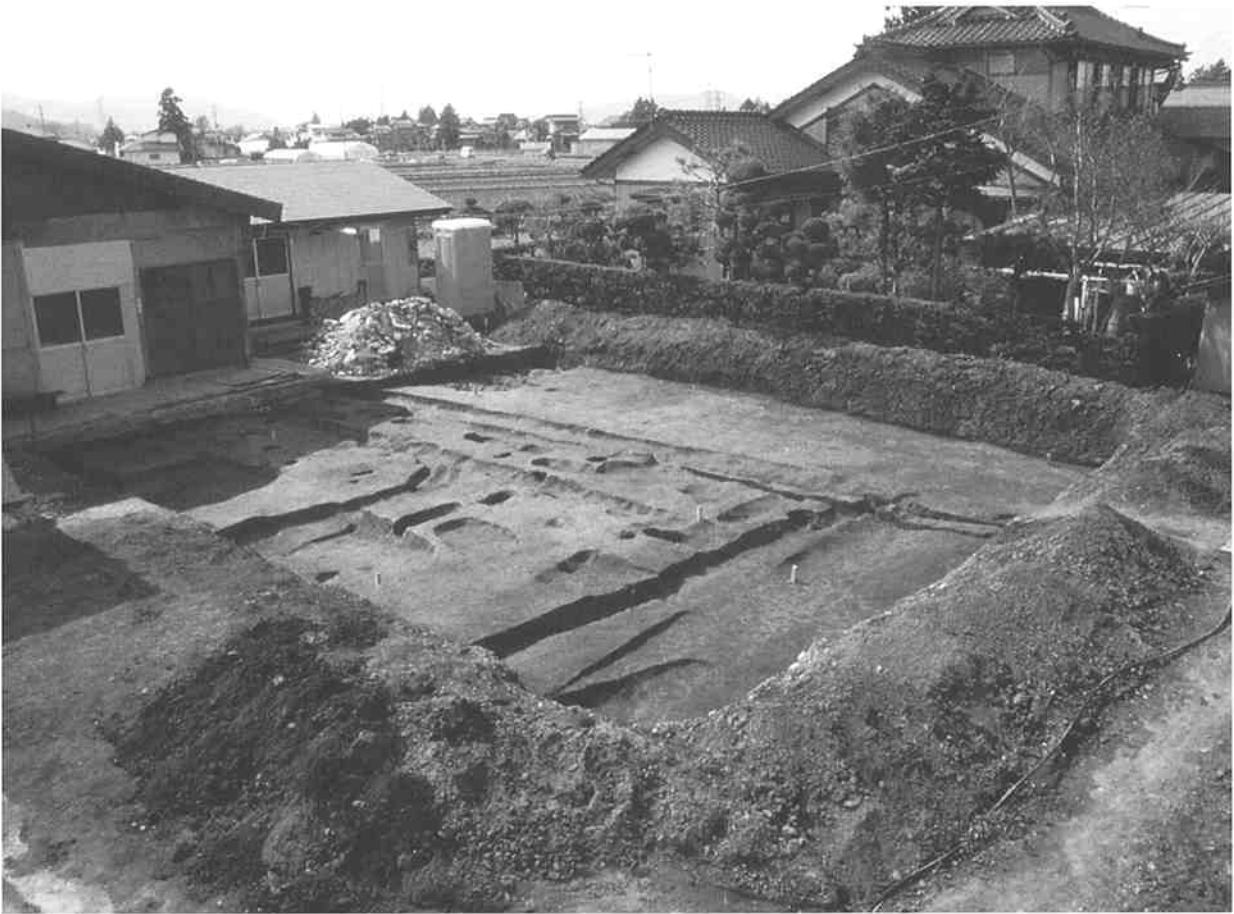
宿田遺跡出土土器・石器



二又遺跡調査区全景



二又遺跡出土土器



内村遺跡調査区全景



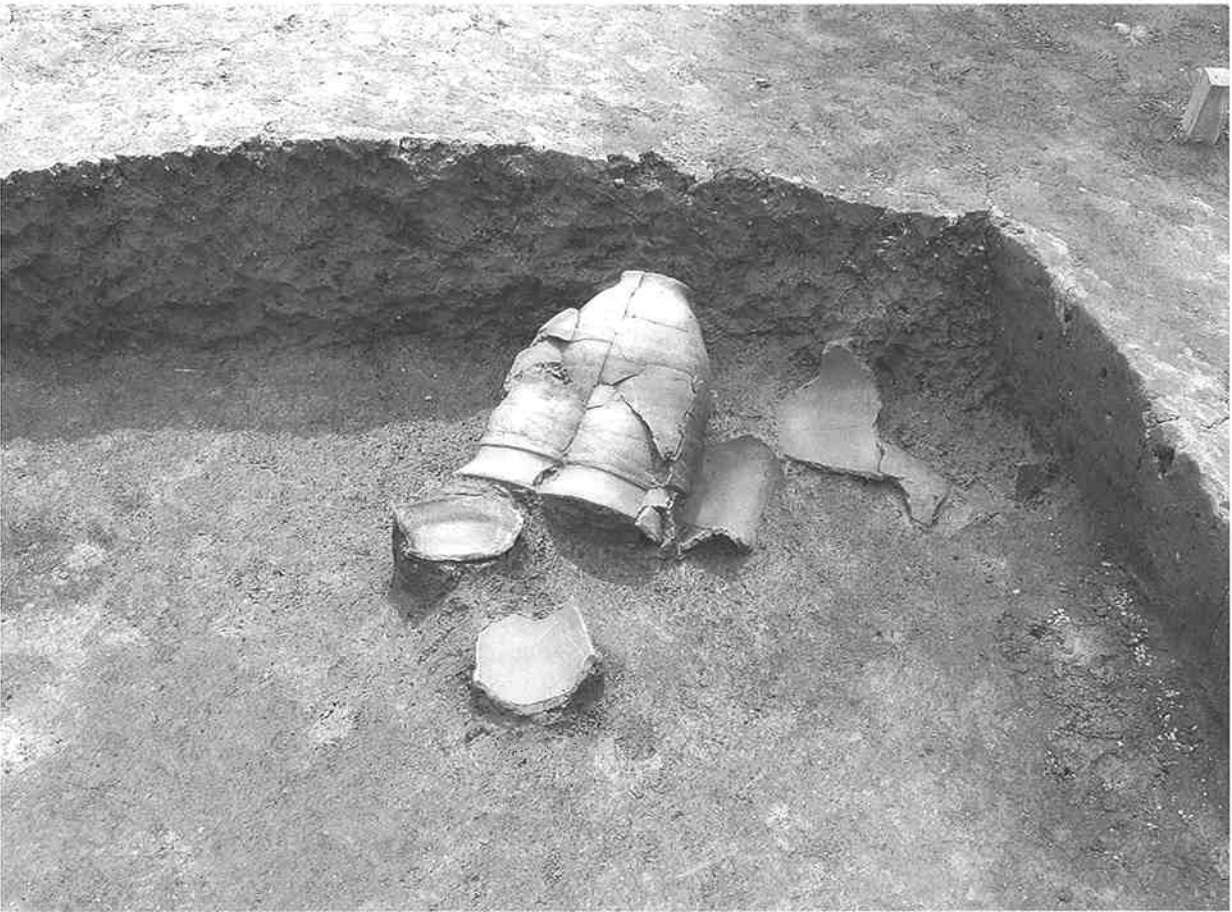
常滑大甕



台太郎遺跡調査区全景



台太郎遺跡RA613竪穴住居跡



台太郎遺跡土器出土状況



台太郎遺跡出土土器

報告書抄録

ふりがな	もりおかしないいせきぐん							
書名	「盛岡市内遺跡群」							
副書名	平成15・16年度発掘調査報告							
編著者名	佐々木亮二・室野秀文 他							
編集機関	盛岡市遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1 TEL019-635-6600							
発行年月日	2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しゅくだいせき 宿田遺跡	いわてけんもりおかしぜん 岩手県盛岡市前 九年一丁目4-14	3201		39° 42′ 39″	141° 07′ 02″	第6次 2003.07.10～ 2003.08.05	70.8	個人住宅建設
ふたまないせき 二又遺跡	いわてけんもりおかししも 岩手県盛岡市下 飯岡1-35-1			39° 40′ 19″	141° 07′ 06″	第5次 2003.09.01～ 2001.09.18	77.5	個人住宅建設
うちむらいせき 内村遺跡	いわてけんもりおかししも 岩手県盛岡市下 飯岡2-108			39° 40′ 15″	141° 07′ 16″	第3次 2003.04.17～ 2003.09.19	183	個人住宅建設
だいたろういせき 台太郎遺跡	いわてけんもりおかしなか 岩手県盛岡市向中 野字向中野35-26			39° 40′ 51″	141° 08′ 33″	第55次 2004.08.01～ 2004.09.19	202.6	個人住宅建設
しわじょうあと 志波城跡	いわてけんもりおかしなか 岩手県盛岡市中太 田吉原27-1、2、3			39° 41′ 02″	141° 06′ 33″	第94次 2003.07.17～ 2003.08.04	163	個人住宅建設 (現状変更)
	いわてけんもりおかしなか 岩手県盛岡市中 おおたほうはちやう 太田方八丁86-2			39° 41′ 02″	141° 06′ 33″	第95次 2004.09.25	76	個人住宅建設 (現状変更)
おおだてちやういせき 大館町遺跡	いわてけんもりおかしだいじん 岩手県盛岡市大新 町209-3の一部			39° 42′ 48″	141° 07′ 03″	第77次 2004.11.08～ 2004.12.18	570	学術調査
のこいせき 野古A遺跡	いわてけんもりおかしなか 岩手県盛岡市向中 野字野古52-1,2			39° 40′ 45″	141° 08′ 04″	第26次 2004.06.23	36	個人住宅建設
所収遺跡名	種別		主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
宿田遺跡 第6次	集落跡	縄文時代	土坑	8	縄文早期土器・石器			
		古代	円形周溝・溝跡	4	土師器			
二又遺跡 第5次	集落跡	平安時代	竪穴住居跡	1	須恵器・あかやき土器・土師器			
		平安時代以降	溝跡	3				
内村遺跡 第3次	集落跡	平安時代	竪穴住居跡	1	土師器			
		古代以降	溝跡 掘立柱建物跡	2 1				
台太郎遺跡 第55次	集落跡	奈良時代	竪穴住居跡	1	土師器・須恵器		これまでに類例のない大型竪穴住居跡が確認された	
		中世～近世	土坑 溝跡	12 4				
志波城跡 第94次	城柵跡	古代	溝跡	3	土師器			
		近世以降	掘立柱建物跡	2				
志波城跡 第95次			なし		なし			
大館町遺跡 第77次	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡	1	縄文中期土器・石器			
			土坑	4				
野古A遺跡 第26次	集落跡	奈良・平安時代	なし		なし			

盛岡市内遺跡群

平成15年度・16年度発掘調査概要

発行 盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866
岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1

印刷 有限会社 グローカル
〒020-0043
岩手県盛岡市中川町2-51